

つらさも忘れられて、まづ涙ぞおつる。

「月かげは見し世の秋にかはらぬを隔つる霧のつらくもあるかな
霞も人のとか、昔も侍りけることにや」など聞えたまふ。

源氏の君は藤壺の宮に對して、「私は帝の御前に伺候して、今まで夜を更し、大へん遅くなりました」と申しあげなされる。折しも月光花やかに照り渡つてゐるのについても、往昔桐壺院御在世中は、かやうなよい晩には、管絃の遊びなどを面白くなさつて、華美に御もてなしなされたこともあつたと追想なされるについても、同じその禁中であるとはいへ、今は甚だそんな様子もなく、物淋しく變つてしまつたことが多くて悲しい思ひがする。さて藤壺の宮は、

このへにきりやへだつる雲の上の月をはるかに思ひやるかな
といふ一首の歌を、命婦を使として源氏の君に申しあげなされる。中宮の御様子も仄かながら、懐しう洩れ聞くので、心辛らさも忘れで、先づ感涙を催しなされる。

さて源氏の君の御返事には、

「月かげは見し世の秋にかはらぬを隔つる霧のつらくもあるかな
霞も人の心なりけりとか古歌にも詠まれてゐるが、隔つる心の恨しさは、昔も今も變らぬことと見えます」などと申しあげられる。

○このへにきりや云々の歌——九重に秋霧が立ち隔てをしてゐるのでありませうか、雲の

○同じ御垣の内ながら——同じ禁中のうちでありながら。
○このへにきりや云々の歌——補欄参照。
○命婦して聞え——命婦を使として、源氏にお傳へになる。
○つらさも忘れられて——源氏の心である。
○月かげは見し世の云々の歌——補欄参照。
○霞も人の云々——細流抄に「山櫻見にゆく道をへだつればかすみも人の心なりけり」の歌をあぐ霞も人の心なりといへることくに、霞もへだつる事は人の心のごとく也といふのである。源注拾遺に、契沖の説は、今案、此引歌は後拾遺春上に、藤原隆経朝臣歌にて、下句人の心ぞ霞なりけると有。隆経は後冷泉院の比の作者にて、此物語より後の歌なる上、引やうもたがひたればさるる古歌の

有けるを引けるなるべしと。

上の月光を唯だ遙か遠くに思ひやるばかりでありませうの意。裏には、主上と私藤壺との間には、何かの隔てが出来て、帝の御威光をただ遙かに御想像申上げなされるばかりでありますの意が含まれてゐる。湖月抄の説には、「雲の上の月とは天子の御上を云ふ也。桐壺帝の御時と、今の藤壺の御身のあらぬ様になりたる事をへだつるとの給ふなり」とあるが、これは稱名院の御説である「このへにきりやへだつるとは、あつく霧のふりたる心也。しかも下には九重をかかへたる詞也」とあるのが安當であると思ふ。○月かげは見し世の秋に云々の歌——月の光は、昔見た秋の月光と、何の異りもありませんが、ただそれを隔る霧がつかいことでありませうの意。即ち裏の意は、主上の御様子は昔ながらの懐しい御心でゐらせられますが、ただその間を隔る弘徽殿一派の人々の心が憎らしい。いや隔てをなすのはそればかりでなく、あなた藤壺の隔心をお持ちになるのもやはり同じく憎くらしく思ひます。

「このへにきりやへだつる云々」といふ、「このへに」の「に」文字は、作者が特に意を用ひたものと思ふ。ここでは霧が八重九重に重るといふ意になしたので、もしこの際に「このへを」と「を」文字を使つたならば、禁中を露骨にさすことになり、恐縮に思つたからであらう。

宮は、春宮を飽かず思ひ聞えたまひて、よろづの事を聞えさせ給へど、深うもおぼし入れたらぬを、いとうしろめたく思ひ聞え給ふ。例はいと疾く大殿籠れるを、出て給ふまでは、起きたらむと思すなるべし。うらめしげ

○宮は——藤壺は。
○よろづの事を——東宮に別れを惜まれて、萬事のことどもを言ひ聞かせられるが。
○深うもおぼし入れたら

に思したれど、さすがにえ慕ひ聞え給はぬを、いとあはれと見奉り給ふ。

中宮藤壺の宮は、東宮を飽かず可愛ゆく思召されて、別れるに臨み、萬事のことどもを言ひ置きなされたが、東宮はまだ何分にも御幼少でゐられることとて、母宮中宮の御注意を、心に深くも思ひ込まれないのを、母宮は頗る氣にしてゐられる。ふだんは何時も早く御就寝になるのを、今日は母宮のお歸りになるまでは起きてゐようと考へられたのであらう。まだ起きたままで、母藤壺のお歸りあそばすのを怨めしさうにしてゐられるが、さすがにお歸りの後を追うてお慕ひなさることなくゐられるのを、母藤壺は大へんいぢらしく見なされた。

出で給ふまでは——中宮の御退出である。参内も退出も夜であることは常のことどもである。

大將は、頭の辨の誦じつる事を思ふに、御心のおに、世の中煩はしう覺え給ひて、かむの君にも音づれ聞えたまはで、久しうなりにけり。初時雨い

つしかとけしきだつに、いかがおぼしけむ。かれより、木枯の吹くにつけつつ待ちしまにおぼつかなさの頃も經にけりと聞え給へり。

大將源氏の君は、頭の辨が口吟した「白虹日を貫けり、太子おちたり」の句を思ひ出だされ

ぬ——東宮冷泉院は深くも考へてゐられない頃はなきである。
○例はいと疾く云々——東宮はふだんは早く御寝になるのが。
○出で給ふまで——今夜は藤壺の御歸りになるまで。
○うらめしげに思し云々——東宮は藤壺のお歸りを怨めしさうに思召すが、流石に後を追つて慕ひなさることなくゐられるのを、藤壺はいぢらしく思しめす。

○御心のおに——太子が己が罪の子であるから、頭辨の太子長ちたり（初時雨）の句から、心の鬼にせめられなさるのである。
○かむの君にも——臙月夜向侍のもとにも。
○いつしかと——いつの間にか晩秋らしい景色となつたので。
○かれより——臙月夜の方から。

○木枯の吹くにつけつつ云々の歌——補欄参照。
○聞え給へり——源氏の君に申しあげられた。

るについても、太子は藤壺の腹にやどつた己が子であるといふ一件で、良心の呵責にあひ、世の中もうるさく思しめされるので、臙月夜の向侍の君をも久しく御訪問にならなかつた。さうしてゐる間に、いつのまにか初時雨が降りだして晩秋の景色となつた。このとき臙月夜の君はどうお思ひになつたのか、彼女のもとから、木枯の吹くにつけつつ待ちしまにおぼつかなさの頃も經にけりと一首の歌を、源氏のもとにさしあげられた。

○御心のおに——湖月抄には、「源の御身に臙月などの事の不義あれば、世の中わづらはしき也」とあるが、これは、「白虹日を貫けり、太子おちたり」の句から思ひ出だされるのであるから、矢張、太子は藤壺と源氏との間の御子であることを、心の鬼に責められなさるのである。
○木枯の吹くにつけつつ云々の歌——木枯の吹くについても、何かの音信もあるものかと待ち暮してゐましたが、どうなさつてゐられるかと覺束なく思つてゐた時節もはや過ぎ去つてしまひました。今はただ耐へがたい情のために、おしてお伺ひいたします意。この歌の「木枯の吹く」「木枯」について、「久しく文の音づれもなくてこの葉のかれたるを木枯のふくとはよみ給へるなり云々」と言つてゐる古注はひがごとである。又本居宣長は玉の小櫛に、「木枯は木葉をふきやる物なる故にその便に、源氏君のおとづれの言の葉を待しよし也」とあるも、あまり考へすぎてゐる。

○あなたがちに忍び云々——一切に人目を忍んで書かれた臘月夜の御心持も嬉しいので。

○御使とどめさせ——使に來た者を、源氏が暫らく待たせて。

○誰ばかりならむと——この來た手紙の主は、誰であらうかと膝をつきあひながらささやいた。

○聞えさせてもかひなき云々——御手紙をさしあげても、御返事のないのに驚りて、此頃はがつかりして一向音づれなかつたのである。「くづほれ」は、がつかりすること。

○身のみものうきほどに——細流抄に、數ならぬ身のみ物愛く思ほえて待たるるまでになりける哉」とある歌の意。

○あひ見ずてしのぶるころの云々の歌——補欄参照。

○心の通ふとならば——君と我と同じ心ならば、

お互の物思ひも忘れる事が出来ませう。詠めに長雨をかけてゐる。

○こまやかになりけり——思はず知らず、手紙の文句がこまやかになつた。眞の感情よりも、つひ手紙の方がしんみりとした。

○かやうに驚し——臘月夜のやうに、源氏の疎遠を恨んでよこす女は他に澤山あるが。

○情なからずうちかへりごち給ひて——源氏が愛想よく返事をしておい

て。

○中宮は——藤壺は。

○御はての事——桐壺院崩御一周忌の御法事。

○御八講——中宮のおぼしめして、法華經八卷を僧侶に講せしめられること。

○御國忌——桐壺院の命

折もあはれに、あなたがちに忍び書き給へらむ、御心ばへもにくからねば、御使とどめさせ給ひて、唐の紙ども入れさせ給へる御厨子、あけさせ給ひて、なべてならぬを選び出でつつ、筆なども心ことに引きつくり給へる氣色艶なるを、御前なる人々、誰ばかりならむとつきじろふ。「聞えさせても、かひなきものごりにこそ、無下にくづほれにけれ。身のみものうきほどに、あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての秋のしぐれとや見る

心の通ふとならば、いかにながめの空も、物忘れし侍らむ」など、こまやかにになりけり。かやうに驚し聞ゆるたぐひ多かめれど、情なからずうちかへりごち給ひて、御心には深うしまさるべし。

時節柄晩秋の物哀れなときであるのに、非常に人目を忍んでお書きなされた臘月夜の、御心持も嬉しかつたので、源氏の君はその御使を待たせておいて、唐紙どもを入れてある御厨子をお聞きになり、何ともいへない立派な紙を選び出だされ、筆なども格別に選擇なさる様子は、頗るあだめいたものであつた。それで源氏の御前にゐた人々は、誰からの御手紙であのやうに氣をくばつて返事を書かれるのかと、彼等はお互に膝をつきあひながら叫いた。源氏の君からの御返事の文には、「私から手紙をさしあげましたが、御返事がないのに驚りてしまひ、すつか

りがつかりしておたよりをいたしませんでした。つまりは吾が身は物愛くなりまして、君のおたよりをこそ待たれるほどになりました。

あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての秋のしぐれとや見る

お互ひの心がもし通ふものであるならば、長雨の頃に物思ひに沈んで、ながめ暮してゐる物愛い思ひも慰められるであります。思はず知らずのうちに手紙の文句が眞情のこもつたこまやかなものとなつてしまつた。

この臘月夜の君のやうに、源氏の疎遠を怨んでよこす女は、他にも澤山あるのであつたが、そのたびごとに、源氏の君は無情なさまにならぬやうな御返答をなされて、御自身の御心には深くも思ひ込まれなかつた。

○あひ見ずてしのぶるころの云々の歌——この頃降る時雨は、これ私があなたのお目に懸らないで戀ひしたつてゐる涙が雨となつて降つてゐるのです。然るにあなたはそれとも氣づかず

に、ただ普通の時雨とご覺になつてゐられるのが怨めしうございます。中宮は院の御はての事にうちつづき、御八講のいそぎを、さまざまに心づかひせさせ給ひけり。十一月の朔日ごろ、御國忌なるに、雪いたう降りたり。大將殿より宮に聞えたまふ。

別れにしけふはくれども見し人に行きあふほどをいつとたのまむ

日。○別れにしけふは云々の歌——補欄参照。
 ○なからふるほど云々の歌——補欄参照。
 ○思ひなしたるべし——源氏の怒目からであらう。
 ○すぢかはり——一風かはつた當世風の立派な書風ではないけれども、普通の人のものとはすぐれて。
 ○今日はこの御事云々——源氏の君は、今日はこの手紙を見ても、藤壺の宮のことはすつかり忘れて。
 ○ぬれく行ひたまふ——泣くく故院命日の佛事を行ひなさる。「行ふ」といふことは、この時代にあつては、必ず佛事に關することを「行ふ」といふ。

いづこにも、今日は物悲しう思さるるほどにて、御かへりあり。
 ながらふるほどはうけれど行きめぐり今日はその世に逢ふ心ちして殊につくろひてもあらぬ御書きざまなれど、あてに氣高きは思ひなしたるべし。すぢかはり今めかしうはあらねど、人には異には書かせ給へり。今日はこの御事も思ひけちて、あはれなる雪の雫にぬれく行ひたまふ。

藤壺の中宮は、故桐壺院一周忌の御法事に引きついで、法華八講の法會の準備に、いろく心を用ひてゐられた。十一月の朔日頃は故院の命日であるのに、雪がひどく降つてゐた。源氏の大将のもとから、藤壺に申しあげなされた。その歌には、

別れにしけふはくれども見し人に行きあふほどをいつとたのまむ
 と。何處の方々も、今日の命日には、誰もみな物悲しく思しめす時であるから、藤壺からも物悲しい思ひをすぐに歌としてお返しがある。その歌は、

ながらふるほどはうけれど行きめぐり今日はその世に逢ふ心ちして
 と。藤壺は格別にとりつくらうてお書きになつたものでもないが、高貴なさまに氣だかく感ぜられるのは、源氏の怒目からであらう。一風かはつた當世風の立派な書風ではないけれども、普通の人は異つて立派に書かせられた。源氏の君は、今日の故院の命日には、この手紙を見ても藤壺のことどもはすつかり忘れて、物哀れな雪の雫に、補をぬらしながら、佛事のことどもを行ひなされる。

○別れにしけふはくれども云々の歌——故桐壺院にお別れいたしました日は、又返つてきました。亡き父帝に又お逢ひ申すのは何時頃であるとのむべきでせうかの意。行きあふの行きに雪の意をもかけてゐる。○ながらふるほどは云々の歌——故帝に別れてから、自分獨り生き残つて暮してゐる月日の間は、この身をつらいものに思ひますもの、その命日に出逢ふ今日は、ありし昔に逢ふやうな心地がして、少しは淋しい心も慰められるやうであります。

○日々に供養せさせ給ふ——八講は五日か八日が普通である。
 ○帙篋——經卷を包むもの。竹に編みて作るすだれ。
 ○さらぬことの清らだに——藤壺は何事にでも美しくなされる嗜みを持つてゐられたから。
 ○花机——花形などを彫刻したる机。經卷、佛具などを載する臺で、うへに打敷などをかける。
 ○先帝——桐壺帝より先の帝で、藤壺の父にあたる。

十二月十餘日はかり、中宮の御八講なり。いみじうたふとし。日々に供養せさせ給ふ御經よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙篋のかぎりも、世になきさまに整のへさせ給へり。さらぬことの清らだに、尋常ならずおはしませば、まして道理なり。佛の御かざり、花机のおほひなどまで、まことの極樂思ひやらる。初の日は先帝の御れう、次の日は母後の御ため、又の日は院の御れう、五卷の日なれば、上達部なども、世のつつましさをえしも憚り給はで、いとあまた参り給へり。今日の講師は、心殊にえらせ給へれば、薪こるほどよりうち初め、同じういふ言の葉も、いみじうたふとし。

○母后——藤壺の母后で
 承嗣なき人である。
 ○院——桐壺院。
 ○五卷の日——第三日である。この日は中日として法華經の提婆品を講ずるのである。
 ○世のつつましき——弘徽殿方に對する遠慮。
 ○今日の講師——八講は日毎座毎に講師も問者も異なる。
 ○新ころほどより——河海抄に「採薪及菓藏隨時恭敬與(法華經)」の句をさす。
 ○御子たちも——桐壺帝の御子達である。
 ○捧物ささげてめぐり給ふに——各々趣向をこらしたものを手向けとなし行道の列に入つて廻り歩く。
 ○大將殿の御用意——源氏の君の態度はまさつてゐた。
 ○常に同じ事のやうなれど——始終同じやうな事を言つて源氏をほめるやうであるが。

賢木 三八二
 御子たちも、さまざまの捧物ささげてめぐり給ふに、大將殿の御用意など、なほ似るものなし。常に同じ事のやうなれども、見奉るたびごとに、珍らしからむをば、いかがはせむ。

十二月の十幾日かに、藤壺中宮の法華八講があつた。そのさまは大へん尊いことであつた。毎日供養なさる御經卷よりはじめ、玉の軸、羅で作られた表装、帙蓋の飾りに至るまで、世間には嘗て見たことが無いほど立派なお作りなされた。生來藤壺中宮は、一寸とした飾りでさへ並大抵ならず立派に整へられる方であつたから、これはましてや當然のことである。佛の御飾り、花机の打敷などまであまりに美しくこしらへられたので、眞の極樂もかくの如きものかと思ひやられるほどである。初日は、先帝の御供養、次の日は御母后の御爲めに行はれ、又その次の日は、桐壺院の御供養である。恰度この日は法華八講の第三日で、中日として法華經の第五卷を講ぜられる日であるから、上達部達も、弘徽殿方一派に對する御遠慮も忘れて、頗る多くの方々が參詣なされた。今日の講師は又格別立派な人だちを選択なされたから、法華經第五提婆品の「採薪及菓藏隨時恭敬與」の句の所から始めて、同じく説く詞も非常に尊いものである。桐壺院の御皇子達は、さまざまの捧物をささげ持つて行道なさるとき、大將源氏の君の御態度などは、やはりすぐれたもので、他に比ぶべきものがない。常に源氏の御姿をほめたたへるやうであるが、君を見奉る度毎に、珍らしく立派に思はれるのであるから、何とも致し方がない。



○帙篋——契沖の源注拾遺に、「細帙篋也。今案、日本紀に黄卷をふんまきとよめり。帙の事なり。されど經には帙といひなれてふむまきといはず。法隆寺の寶物を拜ける中にも此帙篋のいとふるくまぎれなき古代の物と見えたるにつつめる經侍りき」と。○薪こる——源注餘滴に「法華經をわかえし事は薪こりなつみ水くみつかへてそえし」拾遺集「哀傷」とある。

はての日、わが御事を結願にて、世を背きたまふよし佛に申させたまふに、皆人々驚き給ひぬ。兵部卿の宮、大將の御心も動きて、あさましと思す。親王は、なかばの程に立ちて入り給ひぬ。心強う思し立つさまをの給ひて、はつるほどに、山の座主召して、思む事うけ給ふべきよしの給はす。御をぢの横川の僧都近うまゐり給ひて、御髪おろしたまふほどに、宮の内ゆすりて、ゆゆしう泣き満ちたり。

○はての日——八講の最終の日と見える。
○結願——最終の願として。
○世を背きたまふよし——藤壺御自身が出家遁世することを、佛に申しなさる。
○親王はなかばの程に——兵部卿親王は、儀式の中途で、座を立つて中宮の簾中に入つて、お諫め申したのである。
○心強う思し立つ——藤壺は強い決心で發心した由を語つて。
○はつるほどに——儀式の終る頃に。
○思む事——戒律をお受けになる旨。
○御をぢ——母方の伯叔

八講の最終の日は、藤壺御自身の上を最終の願とし、世を背いて出家隱遁する旨を佛に申しあげられたので、これを聞いてゐた人々は、こぞつて吃驚した。兵部卿宮や大將源氏の君は、やはり驚いて思ひもよらないことだと茫然された。中でも兵部卿の宮は、あまりに意外なので儀式の半ば頃に、座席を立つて、藤壺の簾中にお入りになつた。このとき藤壺の中宮は、心強く發心を決心したといふことを仰せられて、儀式も終る頃に、比叡山の座主をお召しになり、

父。
○御髪おろし——頭髪を短く切るのである。

○今はと世を背くほど——いよいよ出家するといふときは。
○親王も——御兄兵部卿宮。
○大方の事のさまも——藤壺の出家なさることだけでなく、周囲の事情も總べて感じ深いさまで。
○故院の御子達は——藤壺の腹でない桐壺院の皇子達。
○昔の御有様を思し出づるに——藤壺の全盛時代のことを思ひ出だされること。
○大將は立ちとまり給ひて——源氏の君は、八講に列席したまま、そこにおとまりになつて、何とも申しあげる言葉もなく、途方に暮れてゐられる。

授戒を受けるといふことを仰せられた。御母方の小父の横川の僧都が中宮の御座近くに伺候して、御髪を短く切り申したときには、宮の内は悲しみ泣く聲で大へんなほどであつた。

○はての日は——これ法華八講の第五日であらう。
何となき老い衰へたる人だに、今はと、世を背くほどは、あやしうあはれるなるわざを、まして、かねて御氣色にも出したまはざりつる事なれば、親王もいみじう泣き給ふ。参り給へる人々も、大方の事のさまも、あはれに尊ければ、皆袖ぬらしてぞ歸りたまひける。故院の御子達は、昔の御有様を思し出づるに、いとどあはれに悲しう思されて、皆とぶらひ聞えたまふ。大將は立ちとまり給ひて、聞え出でたまふべき方もなく、くれ惑ひて思さるれど、「などかさしも」と人見奉るべければ、親王など出で給ひぬる後にぞ、御前にまゐり給へる。

年老いて何といふほど立派な人でなくとも、いさいよく出家隱遁するといふ場合になると、不思議に誰でも物哀れな感が催されるものである。まして藤壺の今度の出家は、今までさうした御様子を少しもあらはしなからず、今突然になさつたことであるからして、御兄の兵部卿の宮も非常におどろいて大へん御歎きあそばされた。又参詣に来てゐられた人々も、藤壺が出家

○などかきしもと云々——源氏はどうしてあんなにまで思つてゐられるのかと世人も怪しむべしと思はれて。

○親王など出で給ひぬ——御兄兵部卿宮が御退出になつた後にと、いふので、極めて人少なさまである。

○御前に——藤壺の御前に。

○いと堪へ難う——源氏が感慨に堪へられないやうに思しめされるが。

○物騒しきやうなりつれば——出家の決心を他人に漏しては、人々が騒々しくいふやうであつたから、さうなつては却つて我が心が亂れるかと心配になつたから、隠しておいたといふのである。

○うちみじろきつつ——身動きをしながら。
○聞き給ふ——源氏の君が。

なさるといふことだけでなく、あたりの様子がすべて身に沁みて尊く感ぜられたので、何れの人々も皆感涙を催してお歸りになつた。桐壺院の御子達は、昔時全盛でゐられた當時の藤壺の様子を思ひ出し、一層物哀れに悲しう思しめされ、皆中宮の御座の間に御訪ねになつた。けれども源氏の大將の、八講の席に列席したまま動きもされず、中宮に申上げる言葉もなく、途方に暮れてゐられたが、かうしてばかりゐては、「源氏の君はどうして、あんなにまで嘆いてゐられるのか」と、世人も不思議に思ふであらうと、君にはお考へになつたので、兵部卿の宮がお歸りになつた後に、君は藤壺の御前に参上なされた。

やうく人しづまりて、女房どもなど鼻うちかみつつ、ところ／＼に群れ居たり。月はくまなきに、雪の光りあひたる庭のありさまも、昔の事思ひやらるるに、いと堪え難う思さるれど、いとよう思ししづめて、「いかやうに思したたせ給ひて、かう俄には」と聞えたまふ。「今始めて思ひ給ふることもあらぬを、物騒しきやうなりつれば、心亂れぬべく」など、例の命婦して聞え給ふ。御簾の内のけはひ、そこら集ひ給ふ人の、衣の音なひしめやかにふるまひなして、うちみじろきつつ、悲しげさの慰めがたげに、

もり聞ゆる氣色、ことわりにいみじと聞き給ふ。

人も歸り去つて、だん／＼と夜も靜かになり、女房衆がところ／＼に寄り集つて、鼻をしみやかにかんでゐる聲がひつそりと聞える。外では月光隈なく照り渡つてゐるのに、雪の白々と光りあつてゐる庭の様子にも、往昔のことどもが思ひやられて、源氏は感慨に堪へられないやうに思しめされたが、惜、その心を靜かに落ちつかせなさつてから、源氏、「中宮には、どのやうにお考へあそばされて、かく俄に出家なされたのでありますか」と、お尋ねあそばされた。すると中宮藤壺の宮は、「今始めて出家を思ひ立つたではありませんが、以前からそのやうなことを申し出でましては、世人が騒々しく言ひ立てるやうでありましたから、若しそなたは却つて私の發心を取り亂されると心配になつたので、隠してゐたのであります」と、例の命婦を使として傳言なされる。御簾の内の様子は、多く集つてゐる人々の衣のすれあふ音もしめやかに、身動きをしながら、中宮の出家なされたこの悲しみの、慰めにくいさまにしてゐる様子が漏れて聞える。なるほど斯くまで人々が悲しみなげくのも尤もであると源氏の君は氣毒にお聞きあそばされる。

○そこら集ひ給ふ人の——このところ古來より書寫し誤りたる箇所である。宣長は玉の小櫛に「これはつどひたる人のとあるべき文なり。中宮をおき率りて外は、皆女房のみなれば、地の詞に給ふといふべき例にあらざればなり」と。又鈴木朗は、「集へ給ふ」の誤と言つてゐるが、これではやはり意をなさない。

○風烈しう吹きふぶきて
風が烈しく吹き、吹雪が立つて。
○いと物深き——おくゆかしい。

○黒方——調合した薫香の名。

○名香の煙——佛前に薫らす香の煙も。
○の給ひしさま思ひ出で——先日御面會の御に、式部がやうにやと仰しやつた春宮のさまを思ひ出しますと。

○御心強さも堪へ難う——藤壺 心強くしてゐられても、遂には我慢が出来なくて。

○大將ぞ言くはへ聞え——源氏が助言して御返事を申しあげさせた。

○あるかぎり——居るだけの人は皆。

風烈しう吹きふぶきて、御簾の中のほひ、いと物深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大將の御にほひさへ薫りあひ、めてたう極樂思ひやらるる夜のさまなり。春宮の御使もまゐれり。の給ひしさま思ひ出で聞えさせ給ふにぞ、御心強さも堪へ難うて、御返も聞えさせやらせ給はねば、大將ぞ言くはへ聞えさせ給ひける。

風が烈しく吹くので、吹雪も強く立ち、御簾内の空焼物は、頗るおくゆかしい黒方の香に匂うて、外には名香の煙が薄くたなびいてゐる。なほ大將源氏の君の御衣の香までが、これに薫りあつて尊いさまは、極樂といふものも、このやうなものであらうかと想像せられるほどよい晩である。さて東宮の方から御使があつた。先日東宮に面會なされた節、「東宮が式部のやうにや云々」と仰せられたことを、今改めて思ひ出すについても、藤壺はもとから氣強くしてゐられるものの、遂には堪へられないやうになり、東宮への御返事さへお書きにならないので、源氏の君がいろ／＼と助言して、御返事をなさるやうにした。

「御心強さも堪へ難うて」といふのは、中宮が落飾なるときは、御心も強くゐらせられたが今、東宮の御使が來られては、心たへがたく思しめさるのである。

たれも／＼あるかぎり、心をさまらぬほどなれば、思す事どももうち出て

給はず。

月のすむ雲井をかけたふともこの夜のやみになほやまどはむと思ひ給へらるるこそかひなく、思し立たせ給へる羨ましさは、かぎりなう」とばかり聞え給ひて、人々近う侍へば、さまざま亂るる心の中をだに、え聞えあらはし給はず。いぶせし。

「おほかたのうきにつけては厭へどもいつかこの世をそむきはつべきかつ濁りつゝ」など、かたへは御使の心しらひなるべし。あはれのみつきせねば、胸苦しうてまかて給ひぬ。

この宮にゐる人たちは、誰も／＼皆、心が落着かないので、思つてゐることも、それをうち出でて物語るものはない。源氏の君は、

「月のすむ雲井をかけたふともこの夜のやみになほやまどはむと。思はれますので、出家するのも出来兼ねます。が、中宮の御發心なされたことは、限りもなく羨しく存じます」とばかり仰せられた。なほ君はいろ／＼と思ひ亂れてゐられたが、人々が中宮の御側近くに澤山居たので、十分に御物語もなさらぬ。まことにじれつたい思ひがする。さて藤壺の中宮は、

○月のすむ雲井をかけた云々の歌——補欄参照。
○思し立たせ給へる——藤壺が發心なされて出家なされたことは、この上もなく羨しく存じます。
○おほかたのうきに云々の歌——補欄参照。
○かつ濁りつゝ——世は捨てたものの、傍から又煩惱迷ひが起ります。
○かたへは御使の云々——この御返事の一部分は取次の命婦などが氣をきかせてつけ加へたものであらう。
○胸苦しうて——源氏の君は胸に悶々の情をたたへてお歸りになつた。

「おほかたのうきにつけては厭へどもいつかこの世をそむきはつべき
で、世は捨てたものの、やはり子ゆゑに煩惱迷ひが起つて、なまじかな出家でございます」な
どと仰せられる。かく中宮からは御返事があつたが、その一部は取次の命婦が氣をきかせてつ
け加へたものであらう。何につき、彼につき哀ばかりがつきなかつたので、源氏は胸苦しい思
ひをしながら、御退出になつた。

補 ○月のすむ雲井をかけて云々の歌——私どもはよしや、眞如の月の光が澄み渡つてゐる雲井
を志して、出家隠遁しようと思つても、この夜の間に迷ひましてどうも出来ないであります。
「この夜」の語には、この世の子のために、心がひかれて迷ふの意を含みます。○おほかたのうき
につけ云々の歌——一般の憂き世のつらさについては、出家隠遁は出来ましたが、何時になり
ましたならば、この憂き世をすつかり離脱せられるのでありませう。どうも子を思ふ親心の闇
には迷ふのであります。「この世」に「子の世」をかけてゐる。右二首ともに、子といふのは、東
宮冷泉院をさす。

評 「思す事どももうち出で給はず」の句を、湖月抄などには「大将のうらみをものべたまはぬ也」
といつてゐるが、これは源氏の君の恨みもその一つであらうが、これだけと説くのはよろしく
ない。後に「さまざま亂るる心の中をだて云々」の語と重複するやうになるから。

殿にても、わが御方に一人うちふし給ひて、御目もあはず、世の中いとは

○殿にても——二條院に
お歸りになつても。

○わが御方に一人——紫
上の方へも行かれず、自
分の部屋にただ一人ゐら
れて、まんじりとも眠ら
れない。

○母宮をだにおほやけざ
まにと思し——藤壺だけ
なりとも、東宮の表向の
後見役にして置かうとい
ふ桐壺院のお考へであつ
たのにと、源氏の君が追
想せられるのである。

○かくなり給ひにたれ——
藤壺の宮も、かく出家
してしまはれては。

○もとの御位にても云々
——もとの中宮の御位に
もなつてゐられないだら
う。必ず辭任せられるに
違ひない。

○われさへ見奉り捨てて
は——源氏も出家して、
東宮の後見するのを見捨
ててしまつては、もう御
世話申す人もないだら
う。

しう思さるるにも、春宮の御事のみぞ心苦しき。母宮をだに、おほやけざ
まにと思しおきてしを、世のうさに堪へず、かくなり給ひにたれば、もと
の御位にてもえおはせじ。われさえ見奉り捨ててはなど、思し明すことか
ぎりなし。今はかかるかたさまの、御調度どもをこそはと思せば、年の内
にと急がせたまふ。命婦の君も御供になりければ、それも心深うとぶらひ
給ふ。くわしう言ひつゞけむに、ことくしきさまなれば、漏してけるな
めり。さるはかうやうの折こそ、をかしき歌など出て来るやうもあれ。さ
うくしや。まゐり給ふも今はつゝましき薄らぎて、御自ら聞え給ふ折も
ありけり。思ひしめてしことは、更に御心に離れねど、ましてあるまじき
事なりかし。

譯 源氏の君は、二條院にお歸りになつても、紫上のもとへも行かれず、御自分の御部屋に唯一
入御就寝になり、一晚中目もまんじりと眠られない。さうして浮世の中を厭はしく思しめされ
るについても、東宮のことばかりが心配になる。元來、母宮であらせられる藤壺中宮だけなり
とも、東宮の表向の後見役にして置かうと、桐壺帝もお考へになつてゐられたのが、その藤壺

がら夜をあかすこと。
 ○今はかかるさまの云々
 ——今は中宮の出家されてから入用の道具どもが必要であらう。
 ○命婦の君も御供に——侍女の命婦も中宮出家の御供をして、出家したので。

○それも心深うとぶらひ——源氏が親切に品物なぞ贈られる。
 ○漏してけるなめり——細かな傳へはもらされたやうである。

○さうしや——その歌を書き載せてないのは物足りないやうだ。
 ○まゐり給ふも——源氏が藤壺を訪問なされても、今は既に尼となつてゐられるから、遠慮も少なくて藤壺自身が應答なさることもあつた。
 ○思ひしめてし事は——源氏が藤壺を思ひ込んでゐられる心は、片時もお忘れにならないが、これ

の宮が、浮世の心憂さに堪へられなくて、斯く出家の姿になつてしまはれたからには、もとの中宮の御位にもなつてゐられないであらう、必ず辭任せられるに違ひないと源氏の君は思しめされる。それについても、われ源氏までが出家して、東宮の御後見申すのを見捨ててしまつては、もう御世話申す人はないであらうと、終夜かきりない心配で夜をあかしなさる。もうかうなつてからは、御出家後の御道具どもが必要であらうと、年内にその調製をおいそぎになる。又藤壺の侍女である命婦も、中宮の出家なされた御供にといふので出家してしまつたので、源氏はその命婦の方にも品物などを贈つて、親切に世話をなされる。この際の出来事を詳細に言ひ傳へるのも、仰々しきことであるから、いろ／＼なことが言ひ漏れまされてゐるやうだ。どうしてさう言ふかといふに、こんな物哀れな折にこそ、面白い歌も出てくるものである。それなのにそんな歌もないとは、物淋しいことである。
 源氏の君が藤壺のもとに訪問なされるにも、今はもう尼となつてゐられることだから、遠慮も少なくて藤壺御自身が出て應答なさる時もあつた。源氏の君が藤壺を思ひ込んでゐられる戀心は今となつても片時として君の心から離れなかつたが、中宮の尼となりなかつた今日では最早あつてはならぬことである。

評

従来、源氏の君も出家隠遁の發心もとき折あつたが、ただ可愛い紫上のために心が引かれてさうしたことは出来なかつた。ところが今となつては、中宮が出家されたので、東宮の大切な後見もなくなつた。かうなつては、東宮の御世話はどうしても源氏の君がなさらなければなら

ぬ。紫上のことに、更に東宮の身上のことも加つて、源氏の心のほだしは益々強くなつた。

「くはしく言ひつづけむに、こと／＼しきさまなれば、漏してけるなり云々」の句は、下の「さうさうしや」の句と相對して、例の紫式部の謙遜な書きぶりを見せてゐる。

源氏の心である。
 ○ましてあるまじき——中宮の尼となりなかつた今日は、最早さうしたことはあつてならぬことである。
 ○年もかはりぬ——年も改つて源氏の君廿五歳になりたまふ。
 ○内宴——紅葉賀の巻に出づ。内々の節會の義。正月廿一日仁壽殿で文人をお召しになり、詩會、賜宴がある。
 ○踏歌——男女の歌ふに巧みなものを禁中に召して、年始の祝詞を歌ひ舞はされる公事。女踏歌は毎年正月十六日、男踏歌は正月十四日か、十五日にあるが、これは毎年ではない。
 ○物のみあはれ——藤壺が昔を思ひ出してあはれに感ぜられる。
 ○むつかしかりし事——これまでの氣苦勞なことを忘れらる。

年もかはりぬれば、内裏わたり花やかに、内宴踏歌など聞え給ふにも、物のみあはれにて、御行しめやかにし給ひつゝ、後の世の事をのみ思すに、たのもしく、むつかしかりし事は離れて思さる。常の御念誦堂をばさるものにて、別に建てられたる、御堂の西の南にあたりて、少し離れたるに渡らせ給ひて、取りわきたる御行せさせ給ふ。大將まゐり給へり。改まるしるしもなく、宮の内のかに人めまれにて、宮司どもの親しきばかり、うちうなだれて、見なしにやあらむ、屈し痛げに思へり。白馬ばかりぞ、なほひきかへぬものにて、女房などの見ける。所狭うまゐり集ひ給ひし上達部なども、道を除きつつひき過ぎて、むかひの大殿に集ひ給ふを、かかるべきことなれど、哀れにおぼさるるに、千人にもかへつべき御さまにて、深う尋ねまゐりたまへるを見るに、あいなく涙ぐまる。

○取りわきたる御行——特別な佛の勤行。
 ○改まるしるしもなく——新年になつたしるしもなく。
 ○宮司——中宮大夫、中宮亮などの者ども。
 ○見なしにや——源氏の氣のせい、ひどく屈托顔のさまである。
 ○白馬——正月七日の白馬の節會である、年始に白馬を見れば邪氣を拂ふといふ禁厭より起る。廿一匹の白馬を内裏に曳き式終つて中宮職へも遊覽する。
 ○なほひきかへぬものにて——昔と變らず曳いてくるので。
 ○道を除ぎつつ——藤壺には避けてよりつかず。
 ○大殿——朱雀帝の祖父右大臣。
 ○かかるべきことなれど——當然のことである。
 ○哀れにおぼさる——藤

年も立ち變つて新年となつた。内裏などのあたりでは、花やかに内宴だとか、蹈歌などが催されてゐるといふことを、藤壺がお聞きになるについても、何となく物哀れに感ぜられる。ただ御佛事の勤行ばかりを靜かに修行なされながら、後世のことばかりを考へてゐられるからして、來世のことも頼もしくあり、この世のうるさいことどももすつかり忘れてしまはれた。平常の御念誦堂のお勤めは言ふまでもないことで、別に建築された、御堂の西南方にあたる、やや離れた御堂にお渡りあそばされて、特別な御勤行をあそばされる。そこへ源氏の君が参上なされた。今年も新年となつたしるしもなく、宮の内は人影も少く、まことに靜かで、ただ藤壺に仕へてゐる宮仕の親しきものだけが、頭をうちさげながら淋しさうにしてゐる。源氏の君の氣のせい、ひどく屈托してゐるさまに思はれた。ただ白馬だけは、やはり昔と同じやうに曳いて來たので、女房どもはそれを見た。

この日内裏に滿つるほど集つてゐた公卿たちなども、道を除けて、藤壺のもととは通り過ぎ、向側の右大臣殿の御殿にばかり集るのであつた。宮は今はいか人が去つて行くのは當然であるとは思しめられるが、やはり何となく物哀れに思しめしになる。かうして淋しくしてゐられるところへ、千人の多くの人が音づれるにも匹敵するやうなさまで、源氏の君ただ一人が、藤壺の宮を御訪問になつた。宮はこの御親切な源氏の御來訪を見て、とめどもなく涙を催しなされる。
 〇御堂の西の南に——この句は、首書源氏物語にも、湖月抄にもかくの如く記されてゐるが本居宣長は玉の小櫛の中に、「御だうの、とよみきるべし。西の對の南の方、すこしはなれたる

處が。
 ○千人にもかへつべき御さまにて——他人の千人にも匹敵するやうな御様子で。
 ○深う尋ね——源氏の君が。
 ○客人——源氏。
 ○まかはれる御住居に——出家なされて、室内の御様子もすつかり變つてしまつた御住居に、
 ○青鈍——青色の薄黒味あるもの。
 ○薄鈍——薄黒い色。
 ○山梔子——染色の名。黄色よりはやや濃くして赤みを帯びたるもの。

〇ながめられ給ひて——源氏は感慨無量で見つめられる。
 ○むべも心ある——後撰

客人も、いと物哀なる氣色に、うち見まはし給ひて、とみに物ものたまはず。さまかはれる御住居に、御簾の端、御几帳も青鈍にて、ひま／＼よりほの見えたる薄鈍、山梔子の袖口など、なか／＼なまめかしう、奥ゆかしう思ひやられ給ふ。

中宮をお訪ねになつた源氏の君も、頗る物哀れな有様であたりを見まはして、急には物も仰せられない。藤壺が出家なされてからは、すつかり室内の御様子も變つてしまひ、御簾の縁や、御几帳も青鈍色になり、御簾や几帳の隙間からほのかに見える薄鈍色や、山梔子色の袖口などは、出家の色であるが、それが却つて優美に奥ゆかしう思はれるのであつた。

「青鈍、薄鈍、山梔子」は何れも出家したときの服色である。

解け渡る池のうす氷、岸の柳の景色ばかりは、時を忘れぬなど、さま／＼ながめられ給ひて、「むべも心ある」と、忍びやかに打ち誦したまへる、ま

たなうなまめかし。

(源氏) ながめかる海士のすみかを見るからにまづしほたるる松が浦島

ときこえ給へば、奥深うもあらず、皆佛に譲り聞えたまへる御座所なれば、少し氣近き心ちして、

(源氏) ありし世のなごりだになき浦島に立ちよる浪のめづらしきかな

とのたまふもほの聞ゆれば、忍ぶれど、涙ほろ／＼とこぼれ給ひぬ。世を思ひすましたる尼君達の、見るらむもはしたなければ、言ずくなにて出たまひぬ。

(源氏) 春の陽に解けだしてきた池の薄氷、岸の柳の薄緑のさまだけは、時を忘れず春の景色になつてゐるなどと、さまざまに目をひくものが多いので、源氏の君は、「むべもところあるあまはすみけり」なるほど風雅な尼、藤壺がお住みであつたわい」と、しのびやかな聲で吟詠なさるるが、たぐひなく優美である。さて源氏の君の歌、

ながめかる海士のすみかを見るからにまづしほたるる松が浦島

と申されると、藤壺のゐられる部屋は、奥の方は佛壇のためにふさがれ、端近くにゐられたから、すぐ近くに坐してゐられるやうな心地がした。さうして藤壺の返歌には、

集にある「音にきく松が浦島けふぞ見るむべもところあるあまはすみけり」の歌をさす。あま(海士)に尼をかけて藤壺をさしてゐる。
○打ち誦じ——源氏の君が。
○ながめかる海士の云々の歌——補欄参照。
○奥深うもあらず——藤壺の御住居は、佛壇のために、奥をふさいで、端近い御座所である。
○ありし世のなごり云々の歌——補欄参照。
○ほの聞ゆれば——端近き御住居であるから、取次ぎを持たないで、かすかに聞えるので。

ありし世のなごりだになき浦島に立ちよる浪のめづらしきかな

と仰せられるのも、間近くであるから、取次ぎを持たないで、すぐに源氏の君の御耳にたつした。君はかく歌はれたのを聞いては、感慨に耐へられなくて、涙をほろ／＼と落しなかつた。宮のあたりには浮き世を外にして、心を澄してゐる尼君だちも澤山ゐるから、それらの人々に、わが涙を見られるのも體裁の悪いことであつたから、源氏は言葉すくなで御退出になつた。

(補) ○むべも心ある——後選集卷十五、雜一の素性法師の歌に、「西院のきさきおほんくしおろさせ給ておこなはせ給ひける時かの院の中島の松をけづりてかき付侍ける」と詞書して、「を」とに

きく松がうら島けふぞ見るむべもところあるあまはすみけり」とある歌を引用したものである。○ながめかる海士のすみか云々の歌——この松が浦島は、ながめ(長い海草)を刈る海士の住處だと存じますので、その漁夫の袖のやうに、私の袖も潮氣でびつしよりとぬれます。「ながめかる海士のすみか」に、悵然とながめに沈んでゐられる尼(藤壺)の住家かと思ふと、先づ涙が催されるの意をかけたものである。○ありし世のなごりだに云々の歌——浦島が子の昔譚のやうに、ありし昔のなごりさへもなくなつた。この松が浦島の佗びしいところにお立ち寄り下された御志は、まことに忝なう存じますの意。このところ明星抄の「御説に云、此うら島、浦島が子の心にて用かへたり。仙境より歸てあらぬ世にあふよしをそこにもちて、松がうら島といひかけたる也云々、甘心也」とある。

○さも類なくねびまさり
 —これからは、藤壺方の女房どもが、源氏を評する詞である。ねびまさりは、年と共に美しくなること。
 ○心もとなき所なく—何の不安もなく榮え時めいてゐらつしやつた時は。
 ○さるひとつものにて—さうした一人の得意時代で。

○何につけてか世を思し知らむ—どうして世の下情に通じ、人情の表裏を理解なさることがあらうか。
 ○あいなう心苦しうも—とめどもなく氣毒なことである。
 ○老いしらへる—老い込んだ女房ども。

「さも類なくねびまさり給ふかな。心もとなき所なく世に榮え、時にあひ給ひし時は、さるひとつものにて、何につけてか世を思し知らむと、推し量られ給ひしを、今はいといたう思ししづめて、はかなき事につけても、物哀なる氣色さへ添はせたまへるは、あいなう心苦しうもあるかななど、」老いしらへる人々、うち泣きつつめて聞ゆ。宮も思し出づること多かり。

藤壺方にゐた女房どもが、源氏の君を評して曰く、「まことにたぐひないほど、源氏の君は年とともに美しくおなりあそばされることであるわい。何の不安もなく世に榮え、時を得て出世なされた時には、さうしたお一人の得意時代であつた。このやうな時には、どうして世の下情に通じたり、人生の表裏を理解なさることがあらうか、さうしたことはむづかしいと御推察申してゐましたのを、此頃の源氏の君は、ひどく思ひ沈んで、何でもない一寸としたことにでも、物哀れな御様子に見えるのは、とめどもなく氣毒でありますかな」と、老い込んだ女房どもが感涙を流しながら愛し申した。すると藤壺も思ひ出だされることが澤山あつた。

老女房どもは、「さも類なくねびまさり給ふかな云々」と、君の美しき御姿を拜するについても、「今はいといたう思ししづめて、はかなきことにつけても物哀なる氣色さへ添はせ云々」といふ境遇に立ち至られた現在の世を見て、そぞろ浮世の無常を感じたのである。

○司召—ここは春の任官であるからして、藤壺と云ふべきである。それを秋の司召と書いたのは除目の總稱として司召と言つたのである。
 ○この宮の人—藤壺づきの人々は。
 ○大方の道理にても—人々の經歷上の大體の道理から言つても。
 ○宮の御たうばり—「たうばり」は「たまはり」の轉。當時年爵と言つて帝から上皇、皇后等の方に、地方官の名義を附してそれに相當する俸祿を支給し、更にこれを仕へてゐる人々に給與する制度があつた。
 ○加階—昇位昇進。
 ○かくてもいつしかと御位を云々—斯く出家なされても、中宮の地位をとられたり、俸祿が停止されたりするべき筈のものでないのが、何時の間にかことにかこつけて變

司召の頃、この宮の人は賜はるべき官も得ず、大方の道理にても、宮の御たうばりにても、必ずあるべき加階などをだにせずなどして、歎くたぐひいと多かり。かくても、いつしかと御位を去り、御封などのとまるべきにもあらぬを、ことづけて變ること多かり。皆かねて思し捨ててし世なれど、宮人どももよりどころなげに、悲しと思へる氣色どもにつけてぞ、御心動く折々あれど、わが身をなきになしても、東宮の御代を無事におはしまさばとのみ思しつづ、御行たゆみなく勤めさせたまふ。人しれず、危くゆゆしう思ひ聞えたまふ事しあれば、我にその罪をかるめて免し給へと、佛を念じ聞え給ふに、よろづを慰め給ふ。

春の任官の除目の日には、この藤壺方の人々は、任ぜらるべき官職をも得ない。人々の經歷順序から言つても、或は藤壺の宮からの、朝廷の御下賜ものといひ、必ず昇進すべき筈の位階などさへ戴くことが出来なくて、嘆く人々は随分多つた。かく藤壺は出家なされても、中宮の御位や、御食封などが停止されるべきでないのに、何時の間にか、ことごとにかこつけて變つてゆくことが多かつた。

藤壺は以前から、すべてのことを思ひ捨ててしまひ、少しもこの世に御心残りはないのである

ぜられる。「いつしか」とは、「ことづけて變るしにかかる。」
 ○ことづけて——出家にかこつけて。
 ○皆かねて思し捨て——何れも皆以前から、藤壺は覺悟をされた。
 ○よりどころなげに——たよりなきさうに。
 ○人しれず危く云々——東宮は實は桐壺院の胤でないので、神佛の加護も薄いだらうと、人知れずひそかに危ぶみなさる。
 ○我にその罪をかるめて——藤壺のこの世の愁に東宮の御罪を輕めてと。

○大將もしか見奉り給ひて——源氏も、藤壺のやうすを、それと見取つて御尤もと思しめさる。

が、宮に仕へてゐる人々も、たよりないさまに悲しさうにしてゐる様子を御覽になつては、流石に可愛さうであると御心の動く折もあつたが、御自身からだは、假令、無きものになしても、東宮の御代だけは平穩無事で暮らされるやうにとばかり思ひながら、たゆみなく熱心に佛の勤行をなされる。

東宮冷泉院は、桐壺院の眞の御胤でないからして、神佛の加護も尠いだらうと危くも忌々しくも思しめすことがあるから、どうか我藤壺の心の憂さに代へて、東宮の御罪を輕く御ゆるし下されと、佛を念願して、何事をも慰めてゐらつしやる。

補

○司召——玉の小櫛に、「あがためしつかさめしといふは、事を分ていふ時の名にこそあれ。ひとつにいへば、春のも秋のも、ともにつかさめしにて、論なきこと也。後撰集春下詞書に、

やよひにうるふ月あるとし、つかさめしころ云々、此外にも、春のをも、つかさめしといへる、常のことなり」と。○御封——河海抄に「御封、太上天皇二千戸、三宮各千五百戸」と、源注餘滴に、徂徠の説を引いて、「封戸の一戸は稻四十束を出す、米に爲て二石也。左右大臣は二千戸、四千石也。大納言は八百戸、千六百石也。一品も八百石也云々、この外に其戸に夫役をあててつかふなり」とある。

大將も、しか見奉り給ひて、道理とおぼす。この殿の人どもも、又同じさまに辛きことのみあれば、世の中はしたなく思されて籠りおはす。左大臣

○この殿の人ども——源氏の御殿に仕へてゐる人々も不遇で心憂く思つてゐる。
 ○世の中はしたなく——源氏の君が思しめさるのである。
 ○公私引きかへたる世云々——公私につけて、昔と變つて失意の状態となつた。
 ○致仕の表——辭任の表。
 ○御後見——朱雀院の御世話役。
 ○長き世のかためと——長く國家の柱石とするやうにとの御遺言。
 ○かひなき事と——辭任されては、御遺言が無効になると、屢々辭表を斥けられたが。
 ○せめてかへさひ申し云々——強ひて辭表を押しもどして引籠つてゐられるので。
 ○一族のみ——右大臣の一族だけが。

も、公私引きかへたる世の有様に、物憂くおぼして、致仕の表奉り給ふを、帝は、故院のやむごとなく、重き御後見とおぼして、長き世のかためと聞え置き給ひし、御遺言を思しめすに、捨て難きものに思ひ聞え給へるに、かひなき事と度々用ひさせ給はねど、せめてかへさひ申し給ひて、籠り居給ひぬ。今はいとど一族のみ、かへすく榮え給ふ事限りなし。世のおもしと物し給へる左大臣の、かく世を遁れ給へば、公も心ほそうおぼされ、世の人も心ある限りは歎きけり。

源氏大將も、藤壺の宮の近頃の御様子を、それと御推量になり、宮の悲しんでゐられるのも御尤もなことと思しめさる。又源氏方の人々も藤壺方と同じやうに、心憂いことばかりがあるので、源氏もこの世の中をつまらぬものにお考へになり、恥しくて籠居してゐられる。左大臣も公事についても、私事についても、何れも昔とはすつかり引き變つた世の有様を、物憂くおぼしめされ、辭任の表を奉りなされた。けれども帝(朱雀院)は、この左大臣を立派な然も重要な御後見人とお考へになつて、長く國家柱石の臣として置くやうにと仰せられてゆかれた御遺言を思ひ出だされる。それだから帝は、左大臣を捨て難き者と思召され、辭任されては御遺言も空になつてしまふと、幾度となくお許しがなかつた。けれども左大臣は無理強ひに辭表をお

○世のおもしろと——國家の重鎮であつしやつた左大臣が。
○公も——帝も。

○御子どもは——左大臣の若君だちは、皆性質が素直で、世のもてなしもよく重用せられ、得意なさまであつたのに。
○こよなうしづまり——しよげて意氣銷沈してゐること。

○三位中將——頭中將。○四の君をも云々——右大臣の第四女で、頭中將の本妻である。それを中將はたえ、申譯的に通ひつつ、思ひの外な冷淡な態度をなされたので。
○心解けたる御舞の中に——右大臣方では、中將を親しい舞君とは思はない。
○思ひ知れとにや——四の君を疎略にするのを恨んで思ひ知らさんと

しもどして籠居なかつた。かうなつた只今では、彼の右大臣の一族だけが、いよ／＼榮華を極められることは限りがない。國家の重鎮であつた左大臣が斯く辭任なされて世を遁れたのであるから、帝(朱雀院)も、心細く思召しになり、世上の人々も物の道理のわかる人たちは、皆この左大臣の辭任を歎かれた。

御子どもは、いづれともなく、人がらめやすく世に用ひられて、心地よげに物し給ひしを、こよなうしづまりて、三位中將なども、世を思ひしづめるさまこよなし。かの四の君をも、なほかれ／＼に打ち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心解けたる御舞の中にも入れ給はず。思ひ知れとにや、この度の司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず。大將殿、かうしづかにておはするに、世ははかなきものと見えぬるを、まして道理と思しなして、常にまゐり通ひ給ひつつ、學問をも、遊をも諸共にし給ふ。いにしへも物ぐるほしきまで、挑み聞え給ひしを思し出でて、互に今もはかなきことにつけつつ、さすがに挑み給へり。

左大臣家の御息たちは、どなたも／＼人品素直で、世間からも重用せられ、得意なさまでゐられたが、この頃は大へん意氣銷沈のさまでゐられる。三位中將なども、世の中をつまらぬ

ものとして、ひどく沈んでゐられる。

○司召にも漏れぬれど——任官の除目に昇進がなかつたが、大しても氣にしない。
○大將殿かうしづかにて云々——源氏の君すら、かく淋しく籠居してゐられるのを見ると、世の中はたよりないものと考へられたから、吾が身の不遇などは最もなこととあきらめて。
○常にまゐり——いつも源氏の許へ參上なされ

て。
○挑み聞え給ひしを——昔も馬鹿なほど二人で競争してゐたが、それを思ひ出して、今もやはりお互につまらぬことであらそつてゐられる。

右大臣の第四の娘で、頭中將の本妻でゐられるもとへは、中將はやはり時々音づれ通はれて、思ひの外な冷淡な態度をなかつた。それで四の君の父である右大臣も亦、頭中將を心解けた舞君達と同じさまにはなならない。右大臣は恨みを思ひ知らさうといふのか、今度の除目には、頭中將は昇進から漏れて、當然なるべき中納言にもなならない。けれども頭中將は何とも氣にされない。源氏の大將でさへも、近頃はかく淋しいさまに籠居してゐられるのを見ると、中將も世の中はかうした果敢ないものだと思へられたから、まして自分のやうなものが、世に用ひられないのは、御尤もなことだと思ひなかつた。さうして源氏の君のもとへ、時々遊びに出かけながら、學問や管絃の遊びをと／＼になさる。往昔も、氣狂のやうに何事についても負けまいと、競争したことどもを追想して、現在でもお互に、つまらぬ些事どもを、それについてさすがに昔とかはらず競争せられるのであつた。

○かの四の君も云々——帯木卷に、「宮腹の中將(頭中將をさす)は、中に親しく馴れ聞えたまひて、あそびたはぶれをも、人よりは心やすく、なれ／＼しくふるまひたり。右大臣のいたはりかしづき給ふ住家は、この君もいとものうくして、すぎがましきあだ人なり。里にても、我がたのしつらひまばゆくて云々」とあるをさす。○思ひ知れとにや——細流抄には、「三位中將今中納言にも昇進有へきをさもなきとなり」と。

○春秋の御讀經——宮中に行はれる行事であるが、これは大將家の私事である。

○尊きことども——佛事法會。

○徒に暇ありげ——世に用ひられないで閑暇でありさうな。

○文作り——詩賦を作り。

○韻ふたぎ——古詩の韻の字をふたぎ隠して、その字を當てさする勝負ごとをいふ。

○心をやりて——憂鬱を晴して。

○宮仕をも——禁中の出仕をも。

○煩はしき事ども——源氏に對するうるさい非難などを、だん／＼いひ出す人があつたやうである。

○さるべき集——然るべき立派な詩文集。

春秋の御讀經をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊きことどもをせさせ給ひなどして、又徒に暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り韻ふたぎなどやうの、すさびわざどもをもしなど心をやりて、宮仕をもをさ／＼したまはず。御心に任せてうち遊びておはするを、世の中には煩はしきことども、やう／＼言ひ出づる人々あるべし。

〔釋〕春秋二季の御讀經はいふまでもないこととして、その外にも臨時にいろ／＼な尊い佛事法會などもされる。又世間からは用ひられないで閑暇であるやうな博士どもを召しあつめて、詩賦を作つたり、韻ふたぎなどの如き遊びをされ、心の憂鬱を晴しなされる。源氏はかうしたことて日を暮らし、禁中にお仕へなされることは、大體なさらぬ。斯く源氏の君は、御心のままに遊び暮してゐられるのを、世間では、さまざまのうるさい噂をなす人々も出るやうになつた。

〔譯〕源氏は今や、出仕もされず、悠々閑々として、佛事、詩文の遊びを催され、名僧學匠で世に埋れてゐるものどもを集めて、頭中將などと日頃の鬱をはらしなされるのであつた。かうしてゐられるのについて、右大臣一派の人々は、君に或は異圖異志があるのでないかと、いろ／＼と揣摩臆測を逞しうしたのである。

夏の雨のどかに降りて、つれ／＼なる頃、中將、さるべき集ども、數多も

○殿にも——源氏も、○文殿——二條院の文庫。

○ゆゑなからぬ——故山あるもの、面白いの。

○わざとはあらぬど——特別にといふわけではないが。

○大學のも——大學寮の學者達も。

○こまどりにかたわかせ——一人おきに右方と左方とに入り交へる坐り方をいふ。

○寒きもて行くに云々——韻塞ぎの遊びも始つて、だん／＼と韻を塞いで行くと、むづかしい韻が多くて老練な博士だちもまごつく所々を、源氏が時々お塞ぎになる御様子は、まことにこの上もない御學才のほどである。

○いかでからしも云々——これから席上の人々の詞、どうしてこのやうに源氏の君は萬事のこと

たせてまゐり給へり。殿にも、文殿あけさせ給ひて、まだ開かぬ御厨子どもの、珍らしき古集のゆゑなからぬ、少し選り出でさせ給ひて、その道の人々わざとはあらぬど、數多召したり。殿上人も大學のも、いと多うつどひて、左右にこまどりにかたわかせ給へり。賭物どもなど、いと二なくていどみあへり。塞ぎもて行くままに、難き韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士どもなどの惑ふ所々を、時々うちのたまふさま、いとこよなき御才のほどなり。「いかでからしも足ひ給ひけむ。なほさるべきにてよろづの事、人に勝れ給へるなりけり」と愛で聞ゆ。遂に右まけにけり。

〔釋〕夏の雨が物靜かに降つて、徒然であるときに、三位の中將(頭中將)が、然るべき立派な詩文集を澤山持參して來られた。源氏の大將の方でも文庫をお開きになつて、未だ開かなかつた本箱の中から、珍稀な古集の由緒あるものを少し選り出して、その道の學者達を、特別にといふわけではないが數多くお召しになつた。

選ばれた人々の中には、殿上人は勿論のこと、或は大學寮の學者達も頗る多くあつまつて、一人おきに左右に入りたがひに並ばれた。賭物なども極めて立派なものにして、左右お互ひに、激烈に勝負を争ひなされた。

完備してゐられるのだらう。
 ○なほさるべきに云々——やはり何か前生からの因縁で、萬人に優れてゐられるのだらう。
 ○右まげにけり——三位中將の方。

○まけわざ——勝負に負けた方が、勝った方を要應すること。
 ○檜破子——檜で作られた重箱に似た食物を入れる器、中には仕切がしてある。
 ○文など作らせ給ふ——詩などお作らせになつた。
 ○はしのもととのさうび——白氏文集に、雙頭竹葉經、春熱、階底遊戯入、夏開しの句の趣である。
 ○氣色ばかり咲きて——

だん／＼と韻を塞いで行かれるにつれて、頗るむづかしい文字が大へん多いので、世にも評判の高い博士どもでも、何と塞いでよいのか迷ふやうなところを、源氏の君がこれは何といふ字を塞げばよいのだと、時々仰せられる有様は、まことにこの上ない御學才でゐられる。この有様を見てゐた席上の人々は、「源氏の君は、どうしてあのやうに、よろづの才能を具備してゐられるのだらうか。やはり何か然るべき前世からの因縁があつて、斯く萬事について優れてゐらつしやるのであるわい」と、感歎し申した。遂に三位中將の右の方は負けてしまつた。

補 ○右まげにけり——源氏の君のすぐれてゐられたことどもを書き記したのであるから、負けた右の方は三位中將の方であることが推察せられる。

二日ばかりありて、中將まけわざし給へり。ことごとしうはあらで、なまめきたる檜破子ども、賭物などさまざまにて、今日も例の人々多く召して文など作らせ給ふ。はしのもととのさうび、氣色ばかり咲きて、春秋の花盛りよりも、しめやかにをかしきほどなるに、うち解け遊びたまふ。中將の御子の、今年始めて殿上する、八つ九つばかりにて、聲いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしみもて遊びたまふ。四の君腹の次郎なりけり。世の人の思へるよせ重くて、おぼえ殊にかしづけり。心ばへもかどか

どしう、容貌もをかしくて、御遊の少し亂れゆくほどに、高砂を出してうたふ、いとうつくし。大將の君、御衣ぬぎてかづけ給ふ。

二日ばかり日が経つてから、勝負に勝つた者に對する褒應をなされた。仰々しいさまではなくして、優美な檜破子や、賭物などをさまざまと準備なされて、今日も何時もと同じやうに澤山の人々をお呼び集めになり、詩などお作らせになつた。階の下の薔薇はやうやく少しばかり咲いて、春や夏のさかりよりも、しつとりと靜かな面白い氣候であるので、誰も／＼打解けて管絃の遊びをなさる。三位中將の御子で、今年始めて殿上にめされた、八歳か九歳ばかりの子がゐる。この子は聲も頗る面白く歌ひ、又面白く笛を吹いたりするので、源氏の君は可愛いがりなさつて遊びなさる。この童兒は中將の正妻である右大臣家の四の君の腹に生れた次男である。それで世人も權勢家右大臣の孫として、心を傾け寄せることも多く、格別に愛し育てられた。この童兒の心、氣質も才氣がかつた所があり、容貌も愛らしい。今日の遊びも、酣になつて亂れたした頃に、催馬樂の高砂のところをとりだして謡ふ。その聲はまことに愛らしい。源氏の大將はあまり面白かつたので、御自身の御衣を脱いで、贈物とされた。

補 ○高砂——催馬樂の律の部にある「一段、高砂の、さいさごの。たかさごの。二段、尾上に立てる、白玉椿、玉やなぎ(イツばき)。三段、それもがと、サン、ましもがと、ましもがと。四段、練緒さみをの、御衣掛にせん、玉やなぎ。五段、何しかも、サン、何しかも、なにしか

少しばかり咲いて。
 ○うつくしみもて遊び——源氏の君が可愛がりなされる。
 ○四の君腹の次郎——右大臣の四の君、即ち中將の本妻に生れた次男である。後に紅梅右大臣となる人。柏子の弟である。
 ○世の人の思へる云々——世人も、現在の權勢家右大臣の孫として、心を傾け寄せることも多く。
 ○かど／＼しう——才氣あること。
 ○高砂——催馬樂の律の曲。

も。六段、心もまだいけん、百合花の、さゆり花の。七段、今朝咲いたる、初花に、あはましものを、さゆり花の」の歌をさす。

源氏は勿論のこと、頭中將も今や右大臣方とはすつかり疎遠にしてゐられるが、四の君の腹に生れなかつた中將の御子が、又なく可愛らしいので、右大臣方との關係はかすかながらも繋がれてゐる。

例よりはうちみだれ給へる、御顔の匂似たるものなく見ゆ。羅の直衣單衣を着たまへるに、透き給へる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見奉りて涙おとしつつ居たり。「あはましものをさゆりばの」と、うたふとぢめに、中將御土器まゐり給ふ。

ほほゑみて取り給ふ。

時ならで今朝さく花は夏のあめにしをれにけらし匂ふほどなく

おとろへにたる物を」と、うちさうどきて、らうがはしく聞し召しなすを、咎め出でつつ強ひ聞えたまふ。

例 例よりも亂解してゐられる源氏の君の御歌の美しい色は、他に似るものないほど綺麗

例よりはうちみだれ云々——いつもよりは亂解してゐられる源氏の君の御顔。

羅の直衣單衣——羅の直衣の下に、生絹の單衣を着てゐられるのである。

あはましものをさゆりばの——これ高砂の第七節の「今朝咲いたる、初花に、あはましものを、さゆり花の」の末句「さゆりばの」の「な」の字が、讀ふときには、はつきりと聞えないで、「さゆりばの」と聞えたものであらう。それをその音のままここに掲げたものである。

御土器まゐり給ふ——盃を源氏の君にさしたのである。

に見える。羅の直衣の下に、單衣を召してゐらつしやるのに、御肌の色が透き通つて見えるのは、一層美しく見えるので、年老いた博士どもなどは、遠方から見奉つて、感涙を落してゐた。源氏の君が、催馬樂の高砂の曲の第七節の「今朝咲いたる、初花に、あはましものを、さゆり花の」の所を讀ひ終りなると、三位中將は、御盃を源氏にすすめなされる。このとき中將の歌に、
それもかとけさひらけたるはつ花に劣らぬ君がにほひをぞ見る
とあつた。源氏は微笑を湛へて盃をとりなされる。さうして君の返歌は、
時ならで今朝さく花は夏のあめにしをれにけらし匂ふほどなく
男盛りも衰へてしまつたものを」と、騒々しいさまをされ、亂れた體にて盃をもごまかして、よくもお飲みにならないのを、中將は見咎めて盃を強ひておすすめした。

あはましものをさゆりばの——源注餘滴に古本催馬樂譜を引いて曰く、「太加左古乃、佐伊左吉乃、太加左己乃、乎乃戸爾太天留、之良太末川波支、太万地名支、曾禮毛加止左牟、万之毛加止、末之毛加止、禮利乎左美乎乃、見會加介爾世牟、太万也名支、名爾之加毛、左名爾之加毛、名爾之加毛古々呂毛万、太万太、以介牟、由利波名乃、左由利波名乃、介左左伊太留、波川波名爾、安波方之毛乃乎、左由利波名乃」と、又雅望曰く、「かくあればさゆりばなのなの字脱せるなるべし」と云つてゐる。○それもかとけさひらけ云々の歌——催馬樂高砂の唯の言葉に「それもかと」などいつて、「今朝咲いたる初花に、あはましものを、さゆり花の」と讀ひまする

彼の初花にも決して劣らない君の顔色と見えます。○時ならで今朝さく花は云々の歌——時ならずも今朝咲いた初花は、この夏の雨にすつかり萎れたらしい。美しく咲き匂ふひまもなくして。なほその意の裏には、恰度そのやうに、時にも遇はずして自分の姿も衰へてしまひましたの意を含ませてゐる。

多かめりし事どもも、かやうなる折のまほならぬ事、かず／＼に書きつくる、心なきわざとか、貫之が諫めたる方にて、むつかしければとどめつ。皆この御事を譽めたるすぢにのみ、倭のも唐のも作りつゞけたり。我が御心地にもいたう思しおごりて、「文王の子、武王の弟」と、うち誦じたまへる、御名のりさへぞげにめでたき。成王の何とかの給はむとすらむ。そればかりや心もとなからむ。兵部卿の宮も常に渡り給ひつつ、御遊などもをかしうおはする宮なれば、今めかしき御あはひどもなり。

人々のよんださま／＼の詩や歌も澤山あつたやうであります。このやうな場合の眞面目なものでなく、即興的なものを、いろ／＼と書きつらねるのは、心なきわざであるとか、紀貫之も嘗て諫められたことで、ここに書くのもうるさいから、まあ止めて置く。その何れの歌や詩にしても、みんなこの源氏の君を賞めそやした意味のものばかりが出来たのであつた。それで

○多かめりし事——人々のよんだ詩歌は随分澤山あつたが。
○かやうなる折のまほならぬ——このやうな場合の眞面目でない即興的なものは。
○たうるる——この語、古來諸説あり、何れも詳かでない。單に「たる」といふ意か。
○むつかしければ——書くのはうるさいから。
○この御事を——源氏の君の身の上を。
○倭のも唐のもの——和歌も漢詩も。
○我が御心地にも——源氏の御心にも。
○文王の子武王の弟——史記に、「我（周公をさす）

文王子、武王弟、成王伯父、我於天下、不賤矣」とあるにより、桐壺院を文王に、帝を武王に、源氏自らを周公に擬したのである。
○成王の何とか——周公は成王の叔父であるが、源氏は春宮に對して、表向は叔父であるが、實は父であるから成王の何とか言つたらよいだらうかと。
○兵部卿の宮——紫上の父。
○御遊など——管絃の遊びなど。

源氏の君御自身の心中でも頗る自負の心を起しなされ、「文王の子、武王の弟」と朗誦なされて、みづからを周公に比せられた、その名のりまでがまことに立派であつた。だが、周公は成王の叔父であるが、源氏の君は、東宮に對して、表向は叔父の關係になつてゐるが、内實は東宮の父でゐられるので、成王の何とか仰つたらよいのだらうか、これだけは君も少々不安に思つたであらう。兵部卿の宮も常々お出でになつて、管絃の遊びに長じてゐられる方であつたから、お互ひに派手やかな御交りどもである。

○貫之が諫め——このこと古來出所不明である。細流抄にも「此事出所不明なり。ただかやうの酒の中などに心もとめず讀る歌は、すぢなき事も多く交る物なり。しるしをくべからざるの由をしるせる事有べし」と。○文王の子、武王の弟——史記の魯周公世家第三に、「於是卒相成王、而使其子伯禽代就。封於魯、周公戒伯禽曰、我文王之子、武王之弟、成王之叔父、我於天下、亦不賤矣。然我一沐三捉髮、一飯三吐哺、起以待士、猶恐失天下之賢人、子之魯慎無以國驕人」とあるのをさす。

源氏の君はいたく自負の念にかられて、「文王の子、武王の弟」とまで仰せられて、自ら周公に比しなされた。かうした得意の利那に於ても、犯せる罪が空怖しくなり、名は東宮の叔父であつても實は父にあたるので、「成王の何とか云々」と冷汗を流してゐられる。

○その頃かんの君——その頃は、臘月夜侍が里に下つてゐられた。
 ○珍らしき隙なるを——好機逸すべからざる時である、源氏と臘月夜とは互に消息をやりとりして。
 ○いと盛に——臘月夜の容姿が、まことに女盛りで豊艶なさまをしてゐられるのが。
 ○瘦々に——御病氣のために瘦せてゐられるのである。

その頃かんの君まかて給へり。瘧病に久しう悩み給ひて、禁厭なども心やすくせむとてなりけり。修法など始めて、おこたり給ひぬれば、誰も嬉しう思すに、例の珍らしき隙なるを、聞えかはしたまひて、わりなきさまにてよなく、對面し給ふ。いと盛に、賑はしきけはひし給へる人の、少しうち悩みて、瘦々になりたまへるほど、いとをかしげなり。

その頃は臘月夜の侍は、里邸に退出してゐられた。これは俗に云ふおこりの病氣に久しく悩みなまつて、その恢復のための禁厭なども、氣易く里邸であそばさうといふ爲めであつた。さて病氣平癒の祈禱などを始めなまつて、だん／＼御回復なされた。それで誰も嬉しく思つてゐた。この時源氏の君と、臘月夜侍とは、好機逸すべからざるよい時であるといふのでお互に御手紙を交換なされて、無理なことまでして、毎晩々々御對面なさる。臘月夜の君は、本當の女盛りで豊艶なさまをしてゐられる方であつたが、日頃の病氣のために、少し惱ましげに瘦せてゐられる御有様は、頗る可憐なさまである。

○聞えかはしたまひて——細流抄には、「箋曰、かはしの三字誠かんの君の心の筆跡なり」といひ、侍の方から進んだ趣であると古註には言つてゐるが、「例の珍らしき隙なるを云々」の句から考へると、必ずしも古註の如くでもなく、やはり源氏の君から自ら進んで言づれなかつたものとも思はれる。

○后の宮も云々——臘月夜の姉君にあたる弘徽殿の皇太后も、恰度里邸と一緒にゐらつしやる時なので。
 ○いと怖ろし——源氏が。
 ○かかる事しもまさる云々——斯うした無理な戀路にはよく熱しなざる源氏の御癖であるから。
 ○氣色見る人々も云々——源氏と臘月夜との關係を悟る人々もあつたが。
 ○わづらはしうて宮には云々——面倒なことだと思つて、弘徽殿に申し上げるものもない。
 ○大臣はた思ひかけ給はぬ——右大臣もそんなこととは少しも御存じなかつたので。
 ○いとわりなく出で云々——臘月夜のもとに、忍んでゐられた源氏の君は、出るにも出られず何とも仕方がなくてゐられる間に、夜はすつかりあ

后の宮も一所におはする頃なれば、けはひいと怖ろしけれど、かかる事しもまさる御癖なれば、いと忍びて度かさなり行けば、氣色見る人々もあるべかめれど、わづらはしうて、宮にはさなむとは啓せず。大臣はた思ひかけ給はぬに、雨俄におどろ／＼しう降りて、神いたう鳴りさわぐ曉に、殿の君達、宮司など立ちさわぎて、此方彼方の人目しげく、女房どももおぢ惑ひて、近う集ひまゐるに、いとわりなく出で給はむ方なくて、明けはてぬ。御帳のめぐりにも、人々しげくなみ居たれば、いと胸つぶらはしく思さる。心しりの人二人ばかり、心を惑はす。

臘月夜侍の姉君にあたる弘徽殿の皇太后も里邸に御退出中なので、二人とも同じ御殿にゐらつしやる時であつたから、かうしたときに、源氏が臘月夜のもとに通ふのは、頗る何となく物怖ろしいことであつたが、元來源氏はかうした無理な戀路にかけては、よく熱中なさる性癖でゐられたから、やはりしげ／＼と通ひなされた。源氏の斯く忍んでしげ／＼と通ひなさるの、その様子をそれとなく見知るものもあつたやうであるが、それ等の人々は、面倒なことが起るかも知れないと思つて、弘徽殿の太后にかく／＼と申上げない。父の右大臣はそんなこととは、少しも思つてゐられなかつたが、或る時俄雨が急におそろしいほどに降り、雷が烈しく

けはなれた。
○御帳のめぐり——臘月夜の御帳のもとにも。

○胸つぶらはしく——源氏は胸が潰れるやうに思はれた。

○心しりの人二人——事情を知つてゐる女房二人。先の中納言と今一人の女房であらう。

○大臣渡り——右大臣をさす。

○宮の御方に——弘徽殿の御部屋に。

○村雨のまぎれに——俄雨の音が騒しかつたのにまぎれて。

○えしり給はぬに——臘月夜が少しもお氣づきにならなかつた處へ。

○輕らかにふとはひ入り給ひて——右大臣が臘月夜の部屋へ何氣なく、ひよつとお入りになつて。

○いかにぞいとうたて云々——どうですか、随分ひどい昨夜の様子に、さ

鳴りとどろいた夜明け方に、この殿の君達や、弘徽殿に仕へてゐる役人どもが立ち騒いで、此方彼方にも人目繁く、女房どももおそれ迷うて、御寢所近くに参り集つて来た。

かうなつては臘月夜のもとに隠れ忍んでゐられた源氏の君は、出るにも出られず、何とも仕方がなくて躊躇してゐられる間に、夜はすつかり明けてしまつた。臘月夜の御帳のまわりにも人々が繁く並んでゐるので、胸をどき／＼とさせてゐられる。事情を知つてゐる女房どもも二人ばかり、どうしてよいか分らず、ただ心をまどはしてゐる。

○殿の君——岷江入楚に、「弄二條のおとどの君たち也」と。

神なりやみ、雨少しやみぬるほどに、大臣渡りたまひて、まづ宮の御方におはしけるを、村雨のまぎれにて、えしり給はぬに、輕らかにふとはひ入り給ひて、御簾引きあげたまふままに、「いかにぞ、いとうたてありつる夜のさまに、思ひやり聞えながら、参り來てなむ。中將、宮の亮など侍ひつやしなど、のたまふけはひの舌敏にあはつけきを、大將は物のまぎれにも、左大臣の御有様、ふと思しくらべられて、たとしへなうぞほほえまれ給ふ。げに入りはててももの給へかしな。

雷も止み、雨も少し小降りになつた頃に、右大臣がゐらつしやつて、先づ弘徽殿の方をお訪

ぞ驚きなされたことだらうとお察しいたしながら、つひ見舞にも來ませんでした。
○中將——弘徽殿の弟、臘月夜の兄弟。
○宮の亮——皇后宮の亮。
○舌敏にあはつけき——口早に輕率なのを。
○物のまぎれにも——騒しい中でも。
○左大臣の御有様云々——左大臣の重厚な態度にすぐ比べられて。
○げに入りはてて——成程この場合は籠中に入つてから仰せられてほしいものだと作者の評。

○かんの君いと云々——密に源氏の君を引き入れてゐる處へ父が來られたので、尙侍は困り果てて。
○出でたまふに——御帳の中から御出でなされた

ねになつたのであつたが、俄雨の騒しい音にまぎれて、臘月夜尙侍が少しもお氣づきにならなかつたところへ、右大臣は何氣なく、ひよつとお入りになり、御簾を引き上げながら、右大臣は、「どうですか。昨夜は雷鳴やら雨で、随分ひどい晩で、さぞ驚きなさつたことだらうとお察しはいたしました。つひおたづねもいたしませんでした。中將や、宮の亮などは参りましたか」などと仰せられる様子、口早でそそつかしいさまである。源氏の大将は、かうした騒しい際でも、右大臣の只今のそそつかしい態度を、すぐあの左大臣の重厚な態度に比べられて、たとへん方もなき對照であるわいと微笑をもらしなされる。

なるほど、外からのぞいた儘で話すなどのそそつかしいことをせないで、ゆつくりと籠中にお入りになつてから、仰せられてほしいものであつた。
○右大臣は、入りもせず立ちながら物を言ひかけるといふそそつかしやであるといひ、それに對して源氏の君はかうした咄嗟の窮地にありながら、なほ右大臣の態度の輕卒を微笑するだけの餘裕を持たせ、左大臣の重厚な人格と共にほめてゐるのは、作者が源氏方に同情ある筆をとつたものである。

かんの君いとわびしう思されて、やをら膝行出でたまふに、面の赤みたるを、なほ惱ましう思さるるにやと見給ひて、「など御氣色の例ならぬ。靈氣などのむつかしきを、修法延べさすべかりけり」とのたまふに、薄二藍な

が。○修法延べさすべかりけり——これならば止めさせた祈禱を、もう少し延しつゞけるのであつた。
○薄二藍なる帯——薄紫に似たる色をした源氏の帯である。二藍とは紅と藍との間色をいふ。
○御衣に——源氏の君の御衣に。
○疊紙——歌など書き散した紙。

○かれは誰がぞ——あれは誰の所持品であるぞ。
○氣色異なるものさまかな——變なものであるかな。
○誰がぞと——誰の所持品であるかと取調べて見よう。
○我も見つけ——朧月夜御自身も、お見つけなされた。
○我にもあらで——茫然自失してゐらつしやる。
○こながらも云々——斯うした場合には、わが子

る帯の、御衣に纏はれて、引き出でられたるを見つげ給ひて、あやしと思すに、又疊紙の手習などしたる、御几帳のもとに落ちたりけり。これは如何なるものどもぞと、御心驚かれて、「かれは誰がぞ。氣色異なるものさまかな。賜へ。それとりて誰がぞと見侍らむ」とのたまふにぞ、うち見かへりて、我も見つけ給へる。まぎはすべき方もなければ、いかかは答へ聞え給はむ。我にもあらでおはするを、こながらも恥かしと思すらむかしと、さばかりの人は思し憚るべきぞかし。

密に源氏の君を引き入れてゐる處へ、父が來られたので、朧月夜の侍はどうしてよいやら困り果てて、ゆつくりと帳臺の中からすつて出でられた。このとき侍の君の顔は赤くなつてゐたので、未だまだ御病氣で苦しんでゐられるのかと、父の右大臣は思しめされて、右大臣、「どうしてお前の顔が普通とは變つて、色も悪く見えるのか。物の怪などが未だうるさく苦しめるのであらう。それならば止めさせた祈禱を、もう少し延ばせればよかつた」と仰せられると、源氏の君の薄二藍の帯が、出て來られた朧月夜の君の御衣に引きかかつて、帳臺から引き出だされたのが右大臣の御目にとまつた。

でも恥づかしく思ふであらうと察するのが、身分ある人の常である。これ作者の評である。
○さばかりの人は——身分の相當高い人は。

○いと急に——頗る性急な。
○思しもまはさずなり——考へめぐらす餘裕もなくなつて。
○つゞましからず——一向平氣に。無遠慮に。
○今ぞやをら顔引き——右大臣に見られてから、やつと靜に顔を隠した。
○あさましろ——右大臣があきれるのである。
○心やまし——心なやましいが。
○直面には云々——さすがの右大臣も面と向ひあ

た。これは一體どうしたのであらうかと、右大臣もびつくりなされて、「あの疊紙は誰の所持品であるぞ、變なものであるかな。こちらへよこしなさい。誰がものであるか取調べて見ませう」と仰しやるので、朧月夜自身も振りかへつてごらんになり、やはり疊紙を見つけた。然し今さらこれをごまかすわけにも行かないので、何とも返答のしようもない。ただ茫然自失した體にてゐられる。

右大臣位の高貴な身分の人であるならば、自分の子ながらも、さぞ恥づかしく思ふであらうと子供の胸中をも推察して、咎めるのを遠慮するのが常である。
されどいと急に、のどめたる所おはせぬ大臣の、思しもまはさずなりて、疊紙をとりたまふままに、几帳より見入れたまへるに、いといたうなよびて、つゞましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞやをら顔引き隠して、とかくまぎらはす。あさましろ、目ざましろ、心やましけれど、直面にはいかでか顯し給はむ。目もくるる心地すれば、この疊紙をとりて、寢殿へ渡りたまひぬ。かんの君は、われかの心地して死ぬべく思さる。大將殿もいとほしう、遂に用なきふるまひの積りて、人のもどきを負はむとする事と思せど、女君の心苦しき御氣色を、とかく慰め聞え給ふ。

つては、遠慮會釋もなく
 どうして引き顯はすこと
 が出来にならうか。
 ○目もくるる心地——か
 つとのぼせて、目も眩む
 ほどの心地。
 ○われかの心地して——
 前後を忘れて。
 ○いとほしう——女をい
 とほしう思されて。
 ○人のもどき負はむ——
 世人の非難を受けるであ
 らう。

○大臣は思ひのままに——
 右大臣は我儘で、物事
 を胸に包み隠してゐるこ
 との出来ない御性格であ
 られる上に。
 ○何事には滞り——何

けれどもこの右大臣は、性急なたちで、少しも寛大なところのない大臣であつたから、ゆつくりと考へめぐらす餘裕もなくなつて、すぐさま落ちてゐた疊紙を拾ひあげながら、几帳から内の方をのぞき込みなると、大へんなやかに遠慮ないさまで横臥してゐる男があつた。右大臣がのぞき込みなると、やうやくゆるりと顔を隠して、とやかくとごまかさうとしてゐる。右大臣はもうあきれてしまひ、びつくりして、心やましいが、さすがの大臣も面と向ひあつては、遠慮會釋もなく引きあらはすことが出来ようか、それはどうしても出来ない。かつと怒つて目もくらむやうな心地がしたから、この疊紙を取つて二殿の方へ行かれた。かうなつては、尙侍の君は前後の分別も忘れ、茫然自失して死ぬやうに思ひなされる。源氏の大将も、尙侍のことが氣毒になり、こんな無益な舉動がつもりつもつて、世人からの非難を受けるのであらうと我が身の上が心配になるが、それよりも尙侍の君の心苦しうしてゐられる御様子をとやかくとお慰めなされる。

○ひたおもて(直面)——宣長の玉の小櫛には、「遠慮もなく、ひたすらにそれと顯はす也」とある。

大臣は、思ひのままに、籠めたる所おはせぬ本性に、いとど老の御ひがみさへ添ひ給ひにたれば、何事にかは滞りたまはむ。ゆく／＼と宮にも愁へ聞え給ふ。かう／＼の事なむ侍る、この疊紙は右大将の御手なり。昔も心ゆ

事についても賢者があらうか。
 ○ゆく／＼と——どしどしと滞りなく。
 ○愁へ——訴へ。
 ○昔も心ゆるされて——以前にも油断してゐたので、源氏が朧月夜に通ひなかつた事があつたけれど。
 ○人がらによるづの罪を——源氏の人品に免じて、それなら舞にしようと言つた時は、源氏は朧月夜を愛せずして、ひどく薄情な待遇をなされたので。
 ○さるべきにこそはと——これも前世からの因縁であらうと諦めて。
 ○世に穢れたりとも——朧月夜は源氏のために、穢れた女であると言つても、帝(朱雀院)は決してこの女を思ひ棄ててしまひなされることはないだらうと、それをたのみにして。

るされて、ありそめにける事なれど、人がらによるづの罪を免して、さても見むといひ侍りし折は、心もとどめず、めざましげにもてなされにしかば、安からず思ひ給へしかど、さるべきにこそはとて、世に穢れたりとも、思し棄つまじきをたのみにて、かく本意の如く奉りながら、なほそのはゞかりありて、うけぱりたる女御なども、いはせ侍らぬをだに、飽かず口惜しう思ひ給ふるに、又かかることさへ侍りければ、更にいと心うくなむ思ひなり侍りぬる。男の例とはいひながら、大将もいとけしからぬ御心なりけり。齋院をもなほ聞えをかしつつ、忍びに御文通はしなどして、氣色あることなど人の語り侍りしをも、世のためのみにもあらず、我ためにもよからるまじき事なれば、よもさる思ひやりなきわさし出でられじとなむ、時の有職と、天の下を靡したまへるさまことなめれば、大将の御心を、疑ひ侍らざりつる」などの給ふに、

右大臣は思つてゐることを、包み隠すといふやうなことなく、思ひのままにどし／＼と言つてしまふといふ御性格であらうしやる上に、老年となつたひがみの心までが加つてゐたから、

○かく本意の如く奉りながら——斯く素志のやうに、朧月夜を朱雀院に奉りました。
 ○そのはぐかりありて——源氏との關係が遠慮せられて。
 ○うけばりたる女御——れきとした女御ともなれずにあるのを、物足らず残念なのに。
 ○男の例とは——かうした好色は男子の通例なことはいへ。
 ○齋院をもなほ聞え犯しつづ——齋院の朝顔の君までを口説き犯して。
 ○氣色あること——あやしいやうすのあることなど。
 ○人の語り侍りしをも——世人の噂をしてゐたのを。
 ○世のためのみにもあらざ——源氏が齋院をいどむといふやうなことは、世の爲めばかりではなく源氏の君御自身のため

この際何事にか御遠慮なさることがあらう。どしどしと滞りなく弘徽殿の宮にも懇訴なされた。そのとき右大臣は、「只今かくくの事がありました、この墨紙は右大將源氏の君の御筆跡である。以前にも一度氣をゆるしてゐて、源氏が朧月夜に通ひなされたこともあつたけれども、人品高い人であるから、大目に見てその罪をゆるし、さてはわが聲にしようと言つたときには、君は朧月夜を愛しもなさらず、心外にもひどく薄情な待遇をなされたので、私の方ではおだやかならず思つてゐたのでありました。けれどもこれも前世からの因縁の然らしめるのであらうとあきらめて、穢れた身であるとも、朱雀院に於ては御見捨てにはならないであらうといふことを頼みにして、かく素志のやうに女官として入内はさせたものの、やはり以前の源氏との關係を遠慮せられて、公然と立派な女御なども名のらせないでゐるのさへ、あかす残念なことと思つてゐます。それに今又、かうした源氏のひそかに通ひなさることまでがあつたものでありますから、一層不愉快に思はれるのであります。かうしたすきのことどもは男子の通有性とはいひながら、源氏の大將もあまりにけしからぬ御心でゐられるわい。
 齋院朝顔の君をも、やはり口説きながら内密の御文通をして、あやしいそぶりが見えるなど、世人が噂してゐるものもありましたが、源氏が朝顔の君をいどむといふやうなことは、源氏の君御自身のためにもよくないことであるだらうし、よもや、そんな考へのないことはなさらないだらう。源氏は當時代の識者として、天下に重きをなしてゐられたさまは格別であつたからして、決してそんなことはあるまいと、君の御心を少しも疑つてゐませんでした」などと仰し

に、もよくない事である

から

○思ひやりなき——源氏が考へのない。

○時の有職と——源氏が當時の識者として、天下に重きをなしてゐられた

さまは格別であつたからして、よもや大將にそんな

なことはあるまいと、君の心を疑つてもゐません

でしたが。

○宮はいとしき——弘徽殿は一層源氏を憎みな

さる心が強いから。

○いとものしき御氣色——大へんな御立腹のさま

で。

○帝と聞ゆれど——朱雀院は帝ではありなざる

が。

○昔より云々——昔から

皆人々が輕んじ奉り。

○致仕の大臣も——左大臣をさす。

○ひとつむすめ——左大臣の一人娘、養上をさす。

○兄の坊にておはするに

やるのに、

補 ○し出でられじとなむ——玉の小櫛に、「となんは、下のうたがひ侍らざりつるといふへかかれり」と。

評 右大臣の弘徽殿に對して、仰せられてゐる言葉は頗る長いが、すつと連続して少しも終止されるところがない。これは「ゆく／＼と宮にも愁へ聞え給ふ」といふ、大臣の性急なあたりをあらはしたものである。又弘徽殿に對しては父でありながら、子に對して敬語を多く使つてゐられるのは、子ながらも皇太后の御位にゐられるためである。

宮はいとしき御心なれば、いとものしき御氣色にて、「帝と聞ゆれど、昔より皆人思ひおとし聞えて、致仕の大臣も、またなくかしづくひとつむすめを、兄の坊にておはするに奉らで、弟の源氏にていとなきが、元服しそひぶしにとりわき、又この君をも宮仕にと志して侍りしに、をこがまのかりし有様なりしを、たれも／＼あやしと思したりし。皆かの御かたにこそ御心よせ侍るめりしを、その本意違ふさまにてこそは、かくても侍ひ給ふめれど、いとほしさに、いかでさる方にて、人に劣らぬさまにもてなし聞えむ。さばかりねたげなりし人の、見る所もありなどこそは思ひ

侍りつれど、強ひてわが心の入る方に、靡きたまふにこそは侍らめ。齋院の御事はましてさもあらむ。何事につけても、公の御方に後やすからず見ゆるは、春宮の御代心よせの異なる人なれば、道理になむあめると、すくくしうの給ひ續くるに、

〔釋〕 弘徽殿の宮は、もとくから右大臣よりもまさつて源氏の君を憎まれることは甚だしいのであるから、大へんな立腹の御様子で、「帝とはいふものの、昔から何れの人も皆、軽んじ奉つてゐた。致仕の大臣(左大臣をさす)も、たぐひなく大切にしてゐられた一人娘葵上を、御兄の東宮であらせられる方には奉らないで、弟にあたる源氏で、まだ幼少でゐられる方の、元服のときの添隊にしてとりわきて置かれる。又この臘月夜の君をも帝の宮仕にしようと思つてゐましたのに、君が無遠慮に手を出しなかつた有様を、誰もくけしからぬこととは思つてゐただらうか。決してそんなことはない。どなにも皆、彼の源氏の君にばかり心を寄せてゐらつしやつたやうでありましたが、どうしたことか、源氏の君を臘月夜の掣にと思つてゐたもからの素志も喰違ふやうになつたから、姫君はかうして宮仕をしてゐらつしやるのでせう。これはまことに姫君にとつては氣毒なわけでありますから、どうかしてそのやうな宮仕の方でも、他人よりは劣らないやうにしよう。あれほどまで憎くらしい源氏の君へのつらあてにもと思つてゐましたが、臘月夜の君は自分の心の際く源氏の君の方へは、無理にでも靡きたまつたのであらう。

は——兄なる東宮朱雀に。○元服のそひぶしに——源氏が元服のときの添隊にと取り分けて置き。○この君をも宮仕に——この臘月夜の君を、我々は帝の宮仕にしよう。○をこがましかりし——無遠慮に君が手を出しなかつたありさまを。○たれもくあやしと——誰もく源氏のやりかたをけしからぬことだと思つたものがあるか。○その本意違ふさまにてこそは——源氏を掣にと思つてゐたが、その素志を失つて、臘月夜はかく宮仕してゐられますが、○人に劣らぬさまに——可愛さうだから、どうかして宮仕の方でも、人に劣らぬやうにとしてあげよう。○さばかりねたげなりし人の——あれほど憎くらしい源氏のつらあてに

も、必ず立派にしてあげよう。○強ひてわが心の入る方に——臘月夜は自分の好む源氏に、無理にも靡いたのであらう。○公の御方に後やすからず——源氏の君の態度が帝の方に不安を興へるやうに見えるのは。○春宮の御世心よせの云々——東宮の御代に格別心をよせなさる人であるから尤なことである。

○さすがにいとほしう云々——大后の心中もなるほど氣毒であつた。かういふのならば、なぜ話したのであらうか、話さねばよかつたと右大臣が思しめさるのである。○かくのごと罪侍りとも云々——臘月夜はこんな過失をしても、帝がお見はなしになるまいといふことをたよりとしてあま

齋院と源氏との關係の御事はまして世の噂の通りでありませう。源氏の君は帝の御方については、常に不安のやうに見えるのは、東宮の御代には格別に心を寄せなさる人であるから、それも尤なことであらう」と、何の遠慮もなく率直に言ひつづけなされたので、

〔補〕 ○またなくかしづくひとつむすめを——湖月抄師説に、「葵の事也。是は桐壺の卷にひきいれの大臣のみこばらにただひとりかしづき玉ふすめ、春宮よりも御けしきあるをおぼしむづらふ事ありけるは、この君に奉らんの御心也けりと云る事也」とある。

〔釋〕 弘徽殿始め右大臣は、眞赤になつて源氏の君の道ならぬのを怒つてゐられるが、弘徽殿の御妹、臘月夜は心を源氏に寄せてゐるのは、人生の矛盾の相をあらはしてゐる。

さすがにいとほしう、など聞えつる事ぞと思さるれば、「さばれ、しばしこの事もらし侍らじ。内にも奏せさせ給ふな。かくのごと罪侍りとも、思しすつまじきをたのみにて、あまえて侍るなるべし。内々に制したまはむに、聞き侍らずは、その罪にはただみづからあたり侍らむ」など、聞えなほしたまへど、殊に御氣色もなほらず。かく一所におはして隙もなきに、つつむ所なら、さて入り物せらるらむは、さらに輕めろうぜらるるにこそ

はと、おほしなすに、いとどいみじうめざましく、このついでにさるべき事ども構へ出でむに、よき便なりと思しめぐらすべし。

へてゐるのだらう。
○内々に制したまはむ
—内々で私が彼女を訓戒して、それでも彼女が聞き入れなかつたならば、その咎は私が受けませう。
○かく一所におはして隙もなき—弘徽殿が思しめさるには、臘月夜はかうして、私と一緒にゐて隙もないのに。
○つつむ所なう—源氏がかく遠慮もなく、忍んで来られるのは。
○さらに軽めらうせらる—源氏が吾等を軽んじ弄するのである。
○おほしなすに—弘徽殿が。
○さるべき事ども云々—この機會に、源氏の君を除くやうなことを劃策するには便宜だとお考へになる。

弘徽殿の太后が大へんに源氏の君を怒つてゐるので、右大臣は太后の心中もなるほど尤なとだ、かういふのならば、なぜあのやうな話をしたのであらうか、せなければよかつたと思しめされたから、右大臣は、「そのやうであつても、暫くの間はこの事を言外になさるな。又帝にも奏上なさるな。彼の臘月夜の君はこんな過失をしても、帝がお許し下さるものと考へて、甘えてゐるのであらう。私は内密に彼女に訓戒してやりませう。さうしてまだ聞きとけないやうならば、その罪は私自らが引き受けませう」などと、太后に對して辨解なさるが、太后の御立腹してゐられるさまは、少しもなほらない。臘月夜の君は、かくの如く私(弘徽殿)と一緒に一つ御殿に住んでゐて、少しも人目の隙もないのに、源氏の君はそれにもかかはらず、遠慮するところなく、やはり忍び込んで来られるのは、一層吾等を輕蔑し愚弄なさるのでこそあるとお考へになると、弘徽殿は一層心外千萬に思しめされ、この機會に源氏の君を除くやうに劃策をなすには、よい便宜であると思案なされた。

○かくのごと罪侍りとも—この語は頭注に解したやうな意外の外に、太后の庇護もあるからして、どんな罪なことをしても、赦されるであらうと臘月夜の依頼心をもほめかけたものであると思はれる。

評

「さるべき事ども構へ出でむに、よき便なりと思しめぐらす」といふ、この巻の結末の文句は、次の須磨の巻に至つて、源氏の君の遠流、東宮の廢立が行はれるのを、前以つてほめかけたものである。

賢木終

人物

花

麗景殿女御

桐壺帝の女御にて、花散里の姉にあたる。

花散里の上

三の君ともいひ、麗景殿女御の妹君にあたる。源氏の君通ひ給ふ。

中川の女

源氏、花散里のもとへ通ひなさるとき、中川のほとりにてひと目見てやどり給ふ。

里

五節君

太宰大貳の女にて、源氏の君の情人である。

惟光

源氏の君の乳子の子にて、昵近の家人である。夕顔の巻に右近大輔とある。

年立

廿五歳夏 麗景殿女御のもとに参り給ふ途次、中川の女の

家の前を過ぎる事

麗景殿女御の許で、三の君即ち花散里に行き逢

ひなさる事

右大臣一派の源氏の君に對する壓迫は、日毎に烈しくなつてきた。源氏は自分が心の備しきについても、日頃疎遠にしてゐるところへが思ひ出だされるのである。

梗

斯うしたときに思ひ出だされたのが、故院の御時の麗景殿女御の御妹、花散里である。この姉君もともく、今は源氏の君の庇護を受けて、京極あたりに佗びしい暮しをしてゐられる。五月廿日の夜、源氏の君はこの花散里のもとを音づれなさる。その道中、中川のあたりを過ぎなかつた折、聞らずも妙なる琴の音が、ささやかな家居の木立ちの間から漏れ聞えたので、心の中にゆかしと思しながら、その家居のさまをこらんになると、遠き以前にただ一度通つた女の家である。折しも郭公の一聲が聞えた。源氏の君はおのが車を停めさせ、召具した惟光をして消息をなされたが、嘗て一度逢つたに過ぎぬためと、且つは源氏の威勢全く地に墜ちた頃であつた故か、女の態度があまりに

概

冷淡であつたので、源氏の君は強ひて再びおとづれるなどもされず、直ちに車を進めて、目ざす麗景殿女御を訪ねられた。見れば以前とはすつかり變つたやつれた住居ではありながら、ありし日に變らない女御の高貴な姿、ゆかしい趣はさすがなつかしいものがあつた。君はともく、昔物語りに夜を更しなかつた。折から月はずみ渡り、軒端の橋の蕭りただならぬときに、嘗て中川のあたりで聞いた郭公であらうか、同じさまに鳴きすぎた。源氏は一層あはれを感じて、さまくくと女御を慰められた後、ことの序らしきさまにて、西面の花散里を訪れなかつた。この巻の名は、源氏の君が麗景殿女御の有様を見て、折から鳴き渡る郭公に言よせ、橋の香をなつかしみほととぎす花散里を尋ねてぞ訪ふ」と詠まれた歌からとつたものである。又それがやがて三の君の呼び名ともなつた。

○人しれぬ御心づからの云々——人は知らない、源氏の君みづからの戀故の物思ひは、何時とさだまつたことなく、始終あるのであるが。
○かく大方の世に云々——さらにその上、桐壺院崩御後の不如意な世間の有様につけてまで、うるさく氣苦勞なことばかりが増してくるので。
○さすがなる事多かり——それでもやはり思ひきれない女どもの係累が。
○麗景殿——桐壺院のときの女御。
○宮たちもおはせず——御腹の皇子たちもゐられず。
○ただこの大將殿の云々——ひたすら源氏の君の御厚意にすがつて、それをたよりとして生活してゐられる。

人しれぬ御心づからの物思はしきは、いつとなきことなめれど、かく大方の世につけてさへ、わづらはしう思し亂るる事のみまされば、物心ほそく、世の中なべて厭はしう思しならるるに、さすがなる事多かり。麗景殿と聞えしは、宮たちもおはせず。院隠れさせたまひて後、いよくあはれなる御有様を、ただこの大將殿の御心にもてかくされて、過し給ふなるべし。

世人には分らないが、源氏の君御みづからの戀故の物思ひは、何時といふさだまりも、始終あることだが、なほその上に、桐壺院崩御後は、世の中も不如意勝ちなことがかりがあるので、君はうるさく氣苦勞に思しめされることばかりが増すのであつた。そのために君は心ほそくなり、世間全體がすべて厭はしく思しめされが、それでもやはり思ひあきらめられない女のかかはりが多くあつた。

桐壺院の女御でゐらせられた麗景殿の女御と申す方は、御腹に皇子も生れられず、院が崩御なされてからは、いよく物哀れなさまにしてゐられたが、ただこの源氏の君の御厚意によりすがつてお生活なさつてゐられた。

○心づから——自分の心から自然にの意。契沖は「今案、古今、春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみん」と。この歌春歌下に、藤原よしかぜの作となつてゐる。

○御妹の三君——麗景殿の御妹で、普通に花散里といふ。源氏君通ひたまふ。

○はかなくほのめき給ひし云々——假初の機會にちらりと逢ひなかつた名残を、源氏は例のすきの御心から、やはり今までお忘れにならない。

○わざとも云々——であるとして、格別な御待遇もなさらない。

○人の御心をのみ——花散りにやきもきさせてゐるのを。

○思しみだるる——源氏が。

○世のあはれ云々——世上の哀を感じられることどもの一つとして。

○わたり給ふ——源氏が花散里へ。

○何ばかりの——源氏の君は、これと言つてとりたてるほどの御ととのひもなく。

御妹の三の君、内裏わたりにて、はかなくほのめき給ひし名残、例の御心なれば、さすがに忘れもはて給はず。わざともてなしたまはぬに、人の御心をのみ盡しはて給ふべかめるをも、このごろ残ることなく、思しみだるる世のあはれのくさはひには、思ひ出でたまふに、忍びがたくて、五月雨の空、めづらしう晴れたる雲間にわたり給ふ。

麗景殿の御妹の三の君(花散里をさす)は、かりそめの機會にちらりと源氏の君に逢ひなかつた名残を、君は何時ものすき心からして、今に至るまでやはり忘れてしまひなせぬ。であるとはいふものの、君が格別に彼女を愛しなされるなどはなさらない。けれども花散里が心ばかりをやきもきとしてゐられるやうなさまを、このごろは君もいろ／＼と思ひ惱みなされる世の哀れなことどもの一つとして思ひ出だされる。それについても耐へがたく可愛いさうになり、五月雨の空が、珍しくも晴れわたつた雲の切りめに、源氏の君は花散里のもとへ伺ひなされた。

「人の御心をのみ盡しはて給ふべかめる云々」花散里など女の身としては、はかないことどもでも始終心になつたであらう。まして相手が源氏の君でゐられるから、なほさらのことである。

何ばかりの御装なく、ちちやつして、御前なども殊になく、忍びたまへり。中川のほどおはし過ぐるに、ささやかなる家の木立など、よしばめるに、

よくなる琴を、あづまに調べてかき合せ、賑ははしく弾きならすなり。御耳とまりて、門近なる所なれば、少しさし出でて見入り給へれば、大なる桂の木の追風に、祭の頃思し出でられて、そこはかとなくけはひをかきき、ただ一目見給ひし宿なりと、思ひ出で給ふに、ただならず。程經にけるを、おぼめかしくやとつゝましけれど、過ぎがてにやすらひたまふ。

源氏の君は、これと言つてとり立てるほどの御装束でもなく、やつれた姿で、前驅のものもない微行をなされた。中川のあたりを御通過なされるに、そこにささやかな家がある。その木立ちなどは、由緒あるさまで、よい音の琴を、あづま調にかきあはせて、賑はしい調子に引いてゐる。源氏の君のお耳にとまつた。それは門に近いところで弾いてゐるのであつたから、源氏は御車から少し乗りだしておのぞきなされると、大きい桂の木から吹いてくる風に、賀茂祭の頃どもが思ひ出でられる。そのあたりは、どこといふこともなく、すべて雅趣あるさまになつてゐる。源氏の君がよく考へてごらんになると、ここは嘗て一度逢つたことのある女の家であつた。君の御心は頗る動いた。然しあまり久しくうち絶えてゐたのに、今突然たづねるのも、どうかとおぼめかしくやとつゝましけれど、過ぎがてにやすらひたまふ。

○ただ一目見給ひし宿——岷江入楚に、「花散さとへ出給ひし道、中川にてのことなり。是ち

○御前——御前儀。
○よしばめるに——由緒あるさまであるのに。
○あづまに調べ——あづま調になして。
○少しさし出でて見入れ——車から乗り出して、のぞき込まれると。
○桂の木の追風——桂の枝を吹いてくる風。
○祭の頃云々——賀茂祭には冠に葵や桂をつけるもの故、桂の木の追風に賀茂祭の頃が思ひ出だされる。
○ただ一目見給ひし——かつてただ一度逢つた女の家であるなと思ひ出でられるについても。
○ただならず——源氏の心の動くさま。
○程經にけるを云々——源氏の心。久しくうち絶えてゐたのに、今突然たづねるのもどうかと気がひけるが。
○過ぎがてに——そこを通り過ぎられないで躊躇

するさま。

○もよほし聞えがほなれば——このやどをたづねよとすすむるやうであつたから。

○入れ給ふ——使として案内を門内に入れなされる。

○をちかへりえぞ云々の歌——補欄参照。

○さき／＼も聞きし聲——以前にも聞いたことのある聲であるから。

○氣色とりて——體裁をつくらつて。

○おほめくなるべし——おぼつかなく變に思つたのであらう。

○ほととぎすかたらふ聲はそれながら云々の歌——補欄参照。

○殊更にたどると——わざとたど／＼しく不審なやうなさまをするので。

○よし／＼うゑし垣根——よし／＼、門邊ひてもあるかも知れない。古歌

源氏の君のたまさかにかよひ給ふ所なり。此巻にはじめていひいだせり」と。

折しも郭公鳴きてわたる。もよほし聞えがほなれば、御車推し返させたまひて、例の惟光を入れ給ふ。

をちかへりえぞしのばれぬほととぎすほのかたらひし宿のかきねに寝殿とおほしき屋の、西のつまに人々居たり。さき／＼も聞きし聲なりければ、こわづくり氣色とりて、御消息聞ゆ。若やかなる氣色どもあまたして、おほめくなるべし。

ほととぎすかたらふ聲はそれながらあなおほつかなさみだれのそら殊更にたどると見れば、「よし／＼うゑし垣根も」とて出づるを、人知れぬ心には、妬うもあはれにも思ひけり。さもつゝむべきことぞかし。道理にもあれば、さすがなり。

折から郭鳥が鳴いてわたる。その聲がこの宿をたづねよとすすめるやうであつたから、源氏の君は、御車を押しもどしなかつて、いつものやうに惟光を使となし、案内を言ひ入れなまつた。このときの源氏の君の歌は、

をちかへりえぞしのばれぬほととぎすほのかたらひし宿のかきねに

と。寝殿と思はれる建物の西端に、女房どもが集つてゐた。その女房どもの聲は、以前も幾度となく聞いてゐた聲であつたから、惟光は聲をかけ體裁をととのへて、御消息を申しあげた。

すると若々しい女房どもが澤山ゐるやうで、今の消息をおほつかなく變に思つてゐたやうである。返歌には、

ほととぎすかたらふ聲はそれながらあなおほつかなさみだれのそら

と。彼の女房はわざとたど／＼しく不審なやうなさまなので、惟光は「よし／＼、花ちりし庭の梢もしげりあひてうゑしかきねもえこそみわかね」ともいふから、門邊ひであるかも知れない」と言つて立ち出でて來たので、誰も知るものない女の心の底には、妬ましく残念にも、哀れにも思つたのであつた。源氏が思しめされるには、彼女には他にも男があることであるから、斯く用心して我を迎へないやうに謹むべきであるよと。當然な道理であつたから、君はさすがに憎くも思しめされない。

をちかへりえぞしのばれぬ云々の歌——「をちかへり」は引き返しての意。かつてほのかに鳴いて語つたことのある垣根に、時鳥が今も亦、以前のことがなつかしく耐へられないで、行きかへり／＼して鳴いてゐるが、私もまたそのやうに、嘗て君(女房をさす)と語りあつた時が耐へられないほどのばれるので、立ち返りやつてまゐりました。○ほととぎすかたらふ云々の歌——時鳥の訪ねてくれる聲は、その聲とは聞えまするもの、五月雨の降る聲にまぎれて

に「花ちりし庭の梢もしげりあひてうゑしかきねもえこそみわかね」とある。
○人知れぬ心には——女の心である。これにはなほ未練が残るのである。
○さもつゝむべきことぞかし——源氏の心である。彼女には他に男もあらうから、かく用心して我を迎へないのも、當然の道理であつたから。
○さすがなり——流石憎くもない。

はつきりとそれとは定めにくうございます。裏の意は、お訪ね下された御様子は源氏の君とはつきり知られましたが、さてどういふ御心でおたづね下されたものやら、御心のほどがあまりく不思議に思はれます。○うゑし垣根も——源注拾遺に、「細、花ちりし庭のこすゑもしげりあひてうゑしかきねもえこそ見わかぬ。今案、此引歌何より出たる歟。未及見。曾丹歌に、花散し庭の木のみもしげりあひて天照月の影ぞまれなる。上句はこれに似たり」と。

「かやらのきはに、つくしの五節こそ、らうたげなりしはや」と、まづ思し出づ。いかなるにつけても、御心の暇なく、年月を経ても苦しげなり。なほかうやうに見しあたりの情は、過し給はぬにしも、なか／＼あまたの人の物思ひぐさなり。

「かやうな身分の女としては、彼の筑紫の五節といふ女こそ愛らしかつたわい」と、源氏の君は先づ思ひ出でられる。斯くよい女についても、悪い女についても、君の御心は女のことに関もなく、幾年月を経過してもやはり心を悩まし苦しめられた。

やはりかやうに、嘗て一度馴染んだことのある女に對する愛は、いつ／＼までも忘れないでゐられたから、女の方ではよほどあきらめた頃に、源氏からまた言ひよりなされるので、又もや心がひかれるのであつた。そのために却つて多くの女どもの、苦しい物思ひの種となるのである。○年月を経ても——細流抄に、「忘るべき人もかやうにすてすをとづれ給によりて人の物思と

たねとなるのである。

○かの本意の所は——目的の所はの意で、花散里のところをいふ。
○女御の御方——麗景殿女御。
○ねびにたれど——やや年はとつてゐられるが。○勝れて花やかなる御おぼえ云々——この女御は桐壺院の特別に寵愛なるといふほどの事こそなかつたが、然し愛すべきなつかしい方であるとは思つてゐられた。
○昔の事かきつらね思されて——昔のことがいろ／＼と聯想せられて。

もなるとなり」と。

思ふことならざること無かつた、源氏の君のこれまでの全盛時代に比べて、故院崩御後は果角失意の境に立たせられた源氏には、この女の道についても、思ふにかなはぬやうになられたことを、ここにはじめて仄めかしたのである。

さてかの本意の所は、思しやりつるものしく、人めなく静かにて、おはする有様を見給ふも、いとあはれなり。まづ女御の御方にて、昔の御物語など聞えたまふに、夜更けにけり。二十日の月さし出づるほどに、いと木高きかげども、こ聞う見えわたりて、近き橋のかをり懐かしく匂ひて、女御の御けはひねびにたれど、あくまで用意あり、あてにらうたげなり。勝れて花やかなる御おぼえこそなかりしかど、むつまじう懐しきかたには、思したりしものをなど、思ひ出で聞え給ふにつけても、昔の事かきつらね思されて、うちなきたまふ。

さて源氏の君が最初から目的とされてゐた花散里のとは、御想像なされてゐたやうに、人影も少く、ごく物静にゐらつしやる御様子をごらんになるについても、物哀れである。

まづ麗景殿女御のお部屋で、いろ／＼と昔物語をなさつてゐられると、夜もだん／＼と更けて

しまつた。二十日の月影がさし上る頃に、御庭の木高き黒い影などが、小間う見渡される。縁
 さきに近く植ゑられてゐる橋の香気が匂うてくると、知人のことどもが思ひ出だされて懐しい。
 麗景殿女御は頗るお年もとつてゐられるが、どこ／＼までも深きたしなみがあつて、けだかく
 なつかしい方である。

この女御は桐壺院御在世當時は、格別に目立つた御寵愛はなかつたが、睦しく懐しい女である
 とは思召してゐられたなど思ひ出だされるについても、ありし昔のことどもがそれからそれへ
 と聯想せられて、感涙を催しなされる。

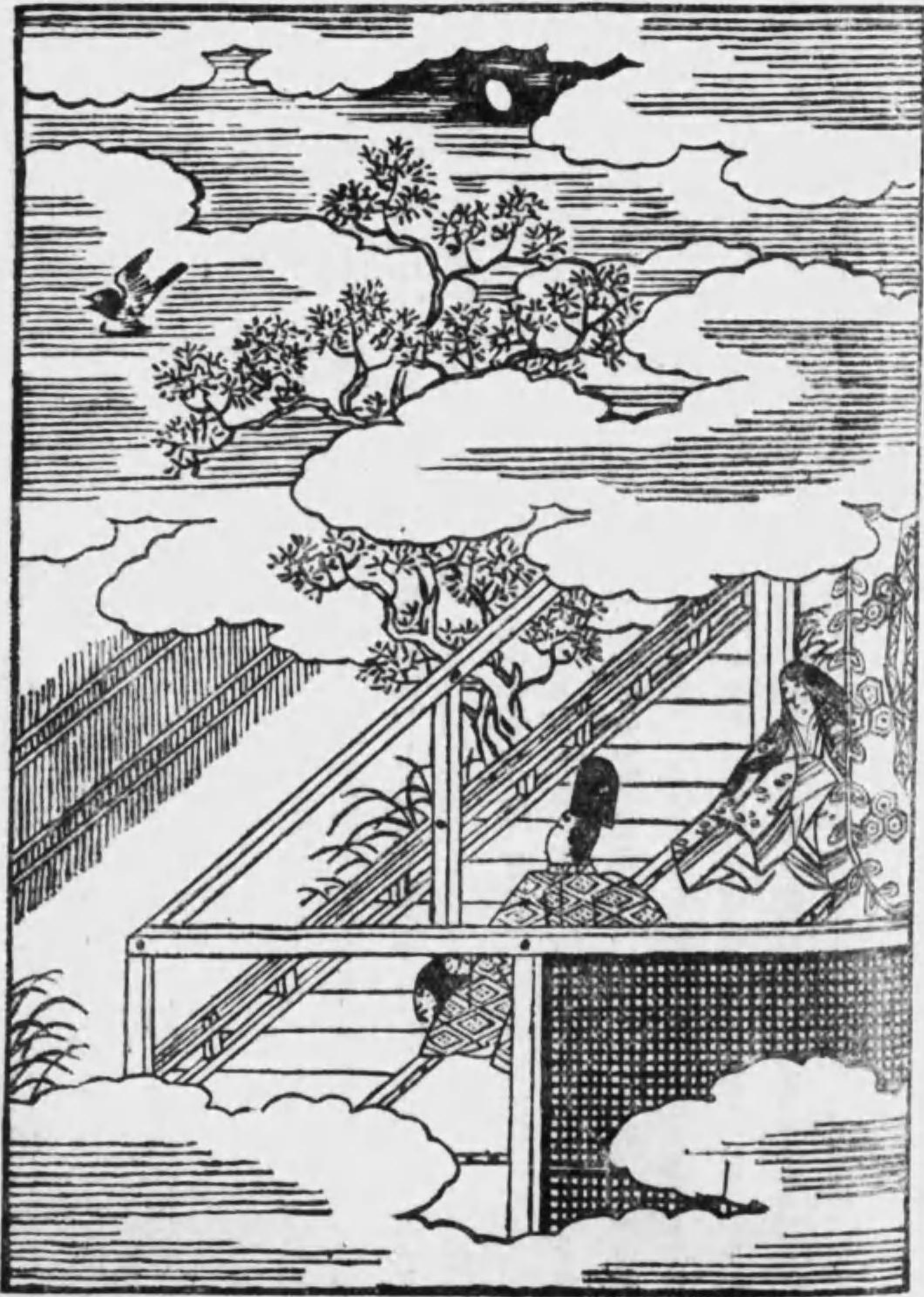
樹林鬱蒼と茂つた暗いところを背景となし、ゆかしい橋の香の漂ふ中に、たしなみ深い女御
 をあらはしたあたり、何とも言ひがたい情景である。

ほととぎすありつる垣根のにや、同じ聲にうちなく。慕ひきにけるよと思
 さるるほども、艶なりかし。「いかに知りてか」など、しのびやかにうち誦
 したまふ。

「橋の香をなつかしみほととぎすはなちる里をたづねてぞとふ
 いにしへの忘れ難う思ひ給へらるるなくさめには、まづ参り侍りぬべかり
 けり。こよなくこそ紛るることも、數そふことも侍りけれ。大方の世に隨

○ありつる垣根のにや——
 「さきほど道よりしてき
 た、中川の宿の垣根に鳴
 いてゐたのと同じ時鳥で
 あるか。」
 ○いかに知りてか——細
 流抄に「いにしへのこと
 かたらへば時鳥いかにし
 りてか鳴く聲のする」の
 百歌をひく。
 ○橋の香をなつかしみ云
 々の歌——補綴参照。

○いにしへの——桐壺院
 在世當時のこと。
 ○まづ参り侍りぬべかり
 けり——まづ差しちたつ
 て、こゝへ來べきであり
 ました。
 ○紛るることも——物思
 ひのまぎれることもある
 し。
 ○數そふことも——忘れ
 がたきことの増すことも
 あつた。
 ○大方の世に云々——人
 は誰でも時の権勢家に靡
 くのが習ひであるから。
 ○きかすべき人——湖月
 抄には、「かきくづす人」
 とある。今首書本による。
 ○まして——まして君は
 女の身でゐられるから。
 ○いとさらなる世なれど
 ——時勢の變遷は今更い
 ふまでもないことである
 が、これからを女御の感
 と古注にはといつてゐる
 が、これは草子地とした
 がよい。
 ○おぼしつゞけたる——



女御が。
○人の御さまからにや—
—やは源氏の人品けだ
かくみられるためかと思
はれて、一層の情趣を添
へた。

花散里

四三八

ふものなれば、昔がたりもきかすべき人少うなり行くを、ましていかに徒然もまぎることなく、思さるらむ」と聞えたまふに、いとさらなる世なれど、物をいと哀とおぼしつゝけたる、御氣色の浅からぬも、人の御さまからにや、多くあはれぞ添ひにける。

さきほど道よりしてきた、あの中川の宿に鳴いてゐた時鳥であるか、それと同じやうに鳴いてゐる。さては我を慕つてきたのであらうと、君が思しめされるのも優艶なさまであるわい。源氏は、「いにしへのことかたらへば時鳥いかにしりてか鳴く聲のする」などと、こつそり吟誦なされる。さて源氏は、

「橋の香をなつかしみほとときすはなちる里をたづねてぞとふ

故桐壺院がまだ在世なされた時のことどもを、忘れがたく思ひ悩むときの慰めには、まづ女御のもとに参上すべきでありました。さて只今お伺ひいたしまして、いろ／＼と昔物語を承りますと、この上もなく氣の晴々とすることもありすが、又却つて忘れがたい新しい思ひも増し加はることもございました。人は誰でも時の權勢家に靡くの習ひでありますから、源氏の權勢がすつかり地に落ちた今日は、誰も／＼我から去つてしまひ、昔物語を聞かすべき人もだん／＼と少くなつてゆく時で、私どもでさへ心淋しく思ふてゐますのに、ましてや、女御は女性であるから、御退屈さも紛れることなく思しめすであります」と、女御に申しあげられる。

○人めなく荒れたる云々の歌——補欄参照。
○さはいへど云々——麗景殿女御は故院から花やかな御寵愛を受けてゐられなかつたとはいふもの、やはり並々の女とはずつとすぐれてゐられたと源氏の君が、他の女と比べなさるのである。

時勢の變遷は今更言ふまでもないことながら、麗景殿女御が物事を強く哀に思しめされる御様子であるが、これは源氏の君の人品が優雅でゐられるためであるか、一層の情趣を添へました。
○いかにしりてか——河海抄に「いにしへのことかたらへば郭公いかにしりてかなくこゑのする伊行尺」と。源注拾遺には、「今案、これ六帖第五物語の歌なり。兼輔家集云、びはどのにまでたりければむかしのものがたりしたまふとて、北面によびあはせて、ふることも有ける中にとて此歌あり。いかにしてかはふるこゑのするとあるは誤なるべし」とある。又源注餘滴には「雅望考るに六帖には、「いかにしりてかふる聲のする」とあるといつてゐる。○橋の香をなつかしみ云々の歌——花橋の香をなつかしく思つて時鳥もやはり、橋の花が散つてゐるこの宿を音づれるが、私もやはり橋の香に故人のことどもが偲ばれて、父帝のゆかりなつかしきこの里をおとづれました。
この歌がやがて、本巻の名稱ともなり、又本巻の女主人公である三の君の呼名ともなつてゐる。
人めなく荒れたる宿はたちばなの花こそそのきつまとなりけれ
とばかりのたまへるも、さはいへど、人にはいと異なりけりと、思しくらべらる。

女御の御返歌には、

人めなく荒れたる宿はたちばな花こそそのきつまとなりけれ

花散里

四三九

とばかり仰せられたのも、ことに院から寵愛を受けられた、名高い方ではないとはいふもの、さすが故院のお目にとまつた人だけあつて、やはり並々の女よりはすつとすぐれてゐられると、世の女に比べられてごらんになつた。

補 ○人めなく荒れたる宿云々の歌——訪ひたづねてくれる人影も絶えて、もう荒れ果てた私の家は、軒端のところにある花橋が人を引く手引となりまして、あなた源氏の君の御訪ねを忝うするやうになりました。こ 橋にはそれとなく妹の花散里をほのめかしてゐる。

この歌については、湖月抄の傍注に「源にとはるはしとなりしと也」とあるが、宣長は玉の小櫛に、「下句の意、傍注のごとくならんとは聞ゆれども、そをのきのつまとなるとは、心得ぬいひさま也」と。源氏餘滴には、貫之集を引きて、「としごとくにきつつ聲する時鳥花橋やつまにはあるらん」の歌をあげてゐるから、「つま」といふ語のかうした一種の使ひ方があつたものであらう。

西面には、わざとなく、忍びやかにうちふるまひたまひて、のぞきたまへるも、珍らしきにそへて、よにめなれぬ御さまなれば、つらさも忘れぬべし。何やかやと、例の懐かしく語らひ給ふも、思さぬ事にはあらざるべし。假にも見給ふかぎりには、おしなべての際にはあらねばにや、さまざまにつけて、いふかひなしと思さるるはなければにや、にくげなく、我も人も情

○西面には——三の君、即ち花散里の住みたまふ部屋。
○わざとなく忍びやかに——わざとらしいところなく、如何にも女御を訪ねたついでといふ風にして。
○のぞき給へるも——源氏が顔を出してのぞきこ

むこと。

○珍らしきにそへて云々——源氏の君の御來訪が珍らしきことである上に、君の御姿がたぐひ稀なるさまをしてゐられるので、久しくとだへてゐた辛さも、花散里は忘れてしまひなされるだらう。
○思さぬ事にはあらざるべし——少しのお上手も交つてゐやうが、全然口先ばかりのお上手とも思はれない。

○假にも見給ふかぎりには云々——源氏の君が假初にも關係なさる女は、いづれも並々の女でなく、皆勝れた女であるためか、すべてのことについて、是れはつまらぬといふやうなはないやうである。源氏も相手の女もお互に愛情を注いでゐられた。

○それをあいなしと云々——それなのに、君の暫くの御無沙汰について、

をかはしつゝ、過し給ふなりけり。それをあいなしと思ふ人は、とにかくにかはるも、道理の世のさがと思ひなしたまふ。ありつる垣根もさやうにて、ありさま變りにたるあたりなりけり。

釋 三の君即ち花散里の住んでゐられる部屋の方へ源氏が行かれた。このときはわざ／＼と花散里をたづねに来たといふことなく、姉の女御を訪ねに来た序に立ち寄つた態度をして、こつそりと女の部屋をのぞき込まれた。君の御來訪は珍らしきことである上に、御姿がまた他に見馴れないほど比類なく美しいさまでゐらつしやつたのであるから、今までの君の杜絶の心辛さも、かうなつては當の花散里はすつかり思ひ忘れてしまふであらう。

源氏の君は花散里に對して、何や彼やと、いつものやうに如何にもなつかしいさまに口上手に物語りをなさるが、これは口先ばかりのお上手でなく、眞から思ひ込んでゐられるわけであるだらう。

元來、源氏の君が假初にも關係なさる女は、いづれも並々の女でなく、相當すぐれた女ばかりであるのだらうか。何についてもすつかりつまらぬ女だといふやうなものは無いらしい。それだから君も女もお互ひに、にくらしいといふところは見せず、愛情を注ぎあつてお暮しなさるのであつた。

それなのに、君が暫くの問訪づれなさらないと、それを面白からず思ふ女は、とかく心變りし

それを面白からず思ふ女はとかく心變りするが、源氏はこれは浮世の常態であるとあきらめてゐられる。
○ありつる垣根も——時鳥の鳴いてゐた中川の宿のところの女も、かうした事情で變心したものであつた。

花散里

四四二

て全然源氏から離れてしまふのもあつたが、かういふ時は、これが世の中の常態であると君にはあきらめられた。彼の時鳥の鳴いてゐた中川の宿のところの女も、かうした源氏の誓しの御無沙汰を恨んで、心を變へてしまつた女であつた。

補

○にくげなく、我も人も云々——岷江入楚に「秘源のたえん」なるをうらみずして有し人は此花散里なり。さる程に始終おぼしめてざりし人なり。心用ひのどかに然るべきは此花散里第一とみえたり。われも人もとは、源と女とのあひだの事をいふなり」と。

評

以前の記事によつて、中川の宿の女の心變りで、最早源氏も社會上の地位の失せ果てたことを書き、弘徽殿派の人々が、故桐壺院にゆかりのあるもの、例へば麗景殿女御などに對しても冷淡であることが記された。然し源氏の君はどこまでも愛情にこまやかな方で、女御の擁護は勿論のこと、妹の花散里とは禁中で假初の契があつただけであるが、それさへ棄てられぬほど情に厚い方であることを示してゐる。本巻は源氏物語中最も簡単な巻である。

花散里終

人物

致仕の大臣 攝政太政大臣にて、葵上の父にあたる。

王命婦 藤壺の女房である。

三位中將 頭中將と言つた方で、致仕の大臣の子にあたり、葵上の兄である。

大貳 太宰大貳で、五節の君の父。

中納言の君 葵上に仕へた女房の一人で、源氏の君の情人である。

明石の入道 大臣家の子で、元近衛の中將たりしが、官を去りて播磨守となり、任果てて明石の浦に留り、剃髮して明石入道と云ふ。

民部大輔 惟光といふ。源氏の君の乳母の子で、初めは右近大夫といつた。

明石の尼君 明石入道の妻である。桂の中務の宮の孫。

右近將監 中川伊豫守の子で、紀伊守の弟にあたる。

明石の上 明石入道の女、後に明石中宮を生む。

中務 源氏の君の情人、葵上の召使の女房。

中將 源氏の君の召使の女房である。

宰相の君 夕霧の君の乳母である。

年 立

源氏 廿六歳

源氏の君左邊の定めある事(三月廿餘日)
 前二三日大臣殿に渡り給ふ事
 中納言君に對面の事
 若君の乳母宰相の君、宮の消息を傳ふる事
 二條院に還つて西對にとどまり給ふ事
 次の日花散里に渡り給ふ事
 麗景殿に對面せらるる事
 二條院に歸つて、留守のことども、西の對にあづ
 け渡す事
 書を尙侍のもとに遣す事
 北山の御墓に參給ふ事
 先づ入道の宮に參給ふ事
 路次では左近衛將監御馬の口を取り、賀茂社を遙
 拜したまふ事
 書を王命婦に遣はし、東宮の御方に啓する事
 二條の姫宮別れを惜む事
 申の時に須磨の浦に下着の事
 大江殿を過る事
 行平中納言隱居の地の事
 長雨の頃、使者を立てて、書を京の所々に遣す事

四四四

七月

(二條院、入道の宮、尙侍、大臣殿等)
 書を齋宮に奉り、又齋宮より御使ある事
 花散里以下の御文を見給ふ事
 尙侍内裏に參内の事
 須磨の山里萩の景氣哀を催す事
 手習ひ作繪の事
 海に近き處に出る事、御供の人々歌を詠む事
 十五夜に月を見て故郷を思ふ事
 筑紫の五節の君、此浦を過ぐるの次で、消息を
 奉る事
 京の人々大將の君を戀ひ奉る事
 山里の冬景色の事、源氏の君琴を弾く事
 良清消息を明石の入道に遣すに、返答せざる事
 明石入道夫婦相語る事
 三位中將宰相となる事
 花の頃都を思ふ事
 三位中將宰相に任ぜられて、須磨の配所を來訪す
 る事
 山里の調度の事、海人海の物を獻る事、宰相作
 文盃酌の事、黒駒出引物と爲る事
 三月一日上巳の祓の事
 雨風雷鳴の事
 源氏の君夢思の事

梗

概

世間が源氏の君のために、甚だむづかしいことが起りだしたの
 で、これを見てとつた源氏の君は自ら身を須磨に避けられた。
 京を出でられたのは三月廿日あまりである。出發に先きだつて
 方々への告別がある。まづ奏上の父殿を訪問なされ、愛兒夕霧
 の後事を懇に託せらる。悲しい中に女房の中納言の君との情緒
 が描かれてゐる。次に二條院に行かれると、既に荒廢の氣分が
 見える。紫上の西の對屋に行かれて、盡きぬ名残を惜まれた。
 この晩は、花散里を訪ねられ、朧月夜のもとへは單に一通の消
 息をつかはされた。さて出發の前夜には、北山にある先帝桐壺
 院の陵墓に御參拜なさる。その途中、入道宮(藤壺)を訪問にな
 り、月光かゞやくもとに賀茂の社を遙拜し、それから御陵墓に
 至られた。墓前に拜禮なさると、先帝の御姿があり／＼と見え
 る。夜の明ける頃お歸りになり、春宮に別れの消息を奉られ、
 更に紫上との惜別があつて、いよ／＼須磨の地に向はせ給ふ。
 長雨降りつゞく夏の頃、京の紫上、入道の宮、朧月夜、大殿、
 宰相のめのもとに宛てた手紙を送らせられる。すぐに各々から返
 事があつた。又伊勢に下られた六條御息所から、源氏のもとへ
 消息の使が来る。花散里からもたよりがあつた。
 名勝の地とはいへ、都を離れた賤が浦べに佇しきその日／＼を

送つてゐられる。或る時は深更たゞ獨り眼覺めて清靜に琴をな
 らし、或は風景を繪にして心をなぐさめられた。かくして約一
 ケ年の月日は流れた。その八月の頃、筑紫の大貳任果てて上洛
 の際、その娘五節君を連れて須磨の浦べを過ぎた。大貳は子の
 筑前守を使として源氏に御消息がある。五節君からもおとづれ
 があつた。
 都の人々は、今更に源氏の君を戀しく思つて、心ひそかに歸洛
 あそばされんことを希うた。一方須磨に隣接してゐる明石の浦
 には、明石の入道がある。この男は世と相容れない拗者で、そ
 の娘を何とかして源氏に奉らうとしてゐる。翌年の春となつた。
 このとき三位中將(頭中將)は、世からどんな攻撃を受けるとも
 かまはぬといふ一大決心を持つて、源氏のもとを告づられた。源
 氏はこの無二の親女の音づれを得て、いたく喜ばれる。
 三月上巳の日の祓に海濱に出でられた。好天氣であつたが、忽
 然と暴風雨起り、人々あはてたさまで逃げ歸つた。風雨なほ止
 まないうちにこの巻は終つてゐる。この巻の名は「松島やあま
 のとまやもいかならん須磨のうら人しほたるころ」といふ歌
 と、源氏が須磨の地に謫居してゐられたことによつて名づけら
 れた。

○世の中いと云々——時勢の移り變るにつれて、源氏の君にとつては、世の中がすこぶる面倒な都合の悪いことにばかりなつたから。

○せめて——強ひて。○ありへても——暮して居ても。

○これよりまさる事云々——これ以上のうるさい事、即ち遠流などが行はれてうるさくなるかと思しめして。

○ひたたけたらむ——とりしまりなく、ばつとしたさま。

○ほいなるべし——罪のある身として、謹慎すべき本意にそむくであらう。

○人わろくぞおぼし亂る——人目も不體裁なほど思ひ迷つてゐられる。

世の中いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、せめてしらず顔にありへても、これよりまさる事もやと思しなりぬ。かの須磨は、昔こそ人の住處などもありけれ。今はいと里ばなれ心すこく、海士の家だに稀になん聞きたまへど、人しげくひたたけたらむ住居は、いとほいなるべし。さりとして都をとほざからむも、故里おほつかなかるべきを、人わろくぞおぼし亂るる。

時勢も移り變つてしまひ、今や世間は源氏の君にとつては、頗る面倒なことが起り、君の身には都合の悪いことばかり殖えてきた。だからして、無理強ひにでも素知らぬ顔をして暮らしてゐたとて、これ以上にうるさい事が増つて、遠流などの憂き目に逢ふかも知れないと考へられた。(それで今のうちに自分の方から進んで、世から身を退いたがよいと考へられた。)

(いよ／＼世を通れるとするならば、播磨の名所須磨へでも行かうかと考へられた。)彼の須磨は昔こそ高貴な人の別邸などもあつた。然し只今は全く人里を離れ、心凄しい所となり、漁夫の家でさへ少ないとお聞きになつた。けれども都の住家の、人の出入も頻繁であり、とりしまりのないばつとしたところでは、罪ある身の謹慎すべき本意にも背くであらう。それには須磨こそ理想であると思召された。さうはいふものの、この都を離れて、遠く須磨に去つては、郷里

のことどもが不安になるのを、他への見る目も不體裁なほど思ひ迷つてゐられる。

○ひたたけたらむ——玉の小櫛に、「俗言に、とりしまりなく、ばつとしたるといふこと也。

○ひたたけたらむ——玉の小櫛に、「俗言に、とりしまりなく、ばつとしたるといふこと也。此詞上若菜巻にも見ゆ。考へ合すべし。又拾遺にいへるをも考ふべし」と。

よろづの事、來しかた行くすゑ思ひつゞけたまふに、悲しき事いとさまざまなり。

うきものと思ひ捨てつる世も、今はと住み離れなむ事を思すには、いと捨て難き事多かる中にも、姫君の目暮にそへて、思ひ歎き給へるさまの心苦しきは、何事にも勝れてあはれなるを、行きめぐりても、また遇ひ見む事を、必ずと思さむにてだに、なほ一二日のほど、よそ／＼に明し暮す折々に、覺束なきものに覺え、女君も心細うのみ思ふ給へるを、幾年その程と限ある道にもあらず。

いろ／＼の事、過去の事や未來のことどもを、それからそれへと思ひつゞけたまふに、たゞ悲しいことばかりがさまざまに湧くのである。

この世は心憂きものであると思ひあきらめてゐられた世も、いよ／＼これからの憂世を遁れ

○今はと住み離れなむ事と云々——今はいよ／＼この浮世から遁れようと決心して見ると、どうもこの世を見捨て去るのもむづかしい事が多くある中である。

○姫君——紫上。○何事にも勝れて——何よりも勝つて君の心に泌み込んだ。

○行きめぐりても云々——必ず復めぐり逢ふべしと思つてゐてさへも。

○覺束なきものに覺え——紫上の身上が不安に思はれ。

○女君——紫上。○幾年その程と——今度須磨に世を遁れるとすれば、幾年間の歲月を経たら都に歸るといふ期限の

ある旅でもなく。

①逢ふをかぎりには——何時かは復逢はれるであらう。

う。それまでの別れである。古今集の「わが戀はゆくへも知らず果もなし逢ふをかぎりと思ふばかりぞ」の歌による。
○さだめなき世に——無常な世に。
○やがて別るべき門出にもや——今度の別れが、このまま永久の別れ、即ち死別となつてしまふのではなからうかと。
②いみじう覺えたまへば——源氏が非常に悲しく思しめされるので。
○忍びてもろともにもやと——ひそかに紫上をも諸共に連れて行かうかといふ氣になられるときもあるが。
③海づら——海岸。
○かくらうたき御さまにて——こんな優しい姿の紫上を、そんな地に連れてゆくのも甚だ不釣合である。
○わが心にもなかく——云々——源氏自身の心で

須磨

四四八

去らうと決心してみると、どうもこの世が見捨てざるに忍びがたい事が澤山出来てくる。その中でも紫上が源氏と別れねばならぬのを、朝晩について始終なげき悲んでゐられる。この可憐な姫君がなげきに沈んでゐられるのを見るときの、源氏の君の心苦しきは、他の何事よりもまさつて君の心をあはれと感ぜしめた。別れても又再び行き逢ふことは必ずあるものだから考へになつても、それでもやはり、一二日の僅の間、この姫君と別れて、他處で暮されるときでも、君は女の身上はどうであらうかと不安に思召され、紫上の方でも、さういふ時は心細う思つてゐられた。であることどもを考へれば、今度のやうな別離はなかく安々と出来ないものである。なほ今度は須磨に世を通れるのが、幾年の歳月を経たならば、都に歸るといふ期限のある旅でもない。

○行きめぐりても——これは、古今和歌集卷八、離別歌に、「道にあへりける人の車に、物をいひつきて、別れける所にてよめる。ともりの」と詞書して、「したの帯の道はかた／＼別るともゆきめぐりて逢はむとぞ思ふ」といふ歌の意をとらへたものといふ。この歌の意は、下の帯をするには、はじめはその一端が左右兩方に別れるけれども、廻して結ぶときは、めぐりめぐつて又出合ふものである。その通りに今行く道は、かうして左と右とに別れて行きますが、又そのうちに是非とも、出合はうと存じますといふこと。

逢ふをかぎりには隔たり行かむも、さだめなき世に、やがて別るべき門出に

もやと、いみじう覺えたまへば、忍びてもろともにもやと、思しよるをりあれど、さる心細からむ海づらの、波風よりほかに、立ち交る人もなからむに、かくらうたき御さまにて、引き具し給へらむもいとつきなく、わが心にもなかく物思ひのつまなるべきをなど、思し返すを、女君は、「いみじからむ道にも、後れ聞えずだにあらば」とおもむけて、うらめしげにおほいたり。

（今はかうして都を出でて、須磨の地へ去るが、何時復、都に歸られるかそれはわからない。けれども何時かは又都に歸つて、親しき人々にも逢はれるであらう。）その何時かは逢はれる、それまでの別れをして去つて行くが、無常な世の中である。（再會の機は期し難い）この別れがこのまま永久の別れ、即ちこの世の死別となるかも知れないと、源氏の君は非常に悲しく思しめされる。それでいつそのこと、ひそかに紫上をも引きつれて、諸共行かうかと思ひつかれる時もある。けれども彼の須磨の地は波や風が音づれるだけで、その他には誰も訪うてくれる人のない淋しい土地である。

さうした地に、かうした紫上のやうな愛しい女を、引きつれて行くのも不釣合であるし、源氏御自身の心にも、却つていろ／＼と心配事の種子となるであらうなど、君は考へなほしなざる

須磨

四四九

と、やはり自分獨り心靜かに行かうと決心なされた。が、紫上は、「どのやうな心苦しい旅であらうとも、君と一緒にさへ行かれるならば、何の不満もございませぬ」と、婉曲にそれとなくさうした態度を示して、源氏が捨て去つて行かれるのを恨めしさうに思つてゐられる。

○逢ふをかぎりに云々——古今集戀歌二に、みつねの歌として「わが戀はゆくへも知らずはてもなし逢ふをかぎりと思ふばかりぞ」とある歌による。この歌の意は、私の戀はこれからどうなつて行くのか、又いつまで續いて行くのか、さつぱり見當がつかぬ戀である。ただ戀人と相逢ふまでかうした苦しい戀をするのであると思つてゐるだけで、さてそれが何時のことか全くわからない。○別るべき門出——古今集卷十六、哀傷歌に、「かひの國に、あひしりて侍りける人とぶらはむとて、まかりける道なかにて、にはかに病をして、いま／＼となりにければ、よみて、京にもてまかりて、母に見せよといひて、人につけ侍りける歌」と詞書して、ありはらのしげはるの歌に「かりそめのゆきかひちとぞ思ひこし今はかぎりのかどでなりけり」とある句によつたものといふ。

評 花やかに暮して來られた源氏の君の心にも、「逢ふをかぎりに隔たり行かむも、さだめなき世に、やがて別るべき門出にもやと云々」と仰せられて、無常な世の淋しさを感じられて來た。

かの花散里にも、おはし通ふ事こそ稀なれ。心ほそく哀なる御有様を、この御蔭に隠れて物したまへば、いみじう歎き思したるさま、いと道理なり。

も、却つて心配なことの種となるであらう。
○思し返す——考へなほす。
○いみじからむ道にも——どのやうな苦しい旅になりとも、諸共にさへ行くならば。
○後れ聞えずだにあらば——遅れ申さず御一緒に行くならば。
○おもむけて——露骨にそれとは示さないで、婉曲にそれとなくさうした態度を示す。

○心ほそく哀なる——花散里の心細く哀な生活を。
○この御蔭に隠れて物し

——源氏の君の後刻によつて心安く過してゐられるので。

○いみじう歎き——源氏の須磨に去られるのを、花散里がひどく歎き悲しみなされる。

○なほざりにても——源氏が一寸でも關係された女ども。

○ほのかに見奉り——源氏が暫くでも通つてゐられた女。

○入道の宮よりも——藤壺の宮。

○物の聞えや云々——源氏をたづねたならば、世間からどんなに評判せられるであらうかと。

○昔かやうにあひおぼし——藤壺が以前にも、斯様に思つてくれ、又こんなに眞情をも見せて下さるならばと源氏が考へられるのである。

○さま／＼に云々——さても、さま／＼に氣苦勞をする藤壺との縁である

なほざりにても、ほのかに見奉り通ひたまひしところ／＼、人しれぬ心を碎きたまふ人多かりける。入道の宮よりも、物の聞えや又いか／＼とりなされむと、わが御ためつゝましけれど、しのびつゝ御訪問常にあり。

昔かやうにあひおぼし、あはれをも見せ給はましかばと、うち思ひ出でたまふに、さもさま／＼に、心のみ盡すべかりける人の御契かなと、つらう思ひ聞え給ふ。

釋 彼の花散里の許へも、源氏の君のお通ひあそばされることはごく稀である。この頃の花散里の境遇は心細く哀なさまであつたのを、源氏の君の援助保護によつて暮してゐられた。そのために源氏の君の今回の須磨に世を避けなされるのを、花散里は大へんなさまになげき悲しまれた。これは無理からぬことである。

源氏が一寸關係された女でも、ちらりとご覧になつたり、或は通ひなされたところ／＼の女は、吾獨り心を碎いてゐる人が多つた。

藤壺入道の宮のもとからも、源氏の處へ御消息があつた。かうした際に宮のもとから源氏へたよりするのが、世間に露見したならば、弘徽殿太后などの騒ぎ立てで、世間の評判もどうであらうかと、先づ自己を安全にする爲めから言へば、この際は源氏への消息などはさし控へるの

かなと。

○今としも——只今出發するとも。
○出で立ちたまふ——出發なされた一往概括して述べ、以下更に立ちもどつて出發の際の事どもを細叙する。

○さるべき所々に——ひろく人々には出發の日月を發表なさらなかつたが、然るべき所々にだけは御文があつたのである。

須磨

四五二

がよいのであるが、それでも宮は内々で、始終御訪問の使があつた。かく藤壺が世間の危険を冒してまでも、おとづれなさるのを、源氏はありがたく思しめさるについても、以前も藤壺が、かやうに吾を愛して下され、眞實の心をもあらはして下さるならば、どれほど嬉しかつたらうにと思ひ出だされるので、さてもいろ／＼と氣苦勞ばかりされる藤壺との縁であるかなと、今の嬉しきについても、却つて心苦しう思しめし給ふ。

三月廿日あまりのほどになむ、都離れたまひける。人に今としも知らせたまはず。ただいと近う仕うまつり馴れたるかぎり、七八人ばかり御供にて、いとかすかに出で立ちたまふ。

三月廿日過ぎに、源氏の君はいよ／＼都を出發なされた。この時は、君は只今出發するといふことを、他の誰にもお知らせなさらない。ただ君に親しく仕へ馴れてゐるものだけ、七八人ばかりを供人としてお連れなされ、ごくこつそりとしたさまで京を出發して、須磨に向はせられた。

さるべき所々に、御文ばかり、わざとならずうちしのび給ひしにも、あはれとしのばるばかり書き盡したまへるは、みどころもありぬべかりしかど、その折の心地のまぎれに、はか／＼しくも聞き置かずなりにけり。

○わざとならず云々——ことさらの暇乞の文でなく、こつそりとしたおたよりにも。
○その折の心地のまぎれに——著者の言である。源氏の出發といふ際には、私も忙しい心のまぎれに。
○はか／＼しく——しつかも。

○二三日かねて——出發の二三日前に。
○大殿に——致仕の大臣、即ち左大臣邸。
○御方——奏上の御部屋。
○若君——夕霧。
○昔侍ひし人——奏上在世中に仕へてゐた女房中にて、未だ退出せないてゐた人々。
○参うのぼり——局に住んでゐるものが、源氏の來られた本殿に上るをいふ。
○物深からぬ——特別深い思慮もない女房達ま

源氏の君が出發なさる前に、然るべき所々へ、告別におでかけなさらなかつた代りに、お文だけを、わざとらしいさまでなく、こつそりと送りなされた。かうした御消息文の中にも、情緒纏綿としたさまは書かれたものもあつたに違ひない。それらの文はまことに見ても價値のあつたものであつたらうが、私(紫式部をさす)もその當時この悲しいことどもで、心もとりみだしてゐましたから、しつかりとも聞きとどめて置かないで終りました。それでここにそのことどもを詳細に述べるわけにも行きません。

二三日かねて、大殿に、世に隠れて渡り給へり。網代車のうちやつれたるにて、女車のやうにてかくろへ入りたまふも、いとあはれに、夢とのみ覺ゆ。御方いと淋しげに、荒れたる心地して、若君の御乳母ども、昔侍ひし人の中に、まかて散らぬかぎり、かく渡り給へるをめぐらしがり聞えて、参うのぼりつどひて、見奉るにつけても、ことに物深からぬ若き人々さへ、世の常なさ思ひ知られて、涙にくれたり。

源氏は御出發になる二三日前に、御舅の左大臣邸へ、非常に世間體を隠れ忍んで御暇乞ひに行かれた。網代車の質素なものに、女などの乗つてゐるやうに隠れ乗りなされた様子は、ただ夢のやうであつて、これがありし日の威風堂々たる源氏の君とは思はれなかつた。

須磨

四五三

で。
○世の常なき思ひ知られ
—世の中の無常なきま
が思ひ知られて。

○若君——當年五歳。
○ざれ走りおはしたり—
—ふざけてかけてこられ
た。
○久しきほどに——久し
い間見なかつたのに、吾
を見忘れしなのが可愛
らしい。

○大臣——左大臣。
○つれづれと籠らせ給へ

らむほど——源氏が朝廷
にも出仕なされず、つれ
づれと引籠つてゐられる
間。
○何と侍らぬ昔物語も—
—とりとめもない昔話に
でも。
○参り来て聞えさせむ—
—あなたの許に参上して
お話し申さうと。
○朝廷にも仕らまつらず
—致仕表を奉つたので
ある。
○位をも——官も位をも
いふ。
○私さまには腰をのべて
など——私用の爲には、
屈める腰を伸して、ピン
／＼と出で歩くなどと、
世上の時もよくありませ
んから。盤居の人の出で
歩くを、腰伸べてと誘る
のである。
○今は世の中——この句
以前の大臣の物語は、大
臣の致仕せない徳居時代
のものであつたが、この
句から以下は、左大臣の

故葵上の御部屋は、まことに寂しく荒れはてた感じがする。若君夕霧の乳母どもや、その他故
葵上に嘗て仕へてゐた女房達の中で、未だ退出もせず残つてゐるものどもは、今日源氏の君の
晋づれなさつたのを珍しがり申して、女房の局にあつたものも、御殿の源氏のゐられるもとに
参候して、君の御顔を拜し申した。君を拜するについても、格別に思慮深いといふこともない
女までが、やつれてゐられる君の姿を見て、世の中の無常はかないことが、今更のやうに思ひ
知られて、涙に暮れてゐた。

補 ○世に隠れて——一説に、「夜に隠れて」なりともいふ。それでも通ず。

若君はいと美しうて、ざれ走りおはしたり。「久しきほどに忘れぬこそあは
れなれ」とて、膝に据ゑたまへる、御氣色しのびがたげなり。

夕霧の若君はまことに美しくおなりになり、源氏の君の來訪を嬉しがり、ふざけながら駆け
だしてきた。この愛らしいさまをご覧になつた源氏の君は、「久しい間見なかつたのに、吾を見
忘れしてゐないのが可愛らしい」と言つて、若君を御自身の膝の上に据ゑてゐられる。このと
きの君の御様子は、感慨無量なさまである。

誕生後間もなく母を亡ひなさつた夕霧は、たまさかな父の御來訪を得て、うれしさに寄りつ
いたのである。さすがの源氏も感なきを得なかつたであらう。

大臣こなたに渡りたまひて、對面し給へり。「つれづれと籠らせ給へらむほ

ど、何と侍らぬ昔物語も、参り来て聞えさせむと思ひたまふれど、身の病
おもきにより、朝廷にも仕らまつらず、位をも返したてまつりて侍るに、
私さまには腰のべてなど、物の聞えひがく／＼しかるべきを、今は世の中は、
かるべき身にも侍らねど、いちはやき世のいとおそろしう侍るなり。かか
る御事を見給ふるにつけては、命長きは心うく思ひたまへらるる、世の末に
も侍るかな。天の下をさかさまになしても、思ひたまへよらざりし御有様
を見たまふれば、よろづいと味氣なくなむ」と聞えたまひて、いたうしほ
たれ給ふ。

左大臣は、源氏の君のゐらせられるところにお出でなされて、御對面あそばされた。さて左
大臣が仰せられるには、「源氏の君が朝廷にも出仕なされず、つれづれと引籠つてゐられる頃、
御退屈を慰め申すために、私が参上いたしました。とりとめもない昔物語でもいたさうと思つ
てゐましたが、恰度その頃は私も病氣が重くありましたので、朝廷に出仕するのも止めまして、
位階も官も返上してゐました。さうして御許可をお待ち申してゐたのですから、公のことは
仕へないで、私一人の私用のことには、かがんでゐる腰をひき伸ばして、出であるてゐるな
どと世人が噂しては、私がねづけたもののやうに思はれて外聞がわるうございました。それで

致仕してからの物語である。
 ○いちはやき世の——何か事があると、すぐ彼此と噂するすばやき世の中がこわくて。
 ○かかる御事を見給ふるに——源氏がかうして都を出でて須磨に去られることを見るにいつも。
 ○天の下云々——現代の言ひ方では、「天下が逆になりても」といふに同じ。
 ○思ひたまへよらざりし——この語の上に、「かかることあらんとは」の語を補ふと解し易い。

○とある事も、かかる事——何事もみな。
 ○いひもて行けば——言ひつゞければ。
 ○自らのおこたり——自分自身の誤。

君をおたづねするのも遠慮してゐたのです。
 然し只今となつては、官をやめる方はお許しになり、無官の身分となりましたから、世評などは遠慮すべき身でもありません。けれども、私どもの方に、何か事があると、すぐさま彼此と噂する時代でありますので、それがこわくて今日まで、まだ君をおたづねもせず御無沙汰いたしてゐました。今度、君には都を出でて、須磨の地に退きなさるといふことをお聞きいたしました。命が長いといやなことどもがあるものだと思はれる、末世にもなりました。斯く源氏の君が都の中にはゐられなくなつて、片田舎に世を避けなさるなどは、たとひ天下が逆になつたとて、さういふことはあるまいと、思ひもよらなかつたのでありますが、この思ひがけない君の御様子を見奉つては、私どももよろづのことどもがつまらなくなつてしまひました」と申しあげられて、涙に濡れてゐられる。

補 ○命長きは云々——莊子曰、壽則多辱と。

評 左大臣は表向きの理由は病氣といふので辭任したのであるが、もとより本當の病氣であつたのではなう。

「とある事も、かかる事も、前の世の報にこそ侍るなれば、いひもて行けば、ただ自らのおこたりになむ待る。さしてかく官爵を取られず、あさはかなる事にかかづらひてだに、公のかしこまりなる人の、現さまにて世の中

○さして——格別に。
 ○あさはかなる事にかかづらひて——わづかな答を受けたものでも。
 ○公のかしこまりなる人の——朝廷の咎めを蒙つた人は、常のやうに世間に顔を出して歩くのは。
 ○他の國——異朝。外國。唐土をさす。

○遠く放ち遣はすべき定なども云々——私を遠流の刑に處するなど評議あるのは、特別な重い罰を蒙るのでせう。
 ○にごりなき心に任せて云々——それですから、私は心の潔白なのをたよりとして平氣でゐるのも。
 ○これより大なる恥に臨まぬさきに——官職をやめられたこの現状の恥より、更に大なる遠流などの罰を受けない先に、自分から一時身を世間より退かうと決心しました。

中にありふるは、咎重きわざに、他の國にもし侍るなるを、遠く放ち遣はすべき定なども侍るなるは、さまざま異なる罪にあたるべきにこそ侍るなれ。にごりなき心に任せて、つれなく過し侍らむも、いとばかり多く、これより大なる恥に臨まぬさきに、世を遁れなむと思つたまへ立ちぬる」など、こまやかに聞え給ふ。

源氏の君は、「この世に於けるいろ／＼なことどもは、これみな前世からの果報でありますから、いひつづけて行けばつまる場所は、單に自分自らの誤になるのです。私のやうに格別にかく、官爵を解かれるまでもなく、もつと軽い僅な咎を受けたのでさへも、朝廷の咎を蒙つた人は、常のさまで世間と交際してゐるのは、罪重きことであると、唐土でも偽てゐます。それを今度私を遠流の刑に處するなど評議のあるのは、特別に重い刑罰に處せらるべきのでこそあるのでせう。勿論、何のやましいところもありませんが、それだからと言つて平氣なさまをよそほうてゐるのも、朝廷に對して大に遠慮すべきであります。又とかくしてゐるうちに更に大なる罪にあたるかも知れませんが、只今官職を解かれた恥よりも大きな恥に逢はないさきに、自分自ら世間から遁れて、須磨へでも隠れようと決心いたしました」などと、詳細に申しあげられた。

補 ○官爵を取られず——源注餘滴に「一本、くわんさくをとかれず」とある。○おこたり——

玉の小櫛に、「俗言にあやまりといふこと也。我があやまりにて候と、謝するを、おこたり申すといひ、又今の世にいふ誤り證文を、昔は怠狀といへり」と。

昔の御物語、院の御事、思しのたまはせし御心ばへなど聞え出でたまひて、御直衣の袖もひき放ちたまはぬに、君もえ心強くもてなしたまはず。若君の何心なくまぎれありきて、これかれに馴れ聞えたまふを、いみじと思したり。

左大臣は、昔のことどもを、追想していろ／＼と物語りなされたり、故桐壺院のことどもや、又桐壺院が源氏の君を御寵愛あそばされて、かれこれと仰せられた御心のおもむきどもを仰せられて、流れる涙はとめどもなく、御直衣の袖で顔を掩うたまま少しも引きはなしなさらぬ。源氏の君も感慨に耐へられないで、氣丈夫にもならず、ほろりと悲しいさまをしてゐられる。

斯うしたひつそりした悲しみの中を、若君夕霧の君だけは、何の心配もなく、ここかしこを飛び歩いて、そこらの人々に馴れ／＼しくしてゐられるさまを、ごらんになつた源氏の君はいたく可愛くおぼしなされた。

過ぎ侍りにし人を、世に思うたまへ忘るる世なくのみ、今に悲び侍るを

○昔の御物語——これから又左大臣が仰せられるのである。
○院の御事——桐壺院の御事。
○思しのたまはせし御心ばへ——桐壺院が源氏の君を愛しなかつて、いろいろと仰せられた心のおもむき。
○ひき放ちたまはぬ——袖を顔におしあてて涙をおさへたまふさま。
○君もえ心強くもてなし——源氏もほろりとして。
○まぎれありきて——さまざまの人の間に交りこんで歩き廻ること。
○いみじと——源氏がいたく可愛く思しなされた。
○過ぎ侍りにし人——死んで行つた葵上を。

○この御事になむ——今度源氏の君が都を去りなさることについては、もし葵上がまだ生存してゐたならば、どのやうに悲しく思ひ歎くでありませう。
○よくぞ短くて云々——よくこそ短命で死んで行つたのが、却つて只今の悲しい憂目に遇はなくてすんだのでよかつたと慰められます。
○幼くものしたまふが——幼くゐらつしやる夕霧が。

○かく齡過ぎぬる中に——斯く祖父祖母老人の中にゐて。
○なづさひ聞えぬ——父の源氏に馴れ親まない。
○隔たりたまはむ——多く經過するをいふ。
○まことに犯あるにてし——かうした遺流などにあたる者、必ず眞に犯罪があつたとも限らない。

この御事になむ、もし侍る世ならましかば、いかやうに思ひ歎き侍らまし。よくぞ短くて、かゝる夢を見ずなりにけると、思うたまへ慰め侍る。幼くものしたまふを、かく齡過ぎぬる中に、とゞまり給ひて、なづさひ聞えぬ月日や過たりたまはむと、思ひたまふるなむ、よろづの事よりも悲しう侍る。べにしへの人も、まことに犯あるにてしも、かかる事に當らざりけり。なほさるべきにて、人の御門にもかかる類多く侍りけり。されど言ひ出づるふしありてこそ、さる事も侍りけれ。とざまかうさまに、思ひたまひよらむ方なくなむ」など、多くの御物語聞えたまふ。

左大臣は、「死んで逝きました葵上のことを、思ひあきらめられないで、今日に至るまで悲しく思ひ出してゐます。

然るを今度源氏の君が都を去つて須磨の地に行かれるについても、若し葵上がまだ生存してゐたならば、どのやうに悲しく思ひ歎くでありませう。そのことを思ひますと、早く死んでしまつて、このやうな悲しい憂目に遇はなくてすんだのは、結局よかつたと思はれます。幼くゐらつしやる夕霧(葵上の遺兒)が、斯く老人となつてゐる祖父祖母どもの間に育てられて、父の源氏の君とは馴れ親まれなくて、多くの歳月を經過なさるかと思ひますと、他の何事よりもこの

○なほさるべきにて——
 やはりさうした前世からの因果にて冤罪を蒙ることは、唐土にも多く例のあることである。
 ○されど言ひ出づるふしありて——併しそんな冤罪も、これこれの罪と云ふ、はつきりした罪名があつてこそ罰せられた。
 ○とさまかうさまに——どう考へても考へ解せられない。

○三位中將——頭中將のこと。
 ○人々——侍女ども。
 ○人よりはけに——他の侍女どもよりは勝つて、心ひそかに源氏が寵愛してゐらつしやる中納言の君。中納言は、故奏上の侍女であつた。
 ○いへばえに——いへばえに

打消の助動詞「ず」の變化「ぬ」の轉じたもの。云へば言ひ得ずといふこと。口には得言はれぬといふ意。なほ補欄参照。
 ○静まりぬるに——人々が皆寝静つたので。
 ○取りわきて——今晚はいつもよりも殊に深く、中納言と物語られた。
 ○これにより——中納言の君のために。

事が悲しう思はれます。古の罪にあつて遠流された人々でも、必ず犯罪のあつた人ばかりとも限りません。なかには讒言によつて無實な罪に處せられた人も遠流の刑になりました。これもやはりさうした前世からの因縁でありませう。我が國ばかりでなく唐土にもかうした例が澤山ありました。

然しさうした無實な罪でも、これこれの罪といふはつきりした罪名があつてこそ罰せられたのである。只今のあなたのは、どう考へて見ても、わけのわからない遠流ではありませんか」など、いろ／＼と盡きぬ御物語をなされる。

○言ひ出づるふしありてこそ——玉の小櫛に、「此詞をもて思へば、源氏君の遠流のさだめは、さして何の罪といふことはなかりしと聞えたり」と。

評 「いにしへの人も、まことに犯あるにてしも、かかる事に云々」から終りのところまでには、老境になられた左大臣の愚痴が書かれてゐる。

三位中將もまゐり逢ひたまひて、御酒などまゐり給ふに、夜更けぬれば、とまり給ひて、人々御前にさぶらはせたまひて、物語などせさせ給ふ。人よりはけにこよなう忍び思す中納言の君、いへばえに悲しう思へるさまを、人知ればあはれと思す。人皆静まりぬるに、取りわきて語らひたまふ。これによりとまり給へるなるべし。

源上の兄である頭中將は、今は三位中將となつて、此處へ來られた。そこで御酒も出でたので、だん／＼と夜も深更となつた。

源氏の君は遂に左大臣邸に今夜は一泊するのに決心なされ、女房どもを御前にさぶらはせなさつて、さまざまな世間話などをなされる。源氏の君が、他の侍女どもよりは勝つて、心ひそかに寵愛してゐられた中納言の君もそこにゐた。この女房は、口には出して言はうにも言はれないうが、恥しさうに君の都を去られるのを悲しく思つてゐた。それをすぐ悟られた源氏は、ただひとり心ひそかに可愛と思つてゐられる。

人々も皆寝静つてから、今晚はいつもよりもとりわきて、この中納言女房と物語りなまつた。源氏が今晚此處に宿泊あそばされたのは、この中納言の君がゐたからの故であるだらう。

○いへばえに——伊勢物語に、「いへばえにいはねばむねにさわがれて心ひとつになげくころかな」とあり、なほこの歌は、新勅撰戀一、業平朝臣の歌ともなつてゐる。

又新勅撰、戀五、よみ人知らずに、「いへばえに深く悲しき笛竹のよごゑは誰と問ふ人もがな」及び六帖卷四にある歌(次の玉の小櫛の中に引用す)などを本歌とすべきであらう。

玉の小櫛には、「六帖に、恨、いへばえにいはねばくるし世の中をなげきてのみもつくすべき哉。此歌ここによくかなへり。えには、拾遺の説も、さることなれども、猶思ふに、えは得、には不の意にて、いひえずといふことならんか、萬葉などに、不レ知をしらに、不レ有をあらになど、不をにといへる例多ければ也。さればいへばえにも、古言ののこれるにやあらむ」と。

○明けぬれば夜深う云々
 翌朝まだ夜も明けは
 てないうちに。
 ○僅なる木蔭——立木が
 少くて面白く植ゑられて
 あるをいふ。

○薄く霧渡りたる——
 「花の木ども」の句からの
 ついで、散り残りたる
 花の色うすく霧のやうに
 たなびくをいふ。この
 「霧」は動詞として使つた
 ものである。
 ○そこはかとなく——ぼ
 んやりと花と木陰と一つ
 に霞んで。

明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかしろ、花の木どもやうく盛過ぎて、僅なる木蔭のいとおもしろき庭に、薄く霧渡りたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜のあはれに多くたちまされり。

さて翌朝、夜明けとなつたので、まだ夜も明け離れない暗いうちに、源氏の君はお歸りになつた。折から有明の月が面白く照りわたつてゐる。花の咲いてゐる木々も、今は既に盛りをすぎたのが、僅かばかりの木々が植ゑ込まれ、面白く作られてゐる庭に、薄霧のやうにほの白く霞みあつて、花も木も、そこらあたり一面にぼんやりとしてゐる景色は、秋の晩の趣多い景色よりもすつとすぐれたものである。

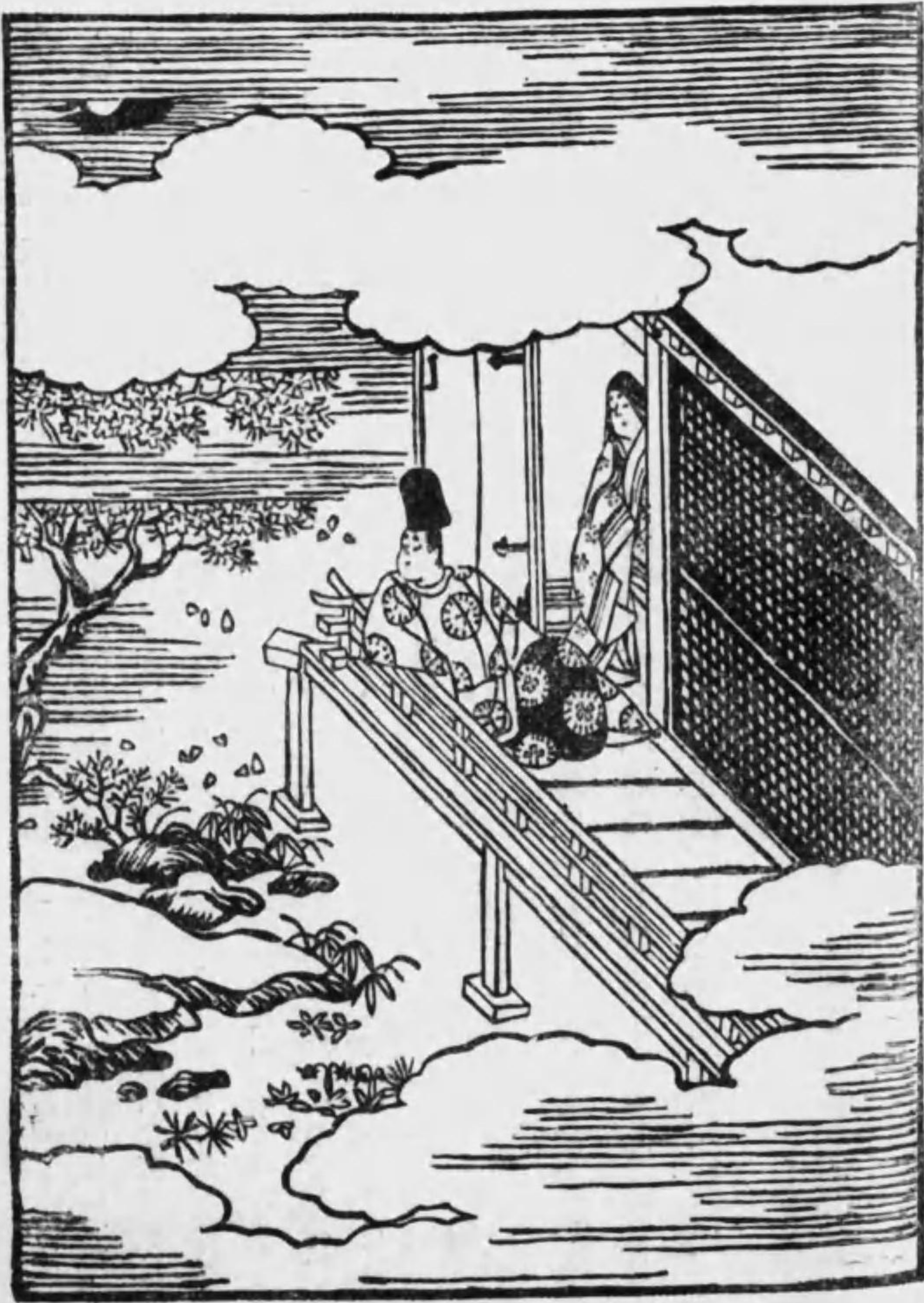
○いとおもしろき——首書本「いとしろき」。

昨夜は中納言の君と盡きない物語があつた。その翌朝、かうしたあつさりとした曉天の風色に接しては、源氏の君もそぞろ詩的な感興にひたりなかつたであらう。どうしてもすぐには、お歸りになられなかつた。次の段にもある如く、暫しは眺め入られたのである。

○勾欄——端の曲つた欄干。
 ○かかりける世を——か
 ら都を離れるとは知らな
 いで。
 ○心安くもありぬ——心

隅の間の勾欄におしかかりて、とばかり眺めたまふ。中納言の君見奉り送らむとにや、妻戸押しあけて居たり。また對面あらむことこそ、思へばいと難けれ。かかりける世を知らず、心安くもありぬべかりし月頃を、さし

安く汝に逢ふことがいっ
 ても出来た時を。
 ○さしも急がて——いつ
 でも逢はれると思つて、
 さして急ぎもしないで、
 久しく逢はないであらう。
 ○物も聞えず泣く——中
 納言の君は物も言はずに
 泣いた。



も急がで隔てけるよ」などのたまへば、物も聞えず泣く。

源氏の君は歸らうとして、暫く隅の間の勾欄に倚りかかつて、庭の景色を御覽になつた。中納言の君は、源氏の君のお歸りを見送らうといふのであるか、妻戸を押し開いて姿をあらはしてゐた。そこで源氏の君は、彼女に對して仰せられるには、「さあこれからは、お前と再び相逢ふのも、思へばむづかしいことである。自分が斯うして都を去らねばならぬやうにならうとは知らないでゐた。今まで、いつでも氣樂に相逢はれることの出来た時には、いつでも逢はれると思つて、さして急ぎもせず、久しく相隔つてゐた。思へば残念なことであつたな」など仰せられるから、中納言の君は何の御返事も出来ず、しく／＼と泣かれる。

若君の御乳母、宰相の君して、宮の御前より御消息きこえ給へり。みづからも聞えまほしきを、かきくらすみだり心地ためらひ侍るほどに、いと夜深う出でさせ給ふなるも、さま變りたる心地のみし侍るかな。心苦しき人のいぎたなきほどは、暫しやすらはせたまはで」と聞えたまへれば、うち泣き給ひて、

鳥部山もえし煙もまがふやとあまのしほやくうらみにぞゆく

御かへりどもなくうち誦じたまひて、曉の別は、かうのみやは心づくしな

○宮の御前より——葵上の母、左大臣の北の方の
もとから。
○御消息——口上の消息。
○みづからも聞えまほしきを——したしくお目にかかりて申上げたたく存じますが。
○かきくらすみだり心地ためらひ——悲しきにかき亂したやうな胸の内を、落着けやうと思つてみます間に。

○さま變りたる心地——まだ夜もすつかり明けはなれないうちにお歸りなるとは、從來とは變つた悲しい心地がいたします。

○心苦しき人の——夕霧が。

○いぎたなきほどは——熟睡中は。

○暫しやすらはせたまはで——夕霧の目醒めるまで少しもお待ちにならないで。

○鳥部山もえし煙も云々の歌——補欄参照。

○御かへりどもなく——必ずしも大宮からの御返事といふでもなく。

○曉の別は、いつでも斯くつらいものもあるまゝい。

○思ひしり給へる云々——曉のわかればどんなものか知つてゐる人もあるだらう。(宰相の君よ、お前はかういふ別のつらさ

る。思ひしり給へる人もあらむかし」とのたまへば、「いつとなく別といふ文字こそうたて侍るなる中にも、けさは猶たぐひあるまじう、思ひ給へらるるほどかな」と、鼻聲にて、げに浅からず思へり。

このとき左大臣の北の方であり、故葵上の母にあたらせられる方が、夕霧の乳母である宰相の君といふのを使として、源氏の君のもとに一言の御挨拶を申し送られた。その御消息の中には、「わたくし自らが、お目にかかつて、とくと申しあげたうございますが、悲しきにかき亂したやうな胸の内を落ちつかさせてからにしようと思つてゐます間に、斯くまだ夜もすつかり明け離れないうちから、君にはお歸りあそばされるのを見るのについても、以前はこんなに早くお歸りあそばされなかつたと、從來とはすつかり變りなかつたといふことだけが悲しう思はれます。この夕霧の君の御寝でゐられる間でも、お待ちになつてゐらつしやればよいのを、やがてお目覺めになる暫くの間もお待ちにならないでお歸りあそばされる」と申しあげられる。かく承つては、源氏の君も感慨に沈んで泣きなされ、

鳥部山もえし煙もまがふやとあまのしほやくうらみにぞゆく

大宮から御消息に對する御返事といふでもなく、源氏の君は口ずさみなさつて、「夜明け方の別は、いつでもこのやうに心辛いものであらうか、さうとも限るまい。曉方の別はどんなものか知つてゐる人もあるだらう。(宰相の君よ、汝はかういふ別のつらさは知つてゐるだらうが、ど

を知つてゐるだらうが、
どうだ」と源氏がそれと
なく問ふのである。

○いつとなく別といふ文
字——何時に限らず、別
といふ言葉はいやに思は
れますが、その中でも今
朝は一層比べるものにな
いほど、つらく存ぜられ
るのであります。

○鼻聲——鼻をつまら
ざといふ涙聲。

○聞えさせまほしきこと
——これからは、源氏が
大宮への御返事である。
○かへす／＼思ひ云々——
申上げたいことども
は、いろ／＼と思つてゐ
ますが、ただ愛にとち込
められて、申しあげられ

ないのでありますことを
御推察下さい。
○いぎたなき人は見給へ
む——眠つてゐる夕霧は
彼の顔を見ると却つて、
煩惱のたねとなつて、こ
の世を遁れて須磨に行く
ときのさまたげとなるか
ら。

○虎狼だにも泣きぬべし
——残酷な虎狼でさへ
も、源氏の姿を見奉つて
は涙を流すであらう。
○ましていはけなく云々
——況や源氏のまだ御幼
少でゐられた時分から、
見奉つた人々であるか
ら、たとへやうもない源
氏の君の御様子を只今見
ては、大へんな悲しみだ
と思ふ。
○まことや——作者が急
に思ひついた體で、さう
／＼といふのにあたる。
○御かへし——大宮から
の返歌である。前に、御
かへしといふこともなく

うだ」と、宰相の君に仰せられたから、宰相の君は、「いつといふことなく、別といふ文字はい
やなものではありませんが、その中でも今朝のお別れこそ、他に比べるものもないほど心辛く思は
れる時でありますかな」と、涙で鼻聲になつて、まことに心から深く悲しんでゐた。

○鳥部山もえし煙も云々の歌——嘗ては鳥部山の火葬場で、葵上を火葬したが、その煙がな
つかしくてたまらない。それでこのたび都を去つて須磨に行くのは、彼の須磨の海岸に鹽焼く
煙が立つてゐるだらうが、それが葵上の茶毘の煙と似てゐるだらうかと、かの海岸を見に行くの
であります。「うらみ」の語は、「浦見」と「怨」との意をかねてゐる。

なほこの歌は、新古今集、哀傷歌に、「世のはかなき事をなげく頃、みちの國に名ある所々かき
たる繪を見侍りて」と詞書して、紫式部の歌に「見し人の煙になりし夕べより名もむつまじき
鹽がまの浦」の歌がある。又拾遺集卷二十、哀傷歌にも、題しらず、よみ人しらずに「とりべ
やま谷にけぶりのもえたたばはかなくみえしわれとしらなん」といふのがある。これ等の歌に
よつたものであらう。

「聞えさせまほしきことも、かへす／＼思ひ給へながら、ただむすぼほれ
侍るほど、推しはからせ給へ。いぎたなき人は、見給へむにつけても、な
か／＼、うき世遁れ難う思ふたまへられぬべければ、心強く思ふたまへな
して、急ぎまかて侍り」と聞え給ふ。

源氏から大宮のもとへの消息には、「私からも申上げたいことどもは、澤山ございしますが、た
だ愛にとちこめられて、氣がふさいでゐるのであります。それでまだ何も申上げないでゐます。
どうぞこの私の心のほどを御推察下さい。又よく眠つてゐる夕霧は、今私が彼の顔を見ますと、
却つてそのために煩惱のたねとなり、この浮世を遁れにくく思はれるでありますから、私は
強い心となつて、執着煩惱の念がまだ萌さないうちに、急いで退出いたします」と申上げなさ
る。

出で給ふほどを、人々のぞきて見たてまつる。入方の月いと明きに、いと
どなまめかしう清らにて、物をおぼいたるさま、虎狼だにも泣きぬべし。
ましていはけなくおはせしほどより、見たてまつりそめてし人々なれば、
たとしへなき御有様をいみじとおもふ。まことやかかの御かへし、
なき人のわかれやいとどへだつらむ煙となりし雲井ならでは
取りそへてあはれのみつきせず、出で給ひぬる名残、ゆゆしきまで泣きあ
へり。

源氏の君がいよく左大臣邸からお歸りあそばされる所を、女房どもはのぞいて見奉つた。
折から月は今にも入らうとして、一段と輝やきわたつたときである。このとき源氏は優美に満

らかな姿で、物思ひに沈みながら行かれる御様子は、殘虐な虎狼といつても、あはれを感じて涙を流すであらう。

源氏は十二歳で元服なされたときからして、この左大臣邸に通うてゐられたのだからして、ましてや源氏の御幼少のときから、見馴れ申してゐた女房どもであるから、遠流のやうなたとへやうもないさまになられた源氏の君の境遇を、悲しみの極だと思つてゐる。さう／＼この時、大宮のもとから源氏に對して、御返歌がありました。

なき人のわかれやいとどへだつらむ煙となりし雲井ならでは

このやうに、源氏の君の御心には、いろ／＼のあはれが加はるばかりである。やがて源氏はお歸りになつたそのあとで、女房どもはひどく聲をあげて泣きあつた。

○なき人のわかれやいとど云々の歌——葵上の亡くなつた煙は、この都の空にだけあるのを、あなたは葵上の煙を慕つて須磨へ行くと仰せられるが、それでは却つて、葵上との隔ては一層増すことであらう。(葵上の名残を慕つて下さるならば、どうか須磨などへは行かないで、この都の地にとどまつてゐて下さいといふ、母なる大宮の子を思ふ淋しい心が含まれてゐる)

殿におはしたれば、わが御方の人々も、まどろまざりける氣色にて、ところ／＼に群れゐて、あさましとのみ世を思へる氣色なり。侍には、親しう仕うまつるかぎりには、御供に參るべき心まうけして、私のわかれ惜むほど

源氏が口ずきみなさつたのを、宰相の君が御返事とともに大宮に傳へたから、今、大宮から御かへしがあるのである。
○なき人のわかれやいとど云々の歌——補欄参照。
○取りそへてあはれのみ云々——このやうに源氏にはさま／＼なことが一緒になつて悲しさが果もなかつた。

○殿に——源氏が二條院にお歸りなさると。
○わが御方の人々も——源氏の御部屋である東對屋にゐる女房だちも。
○侍——侍所で、伺候者の

の語めてゐるところ。
○私のわかれ惜むほどにや——各々が家族や知人などに別れを惜むに行つた頃であつたか、人のゐる氣はひもない。

○さらぬ人は——親しく仕へてゐない人は。

○訪ひまゐるも重きとが云々——源氏を訪ねては重い咎めになるし、又面倒なことも多くなるので、嘗ては門前に深山集つてゐた乗物が、今はさうした様子もなく、ひつそりと淋しいので、世の中といふものはたよりなく淋しいものであると納得された。

○臺盤——食卓。

○疊——當時の疊には厚疊と薄疊(カスベリ)の如きものゝがあつた。このものは置疊(厚疊)である。

○見るほどだに——我がまだ見てゐるときでもかうだから、まして留守中

にや、人めもなし。さらぬ人は、訪ひまゐるも重きとがめあり。煩はしき事まされば、所せくつどひし馬車のかたもなくさびしきに、世は憂きものなりけりと思し知るる。

臺盤なども傍はちりばみて、疊とところどころひきかへしたり。「見るほどだにかかり、ましていかに荒れゆかむ」と思す。

源氏の君が二條院にお歸りあそばされると、君の御部屋である東の對屋に仕へてゐた人々も、昨晩から眠らなかつたやうな様子で、ところ／＼に集つて、世の中のことどもは、實に案外なことになるものであるとあきれてゐるやうである。

侍所では、源氏に親しく仕へてゐるものだけが、君と共に須磨にお伴をする用意をして、各々が家族や知人のもとへ別れを告げに行つた時であつたのか、人のゐる氣はひがない。又あまり親しく仕へてゐないものどもは、只今は君のもとに訪問しては、重い咎めにあつたり、又面倒なことが多くなる時節柄であるから、誰も訪づれるものが無い。以前は君をたづねる人々が多くて、門前には窮屈なほど馬や車が集つてゐたのが、只今はそのやうな様子もなく、ただ森閑としてゐる。それについても、源氏は世の中といふものはたよりなく淋しいものであるわいと納得された。

食卓に使はれる臺盤も、その一部分は塵埃に埋つてゐる。疊もところ／＼は引きくりかへして

はどんなに荒れ果てるであらうかと思しめさる。

須磨

四七〇

積んである。「自分(源氏)がまだここにゐて見てゐる時でもかう荒れるのであるから、ここを出でて須磨に去つてしまつたならば、それこそどんなに荒れて行くであらう」と源氏は思しめさる。

○所せくつどひし——白樂天の琵琶行に、「門前冷落鞍馬稀」と。○疊——源注餘滴に「今物語に「此おぼろ月はいかが候べきといひたてければ、女房返事はなくてとりあへず内よりたたみをおし出したるける」これらをみればいまのごとくあつく作れるものにはあらず。新釋に「疊は時にのぞみて敷世、用なき時はうらを上にて所々にかさねて有べし」としるされしは、いまの疊のさまにておもひやられしと見へたり」と。

西の對に渡りたまへれば、御格子もまゐらで眺めあかし給ひければ、篋子などに、若き童部、ところ／＼に臥して、今ぞ起きさわぐ。宿直姿どもをかしうて、出で入るを見給ふにも、心ほそう、年月へば、かかる人々も、えしもありはてでや行きちらむなど、さしもあるまじき事さへ、御目のみとまりけり。

紫上に御對面にならうといふので、西の對屋にお出でなされると、紫上は昨晚は御格子も閉ぢないで、一晚中物思ひに耽りながら一夜を明かしなされた。それで縁側などには、若い童など

○西の對——紫上の部屋。

○御格子もまゐらで——御格子もとぢないで。

○眺めあかし——紫上が。

○篋子——縁側。

○年月へば——我(源氏をさす)須磨に去つて久しく経るならば、このやうな人々も、辛抱出来なくなり、散り／＼に去つてしまふであらう。

○さしもあるまじき事さ

へ——何でしないことまでが。

○夜更けにしかばなむ——夜がふけたので宿つてきた。

○例の思はずなるさまにや云々——いつもの存かれ歩きとでも思ひなされたか。

○かくて侍るほどだに——まだ出發せない間だけなりとも、お前の側を離れないでゐようと思ふのに。

○心苦しきことの云々——心苦しい義理人情などが、自然多く出てくるので。

○ひたやごもりにてやは——ただ引籠つてどこへ

が、ところ／＼に寝ころがつてゐたが、源氏の君がお出でなされたといふので、それを知るやすぐに起きあがつて、立ちさわいだ。宿直姿どもの趣のあるやうすで、出たり入つたりしてゐるのを御覽なさるについても、何となく心細く思しめさる。今はまだかうした人々が、紫上に仕へてゐるが、私の須磨に去つた後、年月が経過するにつれて、かうした人々も、奉公してゐないで、皆ちり／＼に去つてしまふであらうなどと、何でもないことまでも、御目にとまらばかりであつた。

「昨夜はしか／＼して夜更けにしかばなむ、例の思はずなるさまにや思しなしつる。かくて侍るほどだに、御めかれずと思ふを、かく世を離るる際には、心苦しきことの、おのづから多かりけるを、ひたやごもりにてやは。常なき世に、人にもなさけなきものと、心おかれはてむも、いとほしうてなむ」と聞えたまへば、かかる世を見るよりほかに、思はずなることは、何事にか」とばかりのたまひて、いみじと思し入りたるさま、人より異なるを、道理ぞかし。

源氏の君が紫上に仰せられるやう、「昨晚は左大臣に對面して昔物語をなし、そこへ又三位中將(頭中將)も來られ、つひ話も佳興に入つて、夜も更けましたもので宿泊してしまひました。

須磨

四七一

も出ないでばかりゐるといふわけには行かない。○人にもなまじけなき云々——薄情冷淡なものであるよと、人に嫌はれるのもいやであるから。○かかる世を見るよりほかに云々——源氏が世人に嫌はれて、都を去られるやうな悲しいさまを見るのこそ思はずなる事と思ひます。その他の事どもは考へません。○道理ぞかし——これより次段にかけて、すべて源氏の君の思ひである。

○父親王は——紫上の父君兵部卿宮は、元來疎遠で、紫上はただ源氏の君だけを頼みとしてゐた。このところから、下の「あはれなる御有様なる」までが、源氏の君の、前段にて「道理ぞかし」と仰せられたその思ひを述べたもの。

○まして世の聞えを云々——今度の事件で、兵部卿宮は一層世間の噂をうるさがつて。○人の見るらむ事も恥かしく——紫上は父君の疎遠な態度を世人が見るのも恥づかしく。○なか／＼知られ云々——源氏のもとにゐるのをいつその事、父君に知られなかつたらよかつたのに。○繼母の北の方——兵部卿宮今の妻、即ち後妻。○世に俄なりし幸福云々——紫上の俄出世の、あはたしい變りかたかな、ああいやらしいな。○思ふ人々云々——紫上は實母といひ、祖母といひ、何れも死別れ、ついでに今又源氏の君と生別れになる。かくとかく思ひをよせてゐる人々から、嫌うすくて別れなさる方であるかな。○これよりも——紫上の

あなたが心に反した、いつもの浮氣ごとで泊つたなどとお考へなされたか。あなたと一緒にこの家に居るのでさへ、寸時もあなたと離れたくないものだと思つてゐるのですから、そんなやうに、私が浮氣心で外泊したなどは思つて下さるな。只今かうして都を去つて、須磨へ行かうといふ時機に臨むと、左大臣、大宮、夕霧などに對する心苦しい義理、人情が自然と多くなつたので、かうしたことがらを打捨てて、ひたすら家にとちこもつてゐるといふことは出来ない。無常果敢ないこの世にゐて、薄情なことをなし、他人からも彼は無慈悲な人間だなどと、嫌はれるのも悲しいことだと存じまして、かく此處彼處と訪問したわけでありませう」と仰せられたので、紫上は、「源氏の君が都を出でて須磨に旅立たねばならぬやうな境遇に立ち至つたのは、本當に思ひがけないことと思ひます。これより他に何を考へませうか、何も考へません」とだけ仰せられて、たいへん悲しいと思ひ込んでゐられるありさまは、他の女君たちよりは格別であつたから、源氏はこれをごらんなされて、無理からぬことだと思しめされた。

父親王はいと疎にて、もとより思しつきにけるに、まして世の聞えを煩はしがりて、音づれ聞えたまはず。御訪問にだに渡り給はぬを、人の見るらむ事も恥かしく、なか／＼知られ奉らてやみなましを、繼母の北の方などの、「世に俄なりし幸福のあわただしき、あなゆゆしや。思ふ人、かたがたにつけて、別れたまふ人かな」と、のたまひけるを、さる便ありて、漏り

聞きたまふにも、いみじう心苦しければ、これよりも絶えて音づれ聞えたまはず。又たのもしき人もなく、實にぞあはれなる御有様なる。「なほ世にゆるされ難うて年月を経ば、巖の中にも迎へ奉らむ。ただ今は人ぎきのいとつきなかるべきなり。公にかしこまり聞ゆる人は、明なる月日の影をだに見ず。安らかに身をふるまふことも、いと罪重かんなり。あやまちなけれど、さるべきにこそかかる事もあめれと思ふに、まして思ふ人具するは、例なきことなるを、ひたおもむきに物ぐるほしき世にて、立ちまさる事もありなむ」など聞え知らせ給ふ。

この紫上は御父兵部卿とは、極めて疎遠にせられて、源氏の君だけには以前から親しく馴れ睦まじくしてゐられたから、兵部卿宮は一層世間體を憚つて、紫上のもとへは御手紙も送られなければ、御訪問さへなかつた。かうした疎ましい親子の間柄を、世人に見られるのも恥かしいので、かくあるならば、いつそのこと父には知られないで、隠れてゐたらよかつただらうと紫上は思つてゐられた。それを繼母北の方などは、「兵部卿宮の後妻」紫上が俄に幸運にめぐりあつて、あはたしい中に出世なされたのは、思へばまことに不吉でもあつたわい。この紫上は、實母には死別れ、その後は後見してゐられた祖母にも死別れ、今又、たよりとしてゐられた源

方からも。
 ○又たのもしき人もなく
 ——源氏より他にたよるとなる人もなく。
 ○なほ世にゆるされ難うて——それでも我の世から許さることが餘り長くなるならば。
 ○巖の中にも——山中の佗住居にも、須磨の佗住居を形容したもの。
 ○ただ今は人ぎき——ただ今紫上を連れて行つては、不釣合で外聞悪いことであらう。
 ○公にかしこまり——朝廷に對して謹慎中のものは。
 ○さるべきにこそ——然るべき因果で、斯うなつたのでせう。
 ○思ふ人具するは——配所へ愛する女を引連れて行くのは。
 ○ひたおもむきに云々——無闇に物騒な今の世であるから、女を連れて行けば、一層面倒なことが

氏の君とは生別となる。とかく思ひをよせてゐる人々からは、縁うすくて別れてしまひなさる方であるかな」と仰せられた。それを紫上は、ある機會に一寸としたことでお聞きになるにいても、頗る心苦しう思しめされたから、それ以後は決して兩親のもとへ、昔づれなさらない。源氏が須磨に去つてしまつた後は、その他にたよるとする人もないので、紫上はまことに氣毒な有様でゐらつしやる。と源氏の君は彼女の境遇を同情なされて、懇々と彼女に仰せられるには、「我は須磨に世を避けてゐても、それでもなほ世から許されないので、永い年月を経るやうにならば、たとひ巖窟のやうな須磨の佗住居であるとも、そこへ汝紫上を迎へるであらう。然し只今、お前を連れて一緒に都を出るのは、世人が聞いても外聞の悪いことであらう。又朝廷に對して謹慎してゐるものは、照りかがやく日月の光さへも見ないのである。安樂に生活するのでも、いと罪の重いことである。勿論、我には何等の誤があるわけでもないが、かうした憂目に逢ふやうになつた。これも、かうなるべき前世からの因果の然らしめるためでありませうと思ひます。それについても、斯うしたときに、我が愛する汝紫上などを配所に引連れて行くのは、先例もないことでもあります。それであるのに、あなたを連れて行つては、現今のやうにひたすら物騒な時代では、一層面倒なことが増加するでありませう」などとお諭しなさる。

前段の末尾にあつた「道理ぞかし」の句から、本段の「實にぞあはれなる御有様なる」までは、源氏の君が紫上の身上を同情してゐられる心中で、その中に紫上と父兵部卿の宮並に繼母北の方との間柄が詳細に述べられてゐる。

附すであらう。
 ○帥宮——源氏の弟で、太宰帥に任ぜられてゐられたから斯く申す。
 ○三位中將——今まで頭中將と申した人。
 ○御直衣などたてまつる——御直衣をお召しになる。
 ○位なき人は——源氏は官爵取りあげられたから、源氏自らが位無き人はかういふ無紋のものをすべきだといふ心で、無紋の御直衣——地に模様のない御直衣である。
 ○かきたまふ——くしけづること。痒きをかくに非ず。

日たくるまで大殿籠れり。帥宮、三位中將などおはしたり。對面し給はむとて、御直衣などたてまつる。「位なき人は」とて、無紋の御直衣、なかにかいとなつかしきを着給ひて、打ちやつれ給へるいとめてたし。御鬢かきたまふとて、鏡臺に寄りたまへるに、面瘦せ給へるかげの、我ながらいとあてに清らなれば、「こよなうこそ衰へにけれ。この影のやうにや瘦せて侍る。あはれなるわざかな」とのたまへば、

源氏の君は、太陽も高くなるまで紫上と御寢になつてゐられた。そこへ帥宮や、三位中將などが訪ねて來られた。源氏は早速起き出でて御對面あそばされようといふので、御直衣をお召しになる。このとき源氏は、位無き我であるから無紋のものを着すべきであるといつて、無紋の直衣で、模様のある直衣よりは、却つて一層なつかしいのお召しになり、御姿を質素にしてゐられるさまは、これもまことに立派なものである。

御鬢を梳らうとされて、鏡臺によりなざると、日頃の苦勞のために、源氏の君の御顔も瘦せてしまつたのが見える。この自分の顔を見ながら、君は我ながらまことに上品にあつさりとしたさまであると思しめされた。そこで源氏は紫上に對して、「私もひどく衰弱してしまつた。この鏡の面に映つてゐるやうに、我は瘦せてしまつたか、なさけないことであるかな」と仰せられ

○女君——紫上。
 ○涙をひとめうけて——
 ○見おこせ給へる——源
 氏の君を眺めてゐられる
 さまは、君も悲しさに耐
 へられないものである。
 ○身はかくてさすらへ云
 々の歌——補欄参照。
 ○わかれてもかげだに云
 々の歌——補欄参照。
 ○いふともなくて——こ
 の歌を判然と唱へるとい
 ふでもなく、唱へないと
 いふでもなく、あいまい
 な獨言のやうにして。
 ○柱がくれに——柱の陰
 に身を隠して。
 ○なほこころ見る中に云
 々——やはり深山見た女
 の中でも、並ぶべき者も
 ないほど美しい紫上の御
 姿であるわいと源氏の君
 が思しめされる。
 ○みこは——親王はの意
 で、帥宮をさす。

女君、涙をひとめうけて、見おこせ給へる、いと忍びがたし。
 身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ鏡のかけははなれじ
 ときこえ給えば、

わかれてもかげだにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし
 いふともなくて、柱がくれに居隠れて、涙をまぎらはし給へるさま、なほ
 こころ見る中にたぐひなかりけりと、思し知らるる人の御有様なり。みこ
 は、あはれなる御物語聞え給ひて、暮るるほどに歸りたまひぬ。

紫上は、目に涙を一杯浮べて、源氏の君をちつと眺めやられたのである。そのさまが又何と
 も言へないほど愛らしいのであつたので、源氏は悲しさに耐へられないやうになられた。そこ
 で君の御歌に、
 身はかくてさすらひぬとも君があたりさらぬ鏡のかけははなれじ
 と申されると、紫上は返歌として、
 わかれてもかげだにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし
 と、はつきりといふでもなく、言はぬでもない小さな獨言につぶやいて、柱の陰に身を隠して、



目に浮んでゐる涙をかくしてゐられる御姿、やはりこれまで澤山見た女の中でも並ぶべきものなく美しい紫上の姿であるわいと、源氏の君は思しめされる。帥宮は感慨深い物語をあそばされて、日も暮れる頃にお歸りあそばされた。

○身はかくてさすらへぬ云々の歌——われ源氏は斯くして須磨の地にさすらふ境遇となつても、君の側を去らず始終つきまとうてゐる君の鏡に寫した、このわれの姿だけは永久に鏡中に残つて、あなたの身邊から離れないでせう。○わかれてもかけだに云々の歌——君とお別れいたしましても、鏡に映つた君の姿だけが、永くとどまつてゐるものならば、わたくしは常に鏡を見て淋しい心を慰めるであります。然し君が須磨へ去られては、君の御姿はもはや鏡中に残るものではありませんから悲しうございます。

「いふともなくて、柱がくれに居離れて、涙をまぎらはし給へるさま、云々」と記されてゐるところ、紫上のまだ年若い、いちらしさがよく描かれてゐる。

花散里の心ほそげに思して、常に聞えたまふも道理にて、かの人も、今一度見ずば、つらしとや思はむと思せば、その夜はまた出て給ふものから、いと物うくて、いたうふかしておはしたれば、女御、かくかずまへ給ひて、立ちよらせたまへる事」と、喜び聞え給ふさま、書きつゞけむもうるさし。
源氏の君はいよ／＼須磨に旅立たれるといふことをお聞きになつた花散里は、それ以來いた

○花散里の心ほそげに云々——花散里が始終たよりになく思つて、常に源氏を頼みとして音信なされるも尤だと、源氏は思めして。
○かの人も今一度見ずば——花散里も今一度逢つてやらなければ、我を薄情者と恨まうかと源氏が

考へられたので。
○その夜はまたお出で——その晩はまたお出でかけにはなるもの、どうも気が進まないの。

○女御——麗景殿の女御である。花散里の姉にあたる。
○かくかずまへ給ひて——源氏の君が、我等の如き人の數にも入らないものまでも、人數に思召してお訪ね下つたことよ。

○ただこの御かげに隠れて云々——すつかり源氏の御救護によつて、今まで暮してゐられた月日であつたのが。
○いとど荒れまさらむほど——今後は一層さびれて行くだらうと君は思ひやられて、殿内もまことにひっそりとしてゐる。
○住み離れたらむ云々——都から遠く離れた須磨の住居の心細さも思ひ

く心細く思しめして、常に音信を奉られるので、源氏の君はなるほど無理からぬことだと思しめされた。さうして彼の花散里も是非今一度訪問してやらなくては、薄情なものだと思つてあらうとお考へになつたからして、その晩は又おでかけなさつた。

然し源氏は頗る氣苦勞にしてゐられたから、夜もよほど更けてから御訪問になつた。すると花散里の姉にあたる麗景殿の女御は、「斯く我等の如き人の數にも入らないものまでも、人なみの數に入れて、おたづね下されましたことかな」と、喜びながら御挨拶申してゐる有様は、ここに書きつづるのもうるさいから、まづ略します。

源氏の君の夜も更けてお出でかけなされたのは、紫上のもとを早くでかけるのに氣がとがめたからである。

いとみじう心ほそき御有様、ただこの御かげに隠れて、すぐい給へる年月、いとど荒れまさらむほど思しやられて、殿の内いとかすかなり。月おほろにさし出でて、池廣く山こぶかきわたり、心ほそげに見ゆるにも、住み離れたらむ、いはほの中思しやらる。

花散里のもとに源氏がお出でなされると、まことに心細いさまである。すつかり源氏の君の救護によつて、今日まで暮してゐられた月日であつたのが、このたび我が須磨に去つてしまつては、なほ一層さびれて行くだらうと、源氏は想像せられるのである。まことに花散里の住んで

やられる。

○西面には——花散里をいふ。元來この殿の西の方に住んでゐられたから斯く云ふ。

○かうしもわたり給はずや——源氏の君が斯くおとづれなさることはあるまいかと。

○うち屈して——うち萎れて。

○うちふるまひ云々——君の御動作のさまが、並べられるものがないほど美しいお姿で、靜かに花散里の部屋にお入りなされた。○少し膝行——花散里が。

須 磨

わられる殿内は森閑としてゐる。

折から月はおぼろにかすみ、池水廣く湛え、山木繁つたあたりが、何となく心ぼそく見えるについても、都から遠く離れた須磨の地の侘住居の心細さは、さこそ苦しいものであらうと考へさせられる。

○いはほの中——古今集雜歌下、よみ人知らずに「いかならむいはほの中にすまばかは世のうき事は聞えこざらむ」の歌がある。

西面には、「かうしもわたり給はずや」と、うち屈して思しけるに、あはれ添へたる月かげの、なまめかしうしめやかなるに、うちふるまひ給へるにほひ、似るものなくて、いとしのびやかに入り給へば、少し膝行出でて、やがて月を見ておはす。又ここに御物語のほどに、明方近うなりにけり。

源氏の君は、麗景殿女御に御對面なされてから、先づ花散里のお部屋に行かれる、花散里は、「源氏の君は、私の所へはおとづれなさないか」とうち萎れてふさいでゐられる時に、折から風趣を添へてゐる月光が優雅に照り渡つてゐる。この時源氏は御舉動が他に比較すべきものがないほどの美しさで、靜かに花散里のもとにお渡りあそばされた。彼女は嬉しくなり、少し膝行出でて、さて美しい月光を眺めてゐらつしやる。君は又ここでも御物語をあそばされてゐる間に、夜も明け方近くなつた。

源氏の御來訪は嬉しくて、花散里は早速膝行出でなさつたが、又はづかしくなり、暫し月を見てゐるところ、しとやかな女性をあらはしてゐる。初音の巻にも、木丁おしやり給へば、又さておはすといへるも此人の事である。

「短夜のほどや。かばかりの對面も又はえしもやと思ふこそ、ことなしにて過しつる年頃もくやしう、來しかた行くさきの例になりぬべき身にて、何となく心のとまる世なくこそありけれ」と、過ぎにし方の事どものたまひて、鶏もしばく／＼なけば、世につゝみて急ぎ出で給ふ。例の月の入りはつるほど、よそへられてあはれなり。

○短夜のほどや云々——夜も短い頃でありますね。これ位のはかない御面會も、もう又はは出来ないでせう。それを思ふについても、今まであまり逢ひもしなかつた頃が残念である。○來しかた行くさきの云々——罪なくして流される身となつたが、これは過去にも將來にも亘つて一つの例として數へられる身であるから。○何となく心のとまる世なくこそ——さういふ運命であつたからして、なんだか自分の心を引くやうな女に出逢つたときもなかつた。○世につゝみて——世間を憚つて。○例の月の入りはつる——

須 磨

源氏「もう夜も明けさうである。この頃は夜も短いことであるわい。これ位のはかない御面會も、今後はもう再びと出来ないものであるか、それを思ふについても、今まで左程まで相逢はないでゐたのが残念である。私は罪なくして遠流せられる境遇となつたが、これは過去にも未來にも亘つて一つの例として數へられる身である。さういふ運命であつたからして、自分の心を引きつけるやうな女も、なんだか無かつたのであります」と、過ぎにし頃の物語などがあつた。とかくしてゐる間に鶏鳴曉を告げる聲がしば／＼聞えたので、源氏の君は世間を憚つて急いで出でられた。やはりいつものやうに月の今にも入らうとする折であつたので、源氏のお歸

―いつものやうに、月の入り方頃に、出でられた。
○よそへられて―源氏のお歸りなさるのが、月の入るのによそへられて、花散里はあはれを感じなさる。

○濃き御衣―濃紫の衣に映じて。

○ぬるるがほ―古今集戀五、伊勢の歌に、あひにあひて物思ふ頃のわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる」とあるをさす。

○月かげのやどれる云々の歌―補欄参照。

○いみじとおぼいたるが―花散里が大へん悲しいと思つてゐるのが氣毒であつたから。

○かつは慰め―別れを悲むと共に、他の一面からは、慰めもなさる。

○行きめぐり云々の歌―補欄参照。

りなさるのが、月の入るのによそへられて、花散里はしみんとあはれを感じられた。
○心のとまる世なく―玉の小櫛に、「ともじ濁るべし。心のどまる也」と。○例の月の入り云々―玉の小櫛に、「女君の心を、冊子地よりいふ語なり。例のは、あはれ也といふへかかれり。いつもかやうに、曉に源氏君のかへり給ふ別れは、あはれなるを、今朝も例のあはれ也といふ也。よそへられては、源氏君の、別れてかへり給ふが、入月によそへられて也。注ひがこと也。歌にて知得べし」と。

女君の濃き御衣にうつりて、實に「ぬるるがほ」なれば、

月かげのやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬひかりを
いみじとおぼいたるが、心苦しければ、かつは慰め聞えたまふ。

「行きめぐりつひにすむべき月かげのしばしくもらむ空ながめそ
思へばはかなしや。たゞ知らぬ涙のみこそ、心をくらすものなれ」などの
たまひて、明ぐれのほどに出で給ひぬ。

月光は花散里の濃紫の御衣に映つて、まことに彼の「あひにあひて物思ふ頃のわが袖にやどる月さへ濡るる顔なる」とよんだ伊勢の歌の通り、月光までが悲しさに涙に濡れてゐるやうであつたからして、花散里のよまれた歌には、

月かげのやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬひかりを

とお詠みになり、花散里は大へんに悲しさうに沈んでゐられたので、源氏の君も氣毒になつたから、別れを悲むと共に、一面からは女君を慰めなさる。源氏は仰せられるには、

「行きめぐりつひにすむべき月かげのしばしくもらむ空ながめそ
とはいふものの、月の澄むのは何時のことであるやら、思へばはかない話である。然し將來は又相逢ふこともあらう。がそれを知らず、ただ現在の別れをばかり悲んでゐる涙こそ、わが心を掻き曇らせるものである」など仰せられて、明け方のまだ暗いうちに出でられた。

○ぬるる顔―古今集戀歌五にある「あひにあひて物思ふ頃のわが袖にやどる月さへ濡るる顔なる」の意は、お互に相合うて、物思をしてゐる頃の、涙に濡れたこの袖に映る月までが、われと同じやうにやはり涙で濡れ顔であるわいといふこと。○月かげのやどれる云々の歌―月光の映つてゐるわが袖は、たとひ粗末な袖であるとはいへ、見飽かぬ月光を、この袖に映しとどめて置いて見たいものである。即ち賤しい我ながらも、何時まで見てゐても見飽かない源氏の御姿を、永く妓處に留めて置いて見たいものであると、源氏を月になぞらへ、袖はせばくともとは彼女の謙遜である。○行きめぐりつひに云々の歌―月はただ今は曇つてゐても、いつまでもかうではない。月も運行して遂には又美しく澄み渡る月となるのである。だから暫く曇つてゐる空を眺めて悲しみ給ふな。即ち我は須磨に行くとも、何時かは再び都に歸るのである、だから暫くの別れを悲しみ給ふなと女君をなぐさめなさるのである。「すむ」の語には、「澄

○知らぬ涙―後集集戀別の、源わたるの歌に、「ゆく先を知らぬ涙の悲しきはたゞ目の前に落つるなりけり」の意。
○心をくらすものなれ―心をかき曇らせる。
○明ぐれ―夜あけがたのまだ暗いうちをいふ。

む」とともに、女の許に通ひ語らふを住むといふ「住む」の意をも掛けてゐる。○知らぬ涙——後撰集卷十九、離別に、「出羽よりのぼりけるにこれかれ馬のはなむけしけるにかはらけとりて」と詞書して、源のわたるの歌に、「ゆくさきを知らぬなみだのかなしきはただめのまへにおつるなりけり」による。この歌の意は、只今斯うして別れても又相逢ふこともあらう。その行くさき即ち將來のことを知らない涙は、現在の悲しさばかりを悲んで眼前に涙の落ちるのであるわいといふこと。

よろづの事どもしたためさせ給ふ。親しう仕う奉り、世になびかぬかぎりの人々、殿の事、とり行ふべき上下定め置かせたまふ。御供にしたひ聞ゆるかぎりは、またえり出で給へり。かの山里の御住處の具は、えさらずとり使ひ給ふべきものども、殊更によそひもなくことそぎて、又さるべき書ども文集など入れたる箱、さては琴一つぞもたせたまふ。所せき御調度、花やかなる御装ひなど、更に具したまはず。あやしの山賤めきてもてなし給ふ。

源氏はお歸りになつてからは、出發の準備について萬事處理をなされる。源氏に親しくお仕へ申し、決して右大臣一派の權勢には靡かない範圍の人々はこれだけと定め、二條院の留守中

のことどもを司るべき上下の人々を選定なさる。又、君と共に須磨に隨行する者は誰々と、これを選定なされた。

彼の須磨の佗住居に使ふ諸道具は、日常どうしても無くてはならぬものだけを、格別に裝飾などもせず、簡素にして持参されることになつた。又必ず讀むところの書籍どもや、自氏文集などを入れた箱、さては又琴を一張御持参になる。堂々たる立派な道具や、華美なる服裝などは少しも御持参にならない。すべて源氏の君の出發は、いやしい樵夫のやうな振舞である。

侍ふ人々よりはじめ、よろづの事、皆西の對に聞えわたし給ふ。領じ給ふ御庄、御牧より初めて、さるべき所々の卷など、皆奉りおきたまふ。それより外のみくらまち、納殿などいふことまで、少納言を、はかくしきものに見置きたまへれば、親しき家司ども具して、しろしめすべきさまどものたまひあづく。

伺候の人々の事を始めとして、その他萬事萬端のことどもについて、引繼ぎを紫上に仰せつけられた。

源氏の君所領の庄園、牧場を初めとして、その外所々にある地所や家屋の證書なども、すつかり紫上にお渡しなさる。なほそれ以外の倉町の數多の倉庫、納殿などのことに至るまで、少納言を目頃からしつかりとした者である、後事を托するに足る女であると、源氏の君は見定めて

- よろづの事——出發の準備。
- 世になびかぬ——右大臣の權勢に靡かない人々。
- 殿の事——二條院のこと。
- 御供に——須磨への源氏の御隨行。
- かの山里の——須磨の住家につかふべき道具。
- えさらず——日常どうしても無くてはならぬ物だけを。
- 殊更に云々——格別に裝飾などもせず、簡素にして。
- 文集——自氏文集。

- 所せき調度——堂々たる立派な道具。
- 花やかなる御装ひ——華美なる服裝。

- 西の對に聞え——紫上に萬事引繼ぎを仰つけになつた。
- 御庄——源氏所領の庄園。
- 御牧——同じく牧場。
- 所々の卷——地所や家屋などの證書。桐壺院より賜つたもの。
- 奉りおきたまふ——紫上へ渡したる。
- みくらまち——倉庫のあまた並びたることを倉町といふ。源氏の財産を入れた倉町。
- 納殿——重寶を入れ置く倉。
- はかくしきものに——

紫上の乳母少納言を、役に立つしつかりとした女とお見込みになつたからして。

○家司——家事を司る親しきものを、少納言に加へて。

○しろしめすべきさま——紫上が主となつて、萬事處理すべきことどもをこの少納言や家司のものどもに仰せつけられる。

○わが御方——源氏方に仕へてゐる女房の中務や中將などいふ人達。

○つれなき御もてなしながら——源氏から愛せられないながらも、これ二人の女房は源氏と關係があつたから斯くいふ。

○見奉る程こそ云々——始終源氏のお姿を見奉る間こそ心も慰められるが、然し源氏出發後は何事につけて慰めやうか。○命ありてこの世に云々——我も永く生られて、又この都に歸ることども

置きなされたからして、この少納言に親しく召使つてゐた家司の者どもをつけ加へて、源氏の留守中は紫上が主人公となつて、萬事處理なさることどもを、この乳母の少納言に言ひつけられた。

○具して——少納言乳母の補助者として、家司をつけ加へられるのである。「具して」は、加へてと解いてよし。○しろしめすべきさま——厩江入楚に、「箋聞、紫へ大體をの給ひこまかなる事は、家司どもに少納言をくはへて仰おかるるなり」とある。

わが御方の中務、中將などやうの人々、「つれなき御もてなしながら、見奉る程こそ慰めつれ。何事につけてか」と思へども、「命ありてこの世に又歸るやうもあらむを、待ちつけむと思はむ人は、こなたに侍へ」とのたまひて、上下皆參上らせ給ひて、さるべきものども、品々くばらせたまふ。若君の御乳母達、花散里などにも、をかしきさまのはさるものにて、まめくしきすぢにおぼしよらぬことなし。

源氏方に仕へてゐる女房の中務や、中將などいふ人達は、何れも源氏のお目にとまつてゐる女房どもであるが、君からただ一通りの情を受けてゐた、此等の女房どもは、「源氏の君は、まことに薄情な御待遇をして下さるだけであつたが、それでも美しくゐられる君の御姿を見奉つ

あらうから、氣水にそれまで我を待たうと思ふ人は、この紫上のもとにゐらつしやい。

○上下皆參上らせ——それ／＼の女房達を、皆紫上の方へお遣りになつた。

○さるべきものども——御形見など賜つたのであらう。

○をかしきさまのは——風流な方面の賜物はもとから。

○まめくしきすぢに——實際的方面のことについて。

○おぼしよらぬことなし——源氏の君の注意が行きとどいた。

てゐる間だけは、自分達の心も慰められたが、君が今度須磨の地に御出發なさつてからは、我等は何によつて心を慰められうか」と、すつかり悲しんでゐるが、源氏の君は、「我はたとひ須磨の地に去るとも、幸にして永く生きながらへて、又この都に歸ることもあらうから、これから氣水に我を待つて居ようと思ふものどもは、どうかこの紫上の許に仕へてゐて、我の歸るのを待つてゐてくれ」と仰せられて、それ／＼の女房だちを悉くこの紫上のもとに遣はされ、各々に然るべき形見の品々を分配なされた。

彼の若君の御乳母や花散里などにも、風流な贈物をなさることは勿論で、なほ實際的生活方面のことまで、いろ／＼と氣をくばられて、行届かぬ點はなかつた。

○さるべき物どもしなくくばらせ給ふ——この文三本になしと厩江入楚にしるせり。と以上源注餘滴に注してゐる。○若君の御乳母達——厩江入楚に、「秘宰相君などなり。夕霧のめのとどもなるべし」と。

本段の冒頭にある「わが御方の」の文字は、紫上の方に仕へてゐる女房どもと特に區別を立てたのである。

尙侍の御許に、わりなくして聞え給ふ。問はせ給はぬも道理に思ひたまへながら、今はと世を思ふたまへ侍るほどの、憂さもつらさも類なきことこそ侍りけれ。

よ／＼世を連れようと決心した時の。
○逢瀬なきなみだの云々の歌——補欄参照。
○思ひたまへ出づるのみなむ——貴女のことを思ひ出すその事ばかりは、私の罪科として通れがたいことでありますの意、その意の裏には臙月夜と通じた事が、今度の都落の原因となつた。でこの事は私の甘受すべき罪である。源氏の臙月夜に通じたまへること賢木の巻に出づ。
○道のほどもあやふければ——使に文を持たせて彼女のもとへやる、その道中も人に知られやしないかと危険であるから。

須磨 四八八
逢瀬なきなみだの河にしづみしや流るるみをはじめなりけむ
と思ひたまふるのみなむ、罪遁れ難う侍りける」道のほどもあやうければ、こまかには聞えたまはず。
○臙月夜侍の御許にも、切なる情を以つて、強ひて御消息があつた。その源氏からの文には曰く、「あなたから何ともお便りのないのは、あなたの境遇上から言つても、又私自身の只今の情態から言つてもご尤なことではありますが、いよ／＼只今こそ、この世を連れて須磨に去らうと決心しました時の、心の憂さも辛さも大へんなもので比較すべきものもありません。
逢瀬なきなみだの河にしづみしや流るるみをはじめなりけむ
と、あなたのことども(嘗ての関係など)が思ひ出だされるのは、これが今度の都落となつた原因でありまして、犯した私の罪科は、どうしても通れることがむづかしうございました」とあつた。なほ使にこの便りを持たせて、臙月夜のもとに送られる道中も、世人に知られはしないかと危険であつたから、委細にはお書きにならない。

○逢瀬なきなみだの河に云々の歌——私はあなた臙月夜の君を戀ふるだけで、遂に逢ふ時もなく歌いてゐたのは、今度の流離となる動機となつたのでありませう。
源氏が未だ臙月夜に關係なかつたやうに言つてゐられるのは、もしこの手紙を彼女に送る途中にて、世人に露見するのを恐れてかくぼんやりと書かれたのである。けれども、この逢瀬なき

の語には、思ふ存分に逢ふことの出来なかつたのを云ふ。
逢瀬は單に相逢ふ意で、その縁語として、伊勢の涙川を出し、流るる水脈に、「流るる身を」にかけてゐる。「み」は、海川の中で深みのある所、船路をさす。
女をないといみじう覺おぼえたまひて、忍しのびたまへど、御袖おんそでよりあまるも所せくなむ。

○女は——臙月夜は。○御袖よりあまるも——御袖から溢れ出る涙も。○所せくなむ——窮屈なさま。
○なみだ河うかぶ云々の歌——補欄参照。
○今ひとたび對面——今一度臙月夜に對面しなくて別れるのかと源氏が考へられると、對面なくしてやしの語の下に、立別れん」の語を補ひて解くべし。
○憂しと思しなすゆかり云々——この主語は臙月夜である。彼女は弘徽殿の御妹であらせられるから、源氏を排斥するゆかりの人も多いので、女の方でもひどく源氏との關係を隠してお居でなされるので。

なみだ河うかぶみなわも消えぬべし流れて後の瀬をもまたずてなく／＼亂れかき給へる、御手いとをかしげなり。「今ひとたび對面なくしてや」とおぼすは、口惜しけれど、おぼし返して、憂しと思しなすゆかり多くて、おぼろげならず忍びたまへば、いとあながちにも聞えたまはずなりぬ。
源氏からの御消息を得なかつた臙月夜の君はひどく悲しみなされ、じつとこらへてゐられたが、流るる涙は押へ給ふ袖よりも流れ出てゐる。斯く人目を憚つてゐられる御様子はまことに窮屈なものである。やうやく源氏への返歌として
なみだ河うかぶみなわも消えぬべし流れて後の瀬をもまたずして
と、泣きながら、筆跡もしどろもどろに書きなかつた。その筆蹟はなか／＼おもむきがある。

○いとあながちにも云々
——源氏は強ひて對面し
ようともなさらない。

○明日とての暮——いよ
明日出發するといふ日の
夕暮。

○院——桐壺院。
○曉かけて月出づる頃な
れば——月は曉の前頃か
ら、曉にかけてある頃で
あつたから、北山へは夜
も更けてから行つてもよ
いとて、道寄りなざるの
である。

○入道の宮——藤壺。
○近き御簾の前に——御
座所近い簾外に源氏の御

須磨

四九〇

源氏は、「今一度朧月夜に對面する事も出来ないで別れるのか」と思ひなざると、やはり残念ではあつたけれども、よく／＼考へ直してごらんになると、朧月夜は弘徽殿太后の御妹でゐらせられるから、源氏を排斥するゆかりの人々も多いので、女の方でもひどく源氏との關係を隠してゐらつしやるので、この際源氏は強ひて彼女に對面なさらうともなさらずに事は止んだ。

○なみだ河うかぶみなわ云々の歌——涙河に浮んでゐる水の泡も、流れ／＼て下流の瀬に至り着かないうちに消え失せてしまふであらう。それと同様に私もあなたに再會するの期を待たないで、思ひ死に死んでしまふでありませうの意。水泡は朧月夜のこと、後の瀬は源氏との再會の機をいふ。

明日とての暮には、院の御墓拜み奉り給ふとて、北山へまうてたまふ。曉かけて月出づる頃なれば、まづ入道の宮に參うて給ふ。近き御簾の前に御座まゐりて、御自ら聞えさせ給ふ。春宮の御事を、いみじく後めたきものに思ひ聞え給ふ。互に心深きどちの御物語はた、よろづのあはれまさりけむかし。

明日はいよ／＼須磨へ出發するといふ日の暮方、故桐壺院の御墓に御參詣をなさらうといふので、北山へおでかけになる。折から月は曉方にかけてまだ光つてゐる頃であるから、御墓へは夜も更けてから行つてもよいといふので、まづ途中で藤壺の宮を御訪問になつた。宮

座所を作つて、藤壺自ら
お話しになる。
○春宮の御事を——源氏
が去られた後に於ける、
東宮のことが、非常に氣
遣はれる由を藤壺がお話
しになる。
○どち——同志。間柄。
仲間。

○懐かしうめでたき——
藤壺の。
○つらかりし御心云々——
藤壺のこれまで無情で
あらせられたことを、一
寸お怨み申上げたかつた
けれども、もし申上げた
ならば藤壺は今更暇なこ
とだとお考へなさるだら
う。

○思ひ給へあはする事の
一ふし云々——あなたと
密通の一件を思ひ出しま
すと、只今の遠流もその
報いかと、何となく空恐
ろしくございます。
○をしげなき身はなき云
々——數ならぬ私のこの
身は、どうなりまして

は御自分の御座所近い簾外に、源氏の君の御座所を作つて、藤壺自ら直接に御話がある。このとき宮は源氏が須磨に去られた後に於ける東宮の身の上が心配であると、この事を非常に氣づかつて、いろ／＼と源氏に申しあげなさる。源氏と藤壺とはお互に深き考へを持つてゐられる間柄のことであるから、御物語をあそばされた間には、いろ／＼な哀れなことが多くあつたとせう。

懐かしうめでたき御けはひの、昔にかはらぬに、つらかりし御心ばへも、かすめ聞えさせまほしけれど、今更にうたてと思さるべし。わが御心にも、なか／＼今ひとときは亂れまさりぬべければ、念じかへして、「ただかく思ひかけぬ罪に當り侍るも、思ひ給へあはする事の一ふしになむ、そらおそろしう侍る。をしげなき身はなきになしても、宮の御世だに、事なくておはしまさば」とのみ、聞えたまふぞことわりなるや。

藤壺の宮の人なつかしいところがあり、立派でゐらせられる御様子は、入道せられなかつた以前と、只今とは少しも變つてゐない。かうした御姿を見奉るについても、ありし日、我に對して無情な態度をとりなかつた藤壺の御心を、源氏の君は、一寸お怨み申上げたのであつたが、もしさうした怨言を申上げるならば、藤壺は今更いやなことだとお考へになるだらう。又

須磨

四九一

よいから。
○宮の御世だに——東宮の御位さへ、無事であらせられるならばよいと考へます。

自分の心も、更にありし日のことどもが追想せられて、一層心が、かき亂されてしまふであらうと、強ひてその心を我慢なされた。さうして源氏は、「私がこのやうな遠流されることになりましたのは、あなたとの例の一件の、その報いによるのであると思ひますと、何となく空恐ろしうございます。數ならぬ私のこの身は、どうならうとも何の惜しいこともありませんが、たとひこの私の身が亡いものとなりましても、どうか東宮の御身の上だけは、無事であらせられるやうにしたいものだと思ひます」とばかり申されたが、まことに道理ごもつともなことでありますわい。

宮も、皆思し知らるる事にしあれば、御心のみ動きて聞えやりたまはず。

大將、よろづの事書き集め思しつゞけて、泣きたまへる氣色、いと盡せずなまめきたり。御山に参り侍るを、御傳言や」と聞えたまふに、頓に物も聞えたまはず。わりなくためらひ給ふ御氣色なり。

見しはなくあるは悲しき世のはてを背きしかひもなく／＼ぞふる

いみじき御心惑ひどもに、思しあつむることども、えぞつづけさせ給はぬ。

別れしに悲しきことはつきにしをまたぞこの世のうさはまされる

源氏のいろ／＼と仰せられることは、藤壺の宮も、胸に思ひあたることどもであつたから、

○宮も皆思し云々——藤壺の宮も胸に覺えのある事であるから、いろ／＼と心配なさるばかりで、何とも御返答が出来なかつた。
○大將——源氏。
○盡せずなまめき——どこからどこまでも罷廢でゐられる。
○御山に云々——これから桐壺院の御陵に参詣いたしますが、御傳言もございせんか。
○見しはなくあるは云々の歌——補欄参照。

○いみじき御心惑ひ——宮をいふ。
○別れしに戀しきことは云々の歌——補欄参照。

宮もあれやこれやと心痛なさるばかりで、何とも申しあげなさらぬ。源氏は又よろづのことどもが、一時に心配になつてきて、よよと泣きくづれなさらぬ。そのさまは又何とも言ひやうもないほど艶麗でゐらつしやる。やがて源氏の君は、「私はこれから桐壺院の山陵に参詣いたしますが、何か御傳言はありませんか」と申しあげなさらぬと、藤壺は感慨無量で、すぐに御返事もなさらぬ。たいへん躊躇してゐらつしやる様子である。やがて藤壺の御歌に、

見しはなくあるは戀しき世のはてを背きしかひもなく／＼ぞふる

と御詠みになつた。宮は御心もひどく思ひ迷うてゐらせられ、いろ／＼と思ひあつめてゐられる胸の思ひをも、よく言ひ現はしなさらぬ。源氏の君からは返歌があつた。それは、

別れしに悲しきことはつきにしをまたぞこの世のうさはまされる
といふのである。

○見しはなくあるは云々の歌——相見し桐壺院は、今や既に亡き人となられ、相見し人の只今も生き永らへてゐられる源氏の君は、遠流といふ悲運に沈まれた。斯うした末世に於て、私は出家してしまつたが、やはり世の悲しさから遁れられず、出家の甲斐もなく毎日泣いてばかりゐます。「なく／＼ぞふる」の「なく」には、「無く」と「泣く」との兩義を兼ねさせてゐる。

○別れしに悲しきことは云々の歌——父帝桐壺院に死に別れたので、私の悲しさのありだけは盡されたと思つてゐましたが、今度は又遠流されるといふことになり、この世の憂慮は更に増加いたしました。

「この世のうさ」この語について、宣長は玉の小櫛に、「このよのうさといふに、子の意をこめて、東宮の御事也。東宮に別れ奉るうさは、又まされりと也。さて表はただ此度のうさ也」と言つてゐる。

月まち出でていで給ふ。御供に唯五六人ばかり、しも人もむつまじき限して、御馬にてぞおはする。更なる事なれど、ありし世の御ありきに異なり。皆いと悲しう思ふ中に、かの御禊の日、假の御隨身にて仕う奉りし、右近のぞうの藏人、うべき爵位も程すぎつるを、終に御簡けづられて、官も取られてはしたなければ、御供に参るうちなり。

月の昇るのを待つて、源氏はここを出でて、北山の桐壺院の御陵に参詣なさる。その御供には唯五六人ばかりを従ひさせられ、低い召使もごく睦しくしてゐるものだけを連れて、御自身は馬に乗つてお出でになる。今更、改めて言ふまでもないことであるが、昔の立派な外出であつたのとはすつかり變つて、はじめなものである。御供の人々も、このなさけない有様を見奉りて、誰も皆、悲しきことに思つてゐる。その中でも、嘗て齋院の御禊の折に、假の御身として、源氏の君のお供をした右近將監の藏人がゐる。この人はもう既に五位に昇進すべき人であるのに、その折にはづれて時を過し、日給簡も削づられて、殿上人の資格も無くなり、官職も免ぜられてしまつた。かうして仕方のないやうになつたので、今夜も源氏の君の御供の内に

○更なる事なれど——言ふまでもないことでありますが、以前の立派な御薄とはすつかり違つてゐる。
○御禊の日——齋院御禊の日をさす。葵の巻に出づ。
○右近のぞうの藏人——右近の將監で藏人を兼務した人。伊豫介の子で、紀伊守の弟にあたる。
○うべき爵位——六位の藏人の、始めて従五位下に叙せられるをいふ。右近のぞうの藏人も、當然従五位下に叙せらるべき期限も過ぎて。
○御簡けづられて——殿上人は日給簡といふ札に姓名を記されて掲げられ、昇殿を停められると、この簡を除せらる。

加つてゐるのである。

賀茂の下の御社を、かれと見渡すほど、ふと思ひ出でられて、下りて御馬の口をとる。

ひきつれて葵かさししそのかみをおもへばつらしかものみづがきといふを、「實にかゞ思ふらむ。人よりけに花やかなりしものを」と、おぼすも心ぐるし。君も、御馬より下りたまひて、御社の方を拜み給ふとて、神にまかり申し給ふ。

うき世をば今ぞわかるるとまらむ名をばたゞすの神にまかせてとのたまふさま、物めでする若き人にて、身にしみてあはれにめでたしと見奉る。

歩いて行かれると、彼處が賀茂の下の御社であると思渡される所へ来た頃、彼右近の將監は、ひよつて御禊の當日、源氏の盛んな行列に加つたことが思ひ出された。さうして感慨に耐へないで、自分の馬から下りて、源氏の君の馬の口をとつて、一首の歌をよんだ。それに、ひきつれて葵かさししそのかみをおもへばつらしかものみづがきと。源氏はこれをお聞きになり、「ああ、なるほど、どのやうに無念に思つてゐることだらう。

○賀茂の下の御社——洛外賀茂川と高野川との合流する所にある。
○かれと——あれがさうだと。
○ふと思ひ出でられて——御禊當日のことが、ひよつと思ひ出だされて。
○ひきつれて葵云々の歌——補欄参照。
○實にかゞ思ふらむ——なるほど、どんなに無念であるだらうか、彼はあの當時は人より立ち勝つて殊に花やかであつたのにと。
○まかり申し給ふ——御告別をなさる。
○うき世をば今ぞ云々の歌——補欄参照。
○物めでする若き人にて——右近將監の藏人は、物に感動し易い性質の人なので。

あの御喪當日は、彼も人より立ちまさつて花やかにしてゐたものを」と思召すについても、心苦しく思ひなされた。源氏の君も此處で馬より下りなされ、御社の方を拜みなさる序に、この度の暇乞を神に申上げなされる。そのときの君の御歌に、

うき世をば今ぞわかるるとどまらむ名をばただすの神にまかせて

とのたまふその御様子は、まことにあはれ深いものである。この右近の將監は物に感動し易い若者であつたから、君のこの様子を見て、あはれに美しき方でゐらせられる哉と、しみじみと見奉つた。

○ひきつれて葵かざしし云々の歌——賀茂の瑞垣を見るについても、嘗て君と私とが連れだつて、あの御喪の日に葵を頭にさして花やかな行列をしたことを思ひ出だされ、今の悲しい境遇と比べられて、まことに残念なことであります。○うき世をば今ぞわかるる云々の歌——下賀茂は紀(タダス)の森にあり、下賀茂の神を紀の神ともいふ。この神の名に正すの意を掛けてこの歌は詠んだものである。私は只今からこの浮世を離れてしまひます。さてそのあとには、いろ／＼な噂が世に残ることでありませう。その評判の正邪はこの紀の神の正しなさるのにおまかせいたします。

美しい月光の下に、こんもりと茂つてゐる賀茂の社を遙拜してゐられる、源氏と右近の姿。さこそ優美な夜の景色であつたらう。

○御山——桐壺院の御

○おはしましし御有様——桐壺院在世當時の様

○かぎりなきにても——限りなき至尊の御身で

○世になくなりぬる——死んでしまはれた人ぞ。

○よろづの事を——源氏がいろ／＼の御物語を泣く／＼墓前でなされて

○そのことわり云々——それはどうすればよいかといふ道理を、御墓から明らかに聞き出すことが出来ない。

○さばかり思しのためはせし云々——あれほど熱心に、源氏の身上を御心配なさつてゐられた御遺言も、今は全く駄目になつてしまつたと思ふと残念である。

○ありし御面影——御生存中の桐壺院の御姿が。

御山に参うで給ひて、おはしましし御有様、たゞ目の前のやうに思し出でらる。かぎりなきにても、世になくなりぬる人ぞ、言はむ方なく口惜しきわざなりける。よろづの事をなく／＼申し給ひても、そのことわりをあらはにえ承り給はねば、さばかり思しのためはせし、さまざまの御遺言は、何方へか消え失せにけむと、いふかひなし。

さて源氏の君が、いよ／＼桐壺院の山陵にお着きになると、嘗て院が御在世當時の御様子が、唯目前にあらはるるやうに思ひ浮ぶのである。限り無く尊い十善の聖天子といへども、一度この世を去つてしまひなされると、何とも言ひやうのないほど残念なものである。源氏の君はいろ／＼の事どもを、泣く／＼墓前に申しあげなされるのであるが、それはどうすればよいといふやうな道理を、御墓から明らかに聞き出すことが出来ないのである。

故院があれほど熱心に、源氏の一身上を御心配なさつてゐられた御遺言も、今は全く駄目となつてしまつたと思ふと残念である。

「かぎりなきにても、世になくなりぬる人ぞ、言はむ方なく口惜しき云々」といふやうなことは、ありふれた語ではあるが、やはり淋しい感を催さしめる。

御墓は道の草しげくなりて、分け入り給ふほど、いとど露けきに、月も雲

○そぞろ——ひどく、ぞつと心寒くなる。
○なきかげやいかか云々の歌——補欄参照。

がくれて、森の木立こたちこぶかく心すごし。歸り出でむ方もなき心地して、拜かみ給ふに、ありし御面影おんおもかげさやかに見え給へる、そぞろ寒きほどなり。

(源氏)
なきかげやいかか見るらむよそへつゝながむる月も雲がくれぬる

桐壺院の御墓は、あたりに草深く繁つたところに在る。源氏がその草葉の中を踏み分けてお入りになると、露で御衣もびつしよりとなる。折から月も雲の中に隠れ、あたりの森林は樹木鬱蒼として、まことに物凄景である。君は途方に暮れて、どうして歸つたらよいか、それすら分らないやうになつた。たゞひたすら故院の墓前に合掌なさる。そのとき故院がまだ御生存中であつた當時そのままの御姿が、はつきりとあらはれ、心もぞつと寒くなるほどである。源氏の歌、

なきかげやいかか見るらむよそへつゝながむる月も雲がくれぬる

○なきかげやいかか云々の歌——亡き桐壺院の亡靈は、どのやうにお考へになつて、私をこらんあそばされるであらうか。亡き父桐壺院の面影と思つて眺めてゐた月も、今や雲の中に隠れてしまつた。さては私の悲しみを見るに忍びないで、月は隠れたのでなからうかの意。亡き桐壺院を月によそへてよんだもの。

明けはつるほどにかへり給ひて、春宮にも御消息聞えたまふ。王命婦を御か

○王命婦を御かはりとして——藤壺が出家なされた

ので、その後はその代りに王命婦を添へてあるのだ。
○その局にとて——王命婦の部屋あてに。
○又参り侍らず云々——もう一度参上いたされないうで、都を去るのが何事よりも増して残念でございます。
○よろづ推しはかりて——！萬事私のことを御推察の上、然るべく東宮に申しあげて下さい。
○いつかまた春のみやこ云々の歌——補欄参照。
○櫻の散り過ぎ——零落した身の上を思つて、花も散つた櫻の枝に文をつけて奉つたのである。



かはりとして侍はせ給へば、その局にとて、「今日なむ都はなれ侍る。又参り侍らずなりぬるなむ、あまたの憂にまさりて思ふ給へられ侍る。よろづ推しはかりて啓し給へ。」

いつかまた春のみやこの花を見むときうしなへる山がつにして
櫻の散り過ぎたる枝につけ給へり。

夜もすつかり明けてしまつた頃、源氏は御陵からお歸りになり、東宮の御許に御消息を申しあげなされる。當時は東宮の御許には、藤壺の宮が出家なされた後とて、王命婦が付き添うてゐられたので、君はこの王命婦の局へあてて、御手紙を送られた。源氏からの手紙の文句には、「今日こそはいよ／＼この都を出發いたします。もう一度東宮の御許に参上いたさないで、遂にお別れするやうになつたのが、いづれの憂愁よりも勝つて悲しく思ひられます。私の胸中は、どうかあなたが御推察の上、東宮によりしく御傳言下さい。」

いつかまた春のみやこの花を見むときうしなへる山がつにして」と記した手紙を、もう花の盛りも過ぎた櫻の枝につけてお送りになつた。

○いつかまた春の云々の歌——吾はいよ／＼世の勢もすつかり失つてしまつた人間となり、今や須磨の山間に住む賤夫となつてしまつた。もうかうなつては、最早春の美しい都を見ることは、何時になつたら出来ようか。もうとてもないだらうの意。なほその裏には、「春のみやこ

に、「春宮」の意をかけ、東宮殿下の御繁榮の時期を見ることも、私にはとてもできないことであらう。

かくなむと御覽ぜさすれば、幼き御心地にも、まめだちておはします。御かへりいかゞ物し侍らむ」と啓すれば、「暫し見ぬだに戀しきものを、遠くはましていかにといへかし」とのたまはす。ものはかなの御かへりやと、あはれに見奉る。

源氏の君からは斯ういふ御消息がありましたと、王命婦が東宮にお見せ申すと、東宮はまだ御幼少でゐらせられますが、眞面目になつて聞いてゐられる。命婦は、「この源氏からのおたよりの御返事はどういたしたらよろしいでせう」と奏上すると、春宮は、「都に君が居てさへも、暫く君を見ないのさへ悲しうございます。それなのに、まして君が遠い須磨へさらされては、どのやうに戀しいことであらうと言つてやれ」と仰せられる。たゞそれだけ仰せられたばかりであるので、命婦は、たよりない御返事であると思ひ、まだ何も御存じないのをあはれに見奉つてゐる。

あぢきなき事に御心をくだき給ひし昔のこと、折々の御有様、思ひつゞけらるるにも、物思ひなくて、我も人も過し給ひつべかりける世を、心と思

○御覽ぜさすれば——王命婦が源氏からの御消息を、東宮に御覽に入れると。
○まめだちて——眞面目になつて。
○遠くはましていかに——まして遠く須磨へ去られては、どうして悲しさに堪へられませう、と言つてやりなさい。
○ものはかなの御かへりや——たよりない御返事である。

○あぢきなき事に云々——藤壺とのつらひ戀に心配なされた昔のことどもや。

○物思ひなくて云々——藤壺も源氏も氣樂に世を送られるべき身分であつたのを。

○心と思し敷きけるを——源氏が自分の心から苦勞なされたのを。

○わが心ひとつにかからむ——王命婦が源氏と藤壺との媒をしたから、自分の心一つで斯うしたさま／＼な事件が起つたやうに思はれる。

○さらに聞えさせやり——全く申しあげやうもございせん。

○御前には——東宮殿下の御許には。

○咲きてとく散るは云々の歌——補欄参照。

○時しあらば——よい時機がありましたならば、必ずお歸りであらう。

○名残もあはれなる云々——御返事を書いて出した後で、あはれな感情が残る、それを名残と言つたのである。御返事を出

し敷きけるを、くやしう、わが心ひとつにかからむ事のやうにぞおほゆる。御返は、「さらに聞えさせやり侍らず。御前には啓し侍りぬ。心ほそげに思しめしたる御氣色もいみじうなむ」と、そこはかとなく心の亂れけるなるべし。

「咲きてとく散るはうけれど行くはるは花の都をたちかへりみよ

時しあらば」と聞えて、名残もあはれなる物語をしつゝ、一宮のうち忍びて泣きあへり。

王命婦はいろ／＼と昔のことどもが追想せられるのであつた。先づ源氏の君が藤壺の宮と道ならぬ戀のために、辛い思ひをされた過ぎし日のこと、それから又、君が藤壺をたづねてお逢ひなされた時はどうであつたとか、逢ひられなくて歸られたときはどうであつたとかと、今までの時折のことが思ひつゞけられるのであつた。それについても源氏の君にしる、藤壺の宮にしる、何の心配もなく、心長閑に目を暮しなされるべき運命にあつたのを、源氏は自分の心から藤壺と關係され、いろ／＼と煩悶をなされた。けれども思へば、われ(王命婦)自身の心一つで源氏と藤壺との媒をなし、そのためくやしうも斯うしたさま／＼な事件が起つたやうに思はれると、命婦は思ふのであつた。

したあとで、物悲しい話を傍の人々にするのである。

こんなことを考へながら、源氏の君の許への返事には、「御返事は全く申しあげやうもございせん。東宮の御許にも委細を奏上して置きました。東宮も君とのお別れを、大へん心ほそく思つておられました」と、しどろもどろに書き亂されてあつた。これも王命婦の心が混亂してゐたからであらう。なほ文の終りに、彼女の歌が、

咲きてとく散るはうけれど行くはるは花の都をたちかへりみよ

と書かれ、一旦須磨に去られても、よい時機があるならば、又お歸りあそばされるだらう」と申しあげて、御手紙を差上げてしまつてからも、物悲しい物語を傍の人々と語りあつては、東宮御所中の者は、皆聲を吞んで泣きあつた。

○咲きてとく散るは云々の歌——春の花が咲いたかと思ふと直ぐ早く散つてしまふのは、まことに心愛いものであつたが、過ぎ去る春よ、明年の春には又花の都へもどつて来て満都の花を見てくれよ。この歌の裏には、「咲きてとく散る」に、源氏の轉變極りなき盛衰榮辱を聞かせ、行く春は源氏をさしてゐる。さうして源氏の君に、須磨から京に再び歸り給への意を含ませたものである。

ひとめも見奉れる人は、かく思しくづをれぬる御有様を、なげき惜み聞え人なし。まして常にまゐり馴れたりしは、知り及びたまふまじき長女、御厠人までも、ありがたき御かへりみの下なりつるを、暫しにても、見奉

○かく思しくづをれぬる——斯く弱り果てなかつた源氏の君の御様子。
○知り及びたまふまじき——源氏の君を覚えて下さらない。

○長女——下司の老女の稱といふ。
 ○御用人——厠を掃除する人。
 ○ありがたき御かへりみ——君の御恵を受けてゐたのを。

○誰かはよろしく思ひ聞えむ——世人は皆、今度の源氏の須磨左遷を非常に悲しく思つてゐる。一人も立大抵のことに思つてゐるものはない。
 ○七つになり——源氏が七歳になられてからこのかた。
 ○奏し給ふ事の云々——源氏が桐壺帝に奏上なさること、通らないことはなかつたので。
 ○この御いたはりにかからぬ人——この源氏の御取りたてに預らない人。

らぬ程や經むと思ひ歎きたり。

ただの一目でも源氏の君を見奉つた人々は、君が斯くもがつかりと弱り果ててゐられる御有様を見奉つては、歎き惜まないものはない。であるからましてや、君の御殿に始終参殿して仕へてゐたものなげきは大へんなもので、源氏は少しも御存じない賤しい身分にある、下司の老女どもや、厠の掃除人までが、今日まで温い君の御愛顧を蒙つてゐたのに、暫くの間とはいへ、君が遠く須磨に去られて、御目にかかられないですごさねばならないのかと、思ひ歎いてゐた。

おほかたの世の人も、誰かはよろしく思ひ聞えむ。七つになり給ひしよりこのかた、帝の御前に夜晝侍ひたまひて、奏し給ふ事のならぬはなかりしかば、この御いたはりにかからぬ人なく、御徳を喜ばぬやはありし。やむごとなき上達部、辨官などの中にも多かり。それより下は數知らず。思ひ知らぬにはあらねど、さしあたりては、いちはやき世を思ひ憚りて、まゐり寄る人もなし。

今度の源氏が須磨に左遷になられたことについては、一般世間の人々も非常に悲しんでゐるので、誰一人としてたゞごとと思つてゐるものはない。

○辨官——太政官の書記官。
 ○思ひ知らぬには——恩義を辨へないのではないが。
 ○いちはやき世を——嫌疑のすばやい世間體を憚つて。これ右大臣一派の迫害をさす。

○世ゆすりて惜み聞ゆ——源氏の須磨に行かれるのを、世間は擧つて騒ぎ立て。
 ○何のかひかはと思ふにや——何の効果があらうか、ちつともないと思ふのであらうか誰もおとづ

さて源氏の君は七歳にならせられてからといふものは、夜も晝も、常に桐壺帝の左右に侍つてゐられ、帝に奏上なさることは、どのやうなことでも、いづれも皆御聞き届けなされた。それだから誰でも榮達を願ふものは、ひたすら源氏の君をたよりとしてすがつた。彼等は君の御徳を感謝しないものがあらうか、皆感謝してゐたのである。高貴な公卿達や太政官の辨官どもの中にも、源氏の引立てによつて榮えてゐる人が随分多い。ましてそれ以下の身分で君の御世話に預つたものは數へられぬほどに多い。

是等の人々は、源氏の須磨に去られる今となつて、別れを惜むに行くものはない。これは彼等が君に對する恩義を辨へないのではない。それはよく萬々承知してゐるのだが、何と言つても、さしあたつた只今は、何についてもすぐ嫌疑を受ける時勢であつたから、それ等の嫌疑迫害(右大臣一派からの)を受けるのを恐れ憚つて、君のもとに名残を惜むに來ないのである。

源氏は三歳にして生母桐壺更衣に別れ、六歳で外祖母(更衣の母)に死別れ、七歳から帝のもとに參上なされたのである。

世ゆすりて惜み聞え、したには公をそしり恨み奉れど、身を捨ててとぶらひ參らむにも、何のかひかはと思ふにや。かゝる折は人わろく、うらめしき人多く、世の中はあぢきなきものかなとのみ、よろづにつけておぼす。

源氏の君が須磨に下向なさるのを、世間は擧つて騒ぎながら惜しみ奉り、内々では御上のこ

れない。
○かゝる折は人わろく—
—こんな場合には、きま
りの悪いほど懇めしく思
ふ人が多くて。

○その日—須磨へ出發
の日。
○女君—紫上。
○假の御衣—かりそめ
の御装束。
○いかに聞ゆべき事多く
—別れてしまつたなら
ば、どんなにお互に話し
たいことどもが深山積つ
たなあといふ心持がする
ことであらう。
○いふぜき心地—胸の
晴れない心地。
○女君泣き沈みたまへる
—紫上は泣崩れてみら
れたが、躊躇しながら端
近くにゐざり出でられ
た。

○わが身かくて云々—
われ源氏が斯く生別のま
まで、やがて死別となつ
たならば、彼紫上はどん
なに悲しい境遇に沈みな
さるであらう。
○おぼしいりたるが云々
—思ひ沈んでみられる
紫上に、わが心細い所感
を述べては、それこそひ
どく思ひなげかれるだら
うと源氏は思召されたか
ら、ただ一首の歌だけを
残される。

のたびの處置を恨みそしり申したのである。然し御上の意に逆うて、どのやうな罰を蒙るとも
顧着せず、わが身を捨ててまでも源氏の君をお訪ね申さうかと思ふ人も、さうしてまでも無理
強ひに、君をおとづれたとて、果して何の効果があらうかと思ふのであらう。誰もおたづねし
なかつた。

かうした時には、源氏の君は昔づれてくれない人々の無情さが恨めしくなり、人の手前も體裁
のわるいほど、怨めしく思しめされ、萬事につき世の中はつまらないものだと思しめされる。

その日は女君に御物語、長閑に聞え暮したまひて、例の夜深く出て給ふ。

假の御衣など、旅の御よそひいたくやつし給ひて、月出でにけりな。なほ
少し出でて見だに送り給へかし。いかに聞ゆべき事多く、つもりにけりと
のみ聞えむとすらむ。一日二日たまさかに隔つる折だに、あやしういふせ
き心地するものを」とて、御簾まきあげて、端の方に誘ひ聞えたまへば、
女君泣き沈みたまへる、ためらひて膝行出でたまへる月影、いみじうをか
しげにて居給へり。

須磨に向つて御出發なさる當日は、源氏の君が紫上に、ゆつくりと御物語をなされて一日を
暮し、その日は例の如く夜も更けてから出發なされた。この日は假そめの御装束など、旅の

御準備をいたくみすばらしきさまになつた。源氏、「美しい月が出たよ。紫上には少し部屋か
ら出て、せめて見送りでもしてくれよ。これから別れて須磨に行つたならば、お前に對して話
したいことどもが、どんなに多く積ることであらう。それらつもの話も話されないのは無念だ
らう。たまに一日か二日の短い間隔つてゐるときでも、奇妙に胸の晴れない氣持がするもので
あるから、須磨にゐる。きの事を思へば、さぞと思はれる」と仰せられて、御簾を捲きあげて、
端居の方に紫上を誘ひ出だされた。

すると紫上は泣き沈みながら、少しためらひつつゐざり出でられる、折から照らす月影を受け
てゐられる女君の姿は、頗る優美な愛しいものであつた。

「わが身かくてはかなき世を別れなば、いかなるさまにさすらひ給はむ」と、
後めたく悲しけれど、おぼしいりたるが、いとどしかるべければ、

「いける世のわかれを知らでちぎりつゝ、命を人にかぎりけるかな
はかなし」など、あさはかに聞えなし給へば、

惜しからぬ命にかへて目の前のわかれをしばしとめてしがな
「げにさぞ思さるらむ」と、いと見捨てがたけれど、明けはてなば、はし
たなかるべきにより急ぎ出でたまひぬ。

○生ける世のわかれを知らで云々の歌——補欄参照。
 ○あさはかに——通り一遍の歌を仰せられると。
 ○惜しからぬ命にかへて云々の歌——補欄参照。
 ○げにさぞ——成程さうも思つてゐるだらうと、源氏の思召されるのである。

○明けはてなば——夜がすつかり明けはなれてしまつては、出發するのにも不體であるから。

源氏の君が考へられるには、「我の身が斯うして彼紫上と、只今、生別となるが、これがこのまま今生の死別となるやうであつたら、紫上はどのやうな悲運な境遇に沈淪なさるであらう」と、後髪を引かれるやうに心配でもあり、心悲しいのであつた。けれどもこの際このやうなことを話しては、彼女があれほど悲歎に暮れてゐるのに、一層悲しみを増さしめるやうであつたから、君は何とも仰せられないで、たゞ次の一首の歌だけを殘されて、

いける世のわかれを知らでちぎりつつ命を人にかぎりけるかな
 まことにはかない事である」などと、通り一遍の言葉を仰せられた。すると紫上は、惜しからぬ命にかへて目の前のわかれをしばしとめてしがな

と返歌をされる。「なるほどさうも思つてゐるだらう」と源氏は、彼女をここに殘して去るには忍びなかつたが、とかくするうちに夜がすつかり明けはなれてしまつては、出發するのにも不體であるので、夜の明けないうちに出發しようと、取りいそいで出發なされた。

補 ○いける世のわかれ云々の歌——お互に生きてゐるときでも、斯うして生別といふことがあつたのを、それをも知らないで、あなたと契りを結び、生きてゐるだけ添はう、即ち死ぬまで別れずに添ひませうと言つたことの愚さよ。○惜しからぬ命にかへて云々の歌——わたくしは眼前の君との別れには耐へられません。若し何等惜しくもないこの私の命を捨ててなりとも、悲しいあなたとの別れを、暫くでも引きとどめて置きたいものである。

道すがら面影につとそひて、胸も塞がりながら、御船に乗りたまひぬ。日長きころなれば、追風さへそひて、まだ申の時ばかりに、かの浦につき給ひぬ。かりそめの道にても、かかる旅をならひ給はぬ心地に、心ほそさもをかしさもめづらかなり。大江殿と言ひける所は、いたく荒れて、松ばかりぞしるしなりける。

源氏は須磨下向の道すがら、紫上の姿が胸につとそひて少しも忘れられず、いつも眼前にちらつて、胸もふさがる思ひながら淀川から船にお乗りになつた。

折からその頃は日も永い時節であるのに、順風までが吹き加つて、早くも翌日の午後四時頃には、かの須磨の浦にお着きになつた。

このたびの旅は、さう大した旅行でもなく、ほんの小さな旅ではあるが、源氏の君はかうした旅には慣れてゐられない御心でゐられるから、道中見るもの聞くものについて、旅の心細さも、又面白いところも感ぜられる。さうしたその感ぜられる心細さや、面白味は、都に居たときのものとは、すつかり變つた珍奇なものである。淀川を下り終へて、さて海洋にでようとなさる難波の渡邊といふところに、齋宮の御宿泊所にあてがはれてゐた大江殿といふ所がある。そこは非常に荒廢してしまひ、たゞ大きな松樹だけが目じるしとなつてゐた。

御船に乗りたまひぬ——都から淀川を舟にて下り、それから難波に出で、海洋に出るので

○道すがら面影につとそひて——源氏は下向の道中、常に紫上の姿が眼前にちらつて。
 ○申の時——午後四時頃。
 ○かりそめの道にても——以下須磨到着以前の道中の事。
 ○大江殿——難波の渡邊といふ所にある館。齋宮が凶事でなくして歸京のとき、難波にて祓ありて京に入られる。そのとき大江殿にて宿泊なさる。

ある。○まだ申の時ばかりに——宣長の玉の小櫛に、「京をたち給ひし日の事にはあらず、難波より船出し給へる日の申の時也。そもく、京よりは、難波までも、一日ばかりにゆく道なるに、いかなるおひ風なればとて、須磨まで、その日にはいかでかはいたらむ。作物語ながら、さやうのてづつなることは、かくべきにあらず。かの浦さしも遠き國にもあらざれば、そのほどなど、紫式部、人に聞きて、大かた知るべきわざなるをや」と。

唐國に名をのこしける人よりもゆくへ知られぬ家居をやせむ

渚なづみによる浪のかつかへるを見給ひて、「うらやましくも」と打ち誦よみじたまへるさま、さる世の故事ことばなれども、珍らしく聞きなされ、悲しとのみ御供みまもりの人々思へり。うちかへりみ給へるに、來こし方の山は霞はるかにて、まことに三千里の外の心地こころするに、權かみの雫しずくも堪へがたし。

ふるさとを峯のかすみはへだつれどながむる空はおなじ雲井か
つらからぬものなくなむ。

源氏の君はそこで、

唐國の名をのこしける人よりもゆくへ知られぬ家居をやせむ
と一首詠せられた。又渚にうち寄せてゐる浪が、寄せながらも、もとへ歸つてゐるさまをこら

○唐國に名を云々の歌——補欄参照。
○かつかへる——寄せては歸る。
○うらやましくも——後撰集「旅業平朝臣、及び伊勢物語の中に、いとむしく過ぎゆくかたの戀しきにうらやましくもかへるなみかな」とある歌のおもむき。
○さる世の故事——例の世に言ひふるくされたことども。
○三千里の外——白氏文集卷十三に、冬至宿「楊梅館」と題して、「十一月、中長至夜、三千里外遠行人、若爲「獨宿」楊梅館、冷比單床一衾身」とあるを引

○權の雫——古今集卷十七に、題しらず、よみ人しらずとして、「わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる舟の權の雫か」といふ。その語は「そで」の誤といふ。夜氣冷かにしてわが袖に露のおくのは、彦星が天の川を急いで渡るときに權の雫であらうかといふので、ここでもそれを引用して、權の雫で露けきやうに書きあらはし、その實涙でしめつばきさまをあらはしてゐる。
○ふるさとを峯の云々の歌——補欄参照。



んになつて、彼の在原業平の「いとゞしく過ぎゆくかたの戀しきにうらやましくもかへるなみかな」とよんだ歌を、源氏の君が朗誦なされた。その朗誦なされた歌のおもむきは、例の世に言ひふるくされた陳腐なものであつたが、君がなされるとやはり珍らしく新しく聞きなされ、御供の人々も感慨を催させられてゐた。

さて源氏の君がふり顧つてごらんあそばされると、ここまで通つて来た山々は、遠く霞の中に隔てられてしまひ、たいへんな遠方へ来てしまつた。まことに白樂天の言つた三千里外遠行人の句のやうな氣持がする。それについても、涙で濡れる袖は耐へられない。源氏は又、

ふるさとを峯のかすみはへだつれどながむる空はおなじ雲井か

とお詠みなされる。見るもの聞くものにつき、何もかも物悲しいものである。

補 ○唐國に名をのこし云々の歌——昔唐土に於ては、楚の屈原やその他高潔の士にして罪にあひ、遠流の刑に處せられて悲壯な最後をとげた人々があつたが、自分はそれ等の人々よりも一層果敢ない、放浪の侘住居をするのであらうかの意。○ふるさとを峯のかすみ云々の歌——竝處から故郷の方を振りかへつて眺めると、山の霞が隔てて見られないが、わが眺めるこの空も、故郷の人々が眺めてゐる空も同じ空であらうか。

おはすべき所は、行平の中納言の、もしほたれつゝわびける家居近きわたりなりけり。海面はやゝ入りて、哀に心すごげなる山なかなり。垣のさま

○おはすべき所は——源氏のお住みになる所は。○行平の中納言——古今集卷十八に「田村の御時

より初めて珍らかに見たまふ。茅屋ども葦ふける廊めく屋など、をかしうしつらひなしたり。所につけたる御住居やう變りて、かかる折ならずば、をかしうもありなましと、昔の御心のすさび思しいづ。

釋 源氏の君が御住居を定めなされる地は、彼の在原行平朝臣中納言が「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ」とよんで蟄居してゐた住家の附近であつた。海岸からはやや引込んでゐて、あはれに物凄いままの山中である。あたりにめぐらされてゐる垣の作りやうからして、その他何事も源氏の君の眼には物珍しく見えた。葦ぶきの家だとか、葦ぶきの廊下らしい建物などが面白く作られてゐる。

この須磨の地の風俗にあてがつて作られた君の御住家は、都のさまとはすつかり變つてゐる。このやうな世を憚つてここへ来たといふやうな折でなくして、普通の場合にこんな土地に住居をして、然るべき女と暮してゐたならば、さぞ面白いことであらうと、ありし昔の好き心のなぐさめに思ひ出でられるのである。

補 ○かかる折ならずば——細流抄に、「罪なくして配所の月を見ればやと云が如し。只うちの身にて見侍らばいかに面白からんすらんとなり」と。

評 「おはすべき所は」云々のところからは、源氏の君が舟からあがりなさつてからのことである。

に事にあたりて津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に遣しける」と詞書して、在原行平のよんだ歌に「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ」とあるのによる。蟄の衣が藻から垂れる潮の聲にぬれるやうに、涙に袖をぬらしながら侘住居をしてゐた。

○海面はやゝ入りて——海岸からはやや引込んだ所といふ意。

○所につけたる——所相當な。

○かかる折ならず——このやうな場合でなく、普通の旅行であつたならば面白いことであらうと。

○御心のすさび——物ずき心。

○御庄の司——源氏の御領地の管理者。
 ○さるべき事ども——普請のことどもなど。
 ○良清の朝臣——播磨守の子、源良清である。
 ○親しき家司——家事をつかさどらしめる親しい家合にて。
 ○水深う遣りなし——庭を流れる遺水を深くして。
 ○今はとしづまり——いよ／＼落着いて、今こそとお住ひになる心持は、
 ○現ならず——夢のやうである。
 ○國の守——播磨守。
 ○親しき殿人——もと源氏の邸に仕へてゐた人で、それから立身した人であるから。
 ○かかる旅所ともなく——かやうな旅の侘住居にも似合はず。
 ○はか／＼しき云々——しつかりとした話相手もないので、外國にでも行

近きところ／＼の御庄の司召して、さるべき事どもなど、良清の朝臣など、親しき家司にて、仰せ行ふもあはれなり。時の間にいと見どころありて、しなさせ給ふ。水深う遣りなし、植木などもなして、今はとしづまり給ふ心ち現ならず。國の守も親しき殿人なれば、忍びて心よせ仕うまつる。かかる旅所ともなく、人さわがしけれども、はか／＼しく、物をものたまひ合すべき人しなれば、知らぬ國の心地して、いともれいたく、いかて年月を過さましとおぼしやらる。

○争しづまり行く——修繕その他のことどもが片附いて行くのである。
 ○長雨——初夏の降りつゞく雨の頃。
 ○女君——紫上。
 ○若君——夕霧。
 ○何心もなくまぎれ——夕霧が何心もなく、頃はなさいまで遊んでゐられたこと。
 ○二條院へ云々——紫上と藤壺の宮との許に送られる御手紙は、すらりとも書かれず、涙に暮れて書かれた。
 ○宮には——藤壺の宮には、
 ○松島のあまの云々の歌——補欄参照。
 ○いつとけ侍らぬ中に——

源氏の君がお住ひなさるのに決定された地の、附近にゐる御領地の管理者どもをお呼び集めになり、住ふことについての普請どものことを言ひつけられた。播磨守の子良清朝臣などは、家司の中でも親しいもので、君の命を奉じて事どもの世話をしてゐる。そのさままことに物哀れである。暫しの間に頗る立派に修築せられた。庭の遺水も深く掘つて作られ、植木なども植ゑられて、今こそはいよ／＼落着いてお住ひになる。然しまだ夢のやうな心地でゐられる。ここ播磨の國守も、嘗ては親しく源氏の邸に仕へてゐた者であつたから、彼は内密に源氏の君に心を通して、親切にお仕へした。斯うした旅の侘住居であるにも拘らず、出で入りする人々

つたやうな淋しい心地がして。
 ○うもれいたく——穴にでも埋まつたやうなくさ／＼した氣持がして。

が多いのであつたが、しつかりとしたたよりになる人は来ない。それでしつかりとした君の話相手になる人がないので、他國にでも行つたやうな心地がして、穴にでも埋められたやうな、全くくさ／＼とした氣持がするので、さてこんなに淋しくては、「一體どうしてこれからの年月を暮したらよいだらう」などと、今後の淋しさを想像なさるのである。

やう／＼事しづまり行くに、長雨の頃になりて、京の事ども思ひやらるるに、戀しき人多く、女君の思したりしさま、春宮の御こと、若君の何心もなく、まぎれ給ひしなどをはじめ、ここかしこおもひやり聞え給ふ。京へ人いだしたてたまふ。二條院へ奉り給ふと、入道の宮のとは、かきもやり給はず、くらされ給へり。宮には、
 松島のあまのたまやもいかならむすまの浦人しほたるるころ
 いつと侍らぬ中にも、來しかた行くさきかきくらし、みぎはまさりてなむ

御住居の修繕その他萬端の準備も整うて、靜かに落着いてきた。折から長雨降りつゞく梅雨の候となり、しんみりと心細くなつてくる。それについても都のことどもが思ひやられるので、戀しく思はれる人も多い。先づ紫上の思ひ沈んでゐられた右様、東宮のこと、夕霧の何心もなく無邪氣に遊んでゐられたことどもなどをはじめとして、その他此處彼處の人々はどうであら

「歎きはいつと限つたわけではなく、常のことではありませんが、この頃の長雨を降るのには、過去を思ひ、未来を考へられて、一層涙が出ます。」
 ○みぎはまさりてなむ——花鳥餘情に、君こふる涙おちそひ此の川の汀まさりて思ふべらなりしと。この歌貫之のもの。

○内侍のかみ——臘月夜。
 ○例の中納言の君——臘月夜方の侍女。
 ○私事のやうにて云々——中納言のもとへ私信を

うかと思ひ遣られる。

さて都の方へ使者を立てて、音信を託しなされた。このとき二條院の紫上のもとへ送られる手紙と、藤壺入道のもとへ送られるものは、涙に暮れてはかくしくも書きなされることが出来なかつた。

さて藤壺の宮のもとへ送られた手紙には、

「松島のあまのたまやもいかならむすまの浦人しほたるるころ

私の歎きはいつと限つたことはなく、常のことではありますが、長雨のそほ降る今日この頃は、過去を思ひ、未来のことを心配して一層涙を催させられ、落涙の爲めに汀が殖えたやうな気がします」と書かれた。

○松島のあまのたまや云々の歌——長雨の降る只今、須磨の浦人は鹽水にそほ濡れてみますが、松島の海人の住家はどうでありませうか、さぞそちらでもわびしく暮してゐられるだらうの意で、須磨の浦人に源氏をたとへ、松島の海人に藤壺をたとへたのである。海人と尼と同音であるから。

内侍のかみのおんもとに、例の中納言の君の、私事のやうにて、中なるに、
 「つれなくと過ぎにしかたの思ひ給へ出でらるるにつけても、

こりずまの浦のみるめゆかしきを鹽やくあまやいかと思はむ」

さまざま書き盡したまふ言の葉、思ひやるべし。大殿にも、宰相の乳母にも、仕う奉るべき事なども書きつかはす。

送るやうにして、その中に臘月夜への手紙をも同封したのである。
 ○こりずまの云々の歌——補欄参照。
 ○大殿——舅の致仕の左大臣。
 ○宰相の乳母——夕霧の乳母へも、夕霧によく御奉公するやうにとの手紙を送られる。

源氏は臘月夜尙侍のかみの許へは、公然とたよりをするのは憚ることであつたから、例の

侍女である中納言のもとへ、私用の手紙のやうにして書き送られ、その中に尙侍のかみへの手紙をも同封しなかつた。その同封なかつた臘月夜宛への手紙には、「つれなくとして、今までのことどもが追想せられるについても、

こりずまの浦のみるめゆかしきを鹽やくあまやいかと思はむ

と心配になります」と、なほその他、ところへお送りになつた御手紙の文句は、先づ讀者の想像にまかせます。舅の左大臣へも、又その宰相の乳母へも、夕霧の君を大切に養育するやうにといふことどもを書いて送られた。

○こりずまの浦云々の歌——「こりずまの」とは、どのやうな憂目にあつても懲りないでやりつゞける意。この語に須磨の浦を掛けてゐる。「みるめ」は、單にみるといふに同じ。「め」は食用海藻の總稱。この歌は六帖第三にある「白波はたちさわぐともこりずまの浦のみるめは刈らんとぞ思ふ」といふ歌をふまへて詠んだものである。

さて源氏のこの歌は、須磨のみるめは、どのやうな憂目にあつても是非見たいと思ふものであるが、こちが斯程まで思つてゐても、この浦を家として鹽を焼いてゐる蟹は何と思ふであらう

かといふのである。即ち張は臘月夜をさしたもので、私は斯うなつてもなほ懲りないで君を見たいと思つてゐますが、君はどう思つてゐますかの意。

○ところ／＼に見給ひ——
都では源氏からの御手紙を、此處彼處でござらになつて。
○二條院の君——紫上。
○こしらへわびつ——
すかしかねながら。

京には、この御文、ところ／＼に見給ひつゝ、御心亂れたまふ人々のみおほかり。二條院の君は、そのままに起きもあがりたまはず、盡せぬさまに思しこがるれば、侍ふ人々もこしらへわびつゝ、心ほそう思ひあへり。

都の方では、源氏からの御手紙を、此處でも彼處でもござらになりながら、御心をみだしてゐる人が多くあつた。その中でも二條院にゐられる紫上は、御手紙をござらになつたまま、泣き伏して床から起きあがりなさらぬ。たいへん悲しいやうに思ひこがれてゐられるから、侍女の人々も何とすかしてよろしいか、途方に暮れながら、心淋しく思つてゐた。

○もてならし給ひし——
源氏の君が手馴してゐられた。
○今は——もう今となつてはだめであると。
○世になくなりたらむ人の云々——紫上は、源氏が死んでしまはれた人のやうに歎いてゐらつしやるから。
○かつはゆゆしう——一方では不吉なやうである

もてならし給ひし御調度ども、弾き鳴らしたまひし御琴、ぬぎ捨てたまへる御衣の匂ひなどにつけても、今はと世になくなりたらむ人のやうにのみ思したれば、かつはゆゆしうて、少納言は、僧都に御祈禱の事など聞ゆ。二かたに御修法などせさせ給ふ。かつはかく思しなげく御心を静めたまひて、おもひなき世にあらせ奉り給へと、心苦しきままに祈り申し給ふ。

紫上の身邊には思ひ歎きのたねばかりが焼つてゐる。先づ嘗て源氏の君が使ひ慣れてゐらつ

と、少納言の思ふのである。
○少納言——乳母。
○僧都——北山の僧都。
○紫上の伯父にあたる。
○二かたに——二様の趣意にて、源氏の爲めと、紫上のためと。
○心苦しきままに——僧都は紫上が氣毒でたまらないから。

しやつた道具だとか、弾き鳴してゐらつしやつた御琴、又は脱ぎ捨てて行かれた着物の色つやなどについても、嗚呼さては、源氏の君と再び相逢ふことが出来ないのであると、恰も源氏は死んでしまつた人のやうにばかり、紫上は歎いてゐられた。このさまを見てゐた乳母の少納言が思ふやう、紫上はあまりに歎いてゐられるので氣毒である。けれども他の一面から考へるならば、源氏の君の爲めにも不吉なことである。このまま捨て置くわけには行かぬといふので、北山の僧都に御祈禱をしてもらふことを依頼した。

僧都は源氏の不吉のないやうにと祈るばかりでなく、二やうに分けて行つたのである。他の一方では、紫上が斯く歎いてゐられる御心を静めて、やがて何の心配苦勞もない境遇になられるやうにと、僧都は氣毒であつたからお祈り申した。

「世になくなりたらむ」の句は、岷江入楚や萬水一露には、「世になからん」とあり、本書は首書本や湖月本によつた。

又本書の「おもひなき世にあらせ給へと」のところは首書本によつたが、湖月抄には、「なぐさめ、又もとの如くに歸り給ふべきさまになど」となつてゐるが、これは宣長が玉の小櫛に「此下の文、湖月の本はわろし、其故は、源氏君の御身の祈の事は、上に御いのりの事など聞ゆとある、是なれば、又ここにいふべきにあらず、かつはかくといふより下は、もはら紫上の御身の祈り也、かつはといへるに心をつくべし。他本どもの文は四の巻に出せるが如し」とあるよつて、本書は首書本によつた。

○御宿直物——夜具寝衣など。

○縁——堅織(カタオリ)の約、こまかに織りたる絹布、地薄くして夏用ふ。

○さま變りたる心地——源氏は只今無位無官でゐられるから、無紋の縁で作らねばならぬので、さまかわりたる心地がする。

○いみじき——いみじく悲しき。

○さらぬ鏡——さきに源氏が、身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影ははなれじ」とよまれた歌をさす。

○げに身に添ひ——なるほど歌の通りに、君の面影は目の前をお離れにならないが、それも正身でないから何の甲斐もない。

○出で入り——源氏が入りなされた部屋。

○真木柱——檜の柱。

○物をとかう思ひ云々——

！物事をいらくと思ひめぐらす思慮ある人。
○世にしほじみぬる齡の人——浮世の辛苦をなめつくした苦勞人でも。

○ひたすら世に——死んでしまひ、すつかりこの世にない人であるならば。

○言はむ方なくて——言ひやうもないほど残念であつても、だん／＼とその残念さを忘れることもあらう。

○忘草も生ひ云々——忘れるであらうの意。

○聞くほどは——須磨と聞いただけでは近いやうであるが。

○つきせず——悲しみがはてしない。

須磨

五二〇

旅の御宿直物など、調じて奉りたまふ。縁の御直衣指貫、さま變りたる心地するもいみじきに、「さらぬ鏡」とのたまひし面かげの、げに身に添ひ給へるもかひなし。出で入り給ひしかた、寄り居給ひし真木柱などを見給ふにも、胸のみふたがりて、物をとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬる齡の人だにあり。まして馴れむつび聞え、父母にもなりてあつかひ聞え、思し立てならはし給へれば、俄に引き別れて、戀しう思ひ聞え給へることわりなり。

紫上は旅の須磨にゐられる源氏の君がお使へになる夜具類を新調して送られる。又縁の直衣や指貫をも送られた。今は無位無官である源氏の君のこととて、直衣なども無紋のもので作られたので、それを見るにつけても、昔とは變つてゐるので、大へん物悲しいのであつた。その上、源氏の君が嘗て、「身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影ははなれじ」とあなたにさばから少しも去らない鏡、その鏡に映つた我が源氏の姿は、あなたの傍を少しも離れないでせう。假令、我が遠く須磨に去るとしても」といふ歌を紫上に残して行かれたが、その當時の御姿が、なるほど只今も紫上の身邊につき添うてゐる。けれどもこれは、眞の源氏の君ではなくして、幻影にすぎないのだから仕方がない。

源氏がよく出入なされた部屋、或は又、君が寄りかかつてゐられた真木柱などをごらんになるについても、紫上はただもう胸が塞るのである。物事をいらくと思案したり、世の中の憂さ辛さなどをよく経験した相當の年齢の人でも、こんな場合にはいたく歎くのである。ましてや紫上は源氏の君に、日頃馴れ睦びてゐられたのであるし、源氏も亦、父や母のやうな立場になつて、世話をしたり、養育の任にあたつてゐられたのであるから、その源氏に急にお別れになつた紫上が、君を戀しうお慕ひなされるのも無理からぬことである。

ひたすら世になくなりなむは、言はむ方なくて、いふかひなきにても、やう／＼忘草も生ひやすらむ。聞くほどは近けれど、いつまでと限ある御別にもあらぬをおぼすに、つきせずなむ。

死んでしまひ、この世に全く居ないのならば、言ひやうも無いほど残念であり、何とも詮方ないことであるが、それでもだん／＼とその悲しみを忘れるやうにもなるであらう。然し生別は死別よりも更に悲しいのである。源氏の行つてゐられる須磨の地は、聞いただけでは、ほんの隣國のやうに近う聞えるけれども、君とお別れしてゐるのは、何時までといふ期限もあるものでないからして、このことを思しめされると紫上の悲しみは、とめどもないものがある。

○忘草——菅草(クワンザウ)のことである。山野の草叢の間に自生せる宿根草にして、早春舊根から群り生ず、葉の形は菖蒲に似て、表裏の區別明かである。暑き夏の野に長さ二三尺の

須磨

五二一

花莖を出し、その先端に百合の如き花を開く。

萬葉集品物解に、「和須禮草といふは、文選稽康が養生論に、萱草は憂を忘るといへるは、その花の美しきを見てわが憂思をわするよしなりといへり、此説によりて出来たる名なるべし」と。

○入道の宮にも——藤壺も東宮の御事どもを思ふにつけ、源氏の請居を歎きなさるゝことが殊に深い。
○御宿世の程——藤壺が源氏との因縁關係のこと。主として東宮の生れたことをさす。
○物の聞えなど——世間の評判を憚るために。
○少し情ある氣色——源氏に對して、少しでも情あるさまを見せたならば、それに就いて世人が感づき、批難の聲も起るであらうと。
○あはれをも多う——源氏の藤壺を切に思ひなされるあはれなさまをも、大抵そしらぬ顔で過し。
○すく／＼しうもてなし——なされたくもてなし

入道の宮にも、春宮の御事により、思し歎くさまいとさらなり。御宿世の程を思すには、いかゞ浅くは思されむ。年頃はたゞ物の聞えなどのつつましさに、少し情ある氣色見せば、それにつけて人の咎め出づる事もこそとのみ、ひとへに思し忍びつつ、あはれをも多うごらんじすぐし、すく／＼しうもてなし給ひしを、かばかりにうき世の人ごとなれど、かけてもこの方には言ひ出づる事なくて、止みぬるばかりの、人の御おもむけも、あながちなりし心の引く方に任せず、かつはめやすくもて隠しつるぞかしと、あはれに戀しうもいかゞ思し出でざらむ。御返も少しこまやかにて、このごろはいとど、

しほたるることをやくにて松島に年ふるあまもなげきをぞつむ

藤壺入道の宮も、東宮の御事どもを考へるについては、源氏の君の須磨に請居してゐられる

す。つれなくすくす。
○かばかりにうき世の——かほどまでうるさい世間の人の口でも、密通の一件だけは、何の噂にもなることなくして過ぎたほどの。
○人の御おもむけ——源氏の君の注意。
○あながちなりし——元來、源氏は情のためには向ふ見ずな御性格であつたが、我との間に於てだけは、世間體をよくかへり見て、よく熱情を抑へてゐられた。
○かつはめやすく——なほ又自分藤壺も、世間體をよくもて隠した。
○しほたるることを云々の歌——補欄参照。

のを歎きなさることが殊に甚だしい。又二人の間に予までなした因縁關係を思へば、源氏の君のことを、どうして一通りにお思ひなさることがあらう。ここ數年來といふものは、世間の噂などが遠慮せられたので、源氏に對して少しでも愛情あるさまを外面にあらはしたならば、それからすぐに、世人からかれこれの批難もでるであらうと、そればかれを心配し、ひたすら吾の情を抑へて、源氏の愛の心も、多くの場合は素知らぬさまで過し、なさない冷かな態度でゐられた。

斯くばかりにうるさい世間の口であつたが、二人のかうした關係のことどもを、嘗ても言ひ出すものは無くして、事なくすんでゐた。これも源氏の君の注意が行届いてゐた爲めで、君の情のためには向ふ見ずにやり通す御性格をも、よく抑へてゐられた爲めである。又藤壺の方でも世間體よく、この事を隠してゐたからであると、藤壺の宮は、源氏の君のことどもを、どうしてあはれに戀しう思ひ出しないであらうか。ありし日のことどもを思ひ出でて、御返事も、今度は少し丁寧にお書きになつた。その消息の一節に、「このごろは一層に、

しほたるることをやくにて松島に年ふるあまもなげきをぞつむとあつた。

○しほたるることを云々の歌——松島に年久しく住んでゐます蟹(即尼の私)は、潮水に濡れるのを自分の仕事として、常に敷いてゐますの意。潮水にぬれるとは、泣いて涙でぬれることをさしてゐる。又「なげき」に「木」をかけ、「やく」は「役」と「焼」とをかけてゐる。

かんの君の御かへりには、

「浦にたくあまだにつつむ戀なればくゆるけぶりよ行く方ぞなき
更なる事どもはえなむ」とばかり、いささかにて、中納言の君の中にあり。

思し歎くさまなど、いみじくいひたり。あはれと思ひ聞え給ふしくも
あれば、うちなげかれ給ひぬ。

〔補〕 尚侍のかみである朧月夜の君からの御返事には、

浦にたくあまだにつつむ戀なればくゆるけぶりよ行く方ぞなき

とだけ申しあげます。その他、今更わかりきつてゐること、須磨に去られた君が戀しいとか、
満居のさまはお淋しいだらうといふことは、この際申上げません」とだけ、ほんの短い手紙で、
それも中納言の君の返書の中に巻き込めてあつた。中納言の君の返事の中には、朧月夜の思ひ
歎いてゐられるさまがたいへん書かれてあつた。これをごらんになつた源氏の君は、ああ、さ
うでもあらうと可愛相に思しめされる點もあつたからして、ついなげき悲しみなかつた。

〔補〕 ○浦にたくあまだにつつむ云々の歌——須磨の浦にゐられる源氏の君でさへも、胸に秘密と
してゐられ戀でありますから、人目のはげしい都にゐる私は、胸に惱しく戀ひ思ふばかりで、
その思をどこへもはらすことが出来ない苦しさになります。あまを源氏に比したものとす。
の歌についてはまだ他の意に解したのものもある。

○かんの君——朧月夜。
○浦にたくあまだに云々の歌——補欄参照。
○更なる事どもは——今更わかりきつてゐること、即ちあなたが須磨に去られて淋しいとか、満居のお淋しさなどは、申上げないで省きます。
○中納言の君の中にあり——女房中納言の君の手紙の中に。
○思し歎くさま——中納言の返事の中には、朧月夜の悲歎のさまが大へん書かれてあつた。
○あはれと思ひ——源氏の心である。

姫君の御文は、心殊にこまやかなりし御返りなれば、あはれなること多く
て、

〔補〕 うら人のしほくむ袖にくらべ見よなみちへだつる夜のころもを
物の色し給へるさまなど、いと清らなり。

〔補〕 紫上から来た返書は、嘗て源氏の君から格別に心をこめて書き送られた手紙の返事であるだ
けに、源氏の君がお読みになつても、しみんと心にしみるやうなことが澤山書かれてある。
その中に紫上の歌として、

うら人のしほくむ袖にくらべ見よなみちへだつる夜のころもを

とある。なほこの返書と共に、源氏の君の許へ送られた夜の料としての衣類、夜具などの染め
色の具合などは、頗る美しく出来てゐる。

〔補〕 ○うら人のしほくむ袖云々の歌——浦人は源氏をさし、夜の衣は紫上自身の夜の衣をさす。
歌の意は、あなた須磨の浦人が、潮くむために濡れてゐるその袖と、あなたのところとは遠く
隔つてゐるこの私が、孤閨に泣いてゐる涙の袖と、どちらの濡れやうが甚しいか比較になつて
ごらん下さい。それは私の方がひどうございます。

何事もらうくじう物し給ふを、思ふさまにて、今は事毎に心あわただし

○姫君の御文——紫上から源氏のもとへ送られた返書には。
○心殊にこまやかな云々——心をこめて書かれた、源氏の君の御手紙に對する返事であるから。
○うら人のしほくむ云々の歌——補欄参照。
○物の色し給へるさま——夜具や衣類などの色の染め具合など。前の歌に「夜のころも」とあつたから、それをうけて、單に物といつたのである。

○何事もらうくじう——何でも巧者でござるこ

とは。
 ○思ふさまにて——源氏の君の理想どほり。
 ○今は事毎に心あはたしう云々——今では事毎に心せはしく外の女に通ふといふことも無く、紫上とひつそりと暮して行かれることをお考へになると。

○なほ忍びてや迎へましと——やつぱりこつそりと、彼の紫上を迎へ取らうかと。

○なぞや——どうしてそんな彼女を迎へるなどのことが出来ようか。

○かくうき世に——こんな憂世にどうかして、今までの罪障なりとも亡ぼさう。

○大殿の若君の御事など——大殿左大臣邸からの返事の中には、夕霧のこゝろまでが書かれてあるの。
 ○おのづから——自然と

う、行きかかづらふ方もなく、しめやかにてあるべきものと思すに、いみじう、口惜しう、晝夜面影におほえて、堪へがたく思ひ出でられ給へば、なほ忍びてや迎へましと思す。又うち返し、なぞやかかくうき世に罪をだに失はむと思せば、やがて御精進にて、旦暮行ひておはす。

紫上は何事についても巧者であるのを思ふについても、源氏の君は、只今は事毎に心忙しいこともなく、女のために心をとらはられることもなく、まことに理想通りな閑静なさまであるのを思ひなされる。それについても、紫上と遠く離れてゐるのが、ひどく残念で、夜となく晝となく、彼女の幻影が見えて、何とも耐へられないほど思ひ出だされるので、やつぱりこつそりと彼女をこの須磨の地に迎へてしまはうかとまでもお考へになつた。

然し又、その心をひつくり返して、どうしてそんな女を迎へることが出来ようか。かうした浮世に於ては、せめて今までの罪障をなりとも亡びてしまひたいと考へられたからして、すぐに精進潔齋して、日夜佛道の勤行をなさる。

大殿の若君の御事などあるにも、いとど悲しけれど、おのづから逢ひ見てむ。たのもしき人々ものし給へば、後めたるはあらずと思しなされるは、なかくこの道の惑はれ給はぬにやあらむ。

親子再會の機もあるであらう。
 ○たのもしき人々——たよりとなる祖父母などがみられるから。
 ○この道——この子を思ふ道にはの意。「このしに」は「子の」意も含まれてゐるか。

○まことや——本當にまあ、餘り事が多つたのでつい書落してしまつた。
 ○伊勢の宮——伊勢に只今ゐらつしやる六條御息所。
 ○かれよりも——六條御息所のもともからも、わざ／＼御使をつかはしてお訪ねなされた。
 ○浅からぬ——御息所からの手紙のおもむきは。
 ○いたり深く——思慮経験の深いところが見え

補

左大臣邸からの御返筆の中には、夕霧の君のことが書いてあつた。それを讀むについても、まことに悲しいのであるが、然し自然と親子再會の機もあるだらうとさほど君は悲しみなされない。又、夕霧の身には、祖父母といふたよりになる後見の人もあるのだから、そんなに心配でないとお考へになる。兼輔朝臣は、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬる哉」と詠んで、親は子を思ふためには盲目となつて迷ふと言つてゐるが、源氏の君は女の道には迷ひなされるが、この道の方面(子を思ふ道)では、却つて惑ひなさらぬやうである。

○この道——これは右にあげた兼輔朝臣の歌の意を言つてゐるものである。この歌は後撰集卷十五、雜一に出でゐる。

まことや、騒しかりしほどのまぎれに漏してけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり。かれよりもふりはへ尋ねまぬれり。浅からぬ事ども書き給へり。言の葉づかひなどは、人より殊になまめかしう、いたり深く見えたり。

本當にまあ、あまりに事がごた／＼と多つたので、つい書落してしまつた。源氏の君からは、彼の伊勢に行つてゐられる六條御息所の許へも、お使をつかはしなされた。彼の御息所のもとからも、わざ／＼源氏の君の方へお使が訪ねて参つた。その使者のもたらした御手紙には情深い事どもが書いてあつた。その書中の語句といひ、筆蹟といひ、普通一般の人よりは殊に艶麗になつてゐるし、思慮経験深い人であるやうに見えた。

○なほ現とは——どうしてもやつぱり現實のこととは思はれない、君の須磨の佗住居のことを承るについで。

○明けぬ夜の心惑ひか——まだ夢でも見てゐるかと思ひ迷ひます。

○さりとも年月は隔てたまはじ——然し須磨の佗住居をしてゐられるのも、長くはありますまいと御推察申すにも。

○罪深き身のみこそ——前世からの罪障深い私の身ばかりは、あなたと再會する期はむづかしいであらう。

○うきめかるいせをの云々の歌——補欄参照。

○多かり——こまやかに書きつけてあつた。

○伊勢島やしほひ云々の歌——補欄参照。

○物をあはれと——御息所が物思ひながら書きなされたので、筆を置いては書き、又書きつけては

れたのである。

○唐紙——唐土から来た紙。

○あはれに思ひ——源氏は自分の心に、しみんと可愛ゆく思ひなされた御息所を。

「なほ現とは思ひ給へられぬ御住居をうけ給はるも、明けぬ夜の心惑ひかとなむ。さりとも年月は隔てたまはじと、思ひやり聞えさするにも、罪深き身のみこそ、又聞えさせむこともはるかなるべければ、うきめかるいせをのあまを思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にてよろづに思ふ給へみだるる世の有様も、なほいかになりはつべきにか」とおほかり。

伊勢島やしほひのかたにあさりてもいふかひなきはわが身なりけり物をあはれと思しけるままに、うちおきく書き給へる、白き唐紙四五枚ばかりをまき續けて、墨つきなど見どころあり。

御息所から君の許に達した手紙の中には、「君には須磨の地に佗住居をしてゐられると承つては、どうもそれが眞實なこととは思はれません。まだ夜の中の夢でも見てゐるやうに思はれます。然し鄙の佗住居をなさつてゐられるとしても、長い歳月の間、さうした生活をなさるのではないだらう、間もなくお歸京なさるものと御推察申します。がそれについても、前世からの罪障深い私の身の上こそ、いつまでこの地にゐるといふ限りもなく、いつになつたら君に再會することが出来るやら、とてもわかりません。さて一首の歌、

うきめかるいせをのあまを思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にて

萬事何事についても、たゞ思ひ迷ふばかりである今の世の有様は、今後一體どのやうになつてしまふのでありませうか」などと、書中の文句は、こま／＼と多く書かれてあつた。終りに一首の歌、

伊勢島やしほひのかたにあさりてもいふかひなきはわが身なりけり

この手紙のさまを見ると、御息所が物思ひながら書きなされた爲めに、書いては止め、止めては又書きつけてなされた様子がよくわかる。白き唐紙の紙を四五枚ばかり書き續けて書かれてゐるが、その墨つきなどはなか／＼立派なところがある。

○うきめかるいせを云々の歌——須磨の浦にて藻鹽たれながら佗びてゐらつしやる君よ。伊勢にて浮きめを刈りつつ嘆きに沈んでゐるわが身の上に同情して下さい。うきめは浮布に憂目をかけ、伊勢の國には男の髪がゐたといふので伊勢をのあまといふ。ここでは御息所をさしてゐる。○伊勢島やしほひのかたに云々の歌——志摩の國の潮干潟をあさり歩いていふ甲斐もない(貝もないの意をかけてゐる)のは、私の身の上であります。伊勢島といふのは、今の志摩の國の古名である。志摩の國は半島及び屬島よりなる故に言ふ。

あはれに思ひ聞えし人を、ひとふしうしと思ひ聞えさせし心あやまりに、この御息所も思ひうんじて、別れ給ひにしと思せば、今にいとほしう辱き

ものに思ひ聞えたまふ。

○ひとふしうしと——生靈の一件だけは恨んだのが自分の誤りで。
○うんじ——鬱しの音便。
○辱きものに——勿體ない。恐れ多い。源氏が御息所を思すのである。

○御使さへ——御息所からの使者までがなつかしくて。
○二三日据ゑ——二三日逗留させて。
○氣色ある——様子のよい。

○さぶらひの人——單に「侍(サブラヒ)」といふに同じ。御息所の殿中に伺候する人。
○かやうの人も——こんな外から来た使者のやうな人でも、自然源氏に接近することが出来て。

元來、源氏の君は最初、この御息所を可愛ゆく思ひなさつてゐらつしやつたが、それが彼の生靈の一件からして、厭な方だと疎み申したのである。それも今となつて思へば源氏自身の誤りであつた。我に疎んぜられた彼の御息所も思ひふさいで、遂に遠く伊勢の地に去つてしまひなかつたのであると、源氏も考へなされると今でも御息所が氣毒でもあり、又あのやうな身分の方を、斯くうとんじたのが恐れ多く思しめされる。

折からの御文、いとあはれなれば、御使さへむつまじうて、二三日据ゑさせ給ひて、彼處の物語などせさせて聞しめす。若やかに、氣色あるさぶらひ人なりけり。かくあはれなる御住居なれば、かやうの人もおのづから物遠からで、ほの見奉る御さまかたちを、いみじうめでたしと涙おとしけり。

この折から御息所から到着した御手紙のおもむきが、なかく感深いものであつたから、源氏の君は、これを持參して來た使者までなつかしくなり、二三日の間源氏の邸に逗留させられて、彼の伊勢の地の有様を物語らせてお聞きになる。

この使者はまだ若々しい男で、人柄もよい侍であつた。源氏の君はかういふ簡粗な御住居の中にもゐられるので、このやうな身分卑しい使者でありながら、自然あまり隔たらないで、君にお話申しあげることが出来、ほのかに見奉つた源氏の御姿のたいへん立派でゐられるのを見て、

ただ／＼感涙を落してゐた。

御かへり書き給ふ言の葉思ひやるべし。かく世を離るべき身と、思ひ給へらましかば、おなじうは慕ひ聞えましものをなどなむ。つれ／＼に心ほそきままに、

伊勢人のなみのうへ漕ぐ小船にもうきめはからでのらましものを
あまがつむなげきの中にしほたれていつまで須磨の浦とながめむ
聞えさせむことの、いつも侍らぬこそ、盡せぬ心地し侍れ」などぞありける。かやうに何處にも、おほつかかなからず聞えかはし給ふ。

源氏の君がお書きになつた、御息所への返書の文句は、ここに一一書かなくても想像が出来ませう。その中の一節に、「かく都から離れて須磨の地に來なければならぬことと、先きから分つてゐたならば、どうせ同じやうに都から離れるのであるから、いつそのこと貴女のあとを慕つて、一緒に伊勢の方へ行つたがよかつたなどと、このごろの退屈まぎれに心細くて、そんな空想を描いてをります。

伊勢人のなみのうへ漕ぐ小船にもうきめはからでのらましものを
あまがつむなげきの中にしほたれていつまで須磨の浦とながめむ

○御かへり——御息所のもとへ、源氏が返事をお書きになつた。
○おなじうは慕ひ——こんな都を離れて須磨の地に來るやうならば、貴女のあとを慕つて伊勢へ行けばよかつた。
○つれ／＼に云々——無聊であるので、自然そんなことを考へます。
○伊勢人のなみの云々の歌——補欄参照。
○あまがつむなげき云々の歌——補欄参照。
○聞えさせむことの——再び相違つてお話し申上げる事も、いつも期し難いのが堪へがたい心地がいたします。
○聞えかはし給ふ——手紙のやりとりをなさる。

再び相逢つてお話し申しあげるのが、いつとも期しがたいのが、たへがたい悲しさがいたしま
す」などと書いてあつた。

源氏の君はかやうに丁寧な消息を、所々の方とやりとりなされた。

○伊勢人のなみのうへ云々の歌——「うきめをからで」は「浮布」で、「め」は海布である。即ち
憂目は遣はないでの意。歌の表の意は、憂き目を見ないで伊勢の國人の波の上漕ぐ小舟に乗れ
ばよかつたのにしまつたことをしたといふので、裏の意は、このやうな須磨の地に來て心憂い
思ひをするのであつたなら、いつそのこと貴女といつしよに伊勢に下つたらよかつた。さうす
れば心憂いこともなかつたであらうといふ意。

なほこの歌は風俗歌の「伊勢人は、あやしきものをや、なとてへば、小舟に乗りてや、波の上
をこぐや、波のへをこぐや」とあるのを引いてゐる。

○あまがつむなげき云々の歌——蟹が投木を捨て積んでゐる、こんな須磨の浦邊に泣き悲し
みながらいつまで住んでゐることでありませう。貴女は私がほど無く歸京するだらうと仰せら
れますが、とても歸るなどの期はございせん意。なげきに投木をかけ、須磨に住まをかけ
てゐる。

花散里も悲しと思しけるままに、かき集め給ひける御心々見給ふに、をか
しきも、めなれぬ心地して、いづれもうち見給ひつつ慰め、かつは物思ひ

○花散里も悲しと——源
氏が花散里を悲しき、い
とほしきものと思ひなさ
るので。

のもよほしぐさなめり。

荒れまさる軒のしのぶをながめつつしげくも露のかかる袖かな

とあるを、げに葎より外の後見もなきさまにて、おはすらむと思しやりて、
長雨に築土とところ／＼崩れてなど聞きたまへば、京の家司のもとに、仰せ
つかはして、近き國々の御庄の者などもよほさせて、仕うまつるべきよし
のたまはす。

源氏の君は、花散里をも悲しきいとほしい者とお考へになつたからして、花散里のもとから
送られて來た返書の中に、書きつらねてある御志どもをごらんになると、こまやかに述べられて
あるのが面白くもあり、又彼女は生來こんなに物を言ひあらはしなならない御性格であるのに、
今に限つてかく書かれたのかと思ふと珍しくも思なり、どのところもうち眺めながら心を慰め
られた。とはいふものの他の一面からは、かうした手紙を読むのは、君の物思ひのたねともな
るやうであつた。又彼女の歌に、

荒れまさる軒のしのぶをながめつつしげくも露のかかる袖かな

といふのがある。なるほど我が茲處に來てからといふものは、彼女の世話をするものとは、
庭に生え茂つてゐる葎より他にないだらう。さうした佗しいさまでゐられるのを推察なされる。

○かき集め給ひける御心
云々——花散里が源氏へ
の返事に、いろ／＼な感
想ども書き入れたさつた
御心どもを。

○見給ふに——源氏の君
がごらんになると。

○をかしきも、めなれぬ
心地して——元來、花散
里はあまり物を言ひあら
はしなならない御性格で
あるのに、このたびは感
深きさま／＼のことが書
かれてあるので、源氏が
その手紙をおよみになる
と、趣味もあるし、又珍
しくも思はれる。

○かつは物思ひの——け
れども一方では、それが
物思ひのたねとなつた。

○荒れまさる軒の云々の
歌——補欄参照。

○築土——花散里邸の土
壁。

○御庄の者など——源氏
御領地の男どもを呼びあ
つめて。

○仕うまつるべきよし——

―修理してあげるやうに
と命ぜられた。

○かんの君―臘月夜の
君。

○人わらへに云々―人
わらへは「人笑はれしで、
外聞を取ちてひどくがっ
かりしてゐられたが。

○大臣いとかなしうし給
ふ―父右大臣が、ひど
く可愛がりなざる君なの
で。

○宮にも―弘徽殿太后
にも。

○内にも―帝即ち朱雀
院にも奏上しなかつたか
ら。

○限りある―際立つ
た。

○おほやけさま云々―

補欄に詳し。
○かのにくかりし故こそ
―弘徽殿太后が源氏を
憎みなさつてゐられた折
からとて、そのために密
通の一件で、臘月夜は出
仕をも止められるといふ
やうな厳格なことにもな
つた。
○心にしみしことのみ―
―源氏のことから離
れないのを。

○参り給ふ―臘月夜の
君が宮中に出仕なされ
た。
○いみじかりし御思ひの
云々―朱雀院は、たい
へん懸ひ焦れてゐられた
揚句であるから。
○例のうへにつと―以
前のやうにお側にづつと
彼女を侍らせなかつて。
○御さま容貌も―帝の

須 四

さうして又、この頃の長雨で花散里の土塀のところへも崩れてしまつたなどとお聞きになつたから、源氏は都にゐる家司の者どもに仰せつけられて、都近くの源氏の御領地のものどもを呼び出して、こわれた土塀などは修理するやうに仰せつけられた。

○荒れまさる軒の云々の歌―源氏の君が御退去になつてからは、私の住居は益々荒廢して行きます。かうして荒れ果てて行く軒の忍草をながめながら、君のことどもを思つてゐると、吾が袖にはしげくも涙の露がかかります。ここの露は忍草の縁語である。

かんの君は、人わらへにいみじう思しくづほるるを、大臣いとかなしうし給ふ君にて、切に宮にも申し、内にも奏し給ひければ、限りある女御、御息所にもおはせず、おほやけさまの宮仕と思しなせり。又かのにくかりし故こそ、厳しきことも出て來しか。赦され給ひて、参り給ふべきにつけても、なほ心にしみしことのみぞあはれにおほえ給ひける。

尚侍のかみである臘月夜の君は、源氏の君との一件があつてからといふものは、出仕もとどめられたので、外聞も恥しくてひどくがっかりと打ち沈んでゐられる。ところが父の右大臣は殊に愛してゐらつしやつたので、このさまを見て氣毒に思しめされ、父君はこの際、弘徽殿太后にも申しあげられ、朱雀院にも奏上なまつて、娘臘月夜の罪を赦して下さるやうに願ひなまつた。ところがかんの君は、際立つた立派な女御とか、御息所といふわけでもなく、ただ普通

五三四

通に奉仕してゐた女官に過ぎなかつたと思召されて、宮中出仕を再びお許しになつた。又弘徽殿太后がひどく源氏の君をお憎みなされたから、その爲めに臘月夜の上にも嚴重な處罰も出てきたのであつた。さていよく臘月夜の君が罪を赦されて出仕なざるについても、やはり心にしみ込んでゐる源氏の君のことどもが、忘れられないであはれに思ひ出だされるのであつた。

○おほやけさま云々―臘月夜が女御、御息所といふやうな身分であつたならば、立派な帝の寝に侍る女官であるから、そのやうな身分でゐながら、源氏の君と關係するといふやうなことがあれば、それこそ許すべからざることであるが、臘月夜は單に内侍といふ普通の女官の身で宮中に仕へてゐたときに、源氏との關係があつたのだから、さほどまで咎めるにも及ばないといふのでお許しになつたのである。

七月になりて参り給ふ。いみじかりし御思ひの名残なれば、人の誹謗もしろし召されず、例のうへにつとさぶらはせ給ひて、よろづにうらみ、かつはあはれに契らせ給ふ。御さま容貌もいとなまめかしう清らなれど、思ひ出づる事のみ多かる心の内ぞかたじけなき。

七月になつてから臘月夜の君は宮中に参内なされた。朱雀院からの君寵頗る厚いものがあつたことであるから、帝は人々の誹謗などには頓着なく、以前のやうに彼女を御傍にづつと侍はせ

須 四

五三五

切りで、いろ／＼さま／＼と怨言を述べられたり、或は又、眞心をこめて行末のことどもをお契りになるのである。

そこで彼女は思ふやう、帝は言語行爲すべてが御親切である上に、その態度、御容貌も頗る優美にてさつぱりとしてゐらつしやるが、やはり自分の内心には源氏の君のことどもが忘れられず、時々思ひ出だされるので、これだけは帝に對してまことに恐縮であると思つてゐる。

御遊のついでに、「その人なきこそいとさう／＼しけれ。如何にまましてさ思ふ人多からむ。何事にも光なき心地するかな」とのたまはせて、「院のおぼしの給はせし御心にも違へつるかな。罪得らむかし」とて涙ぐませ給ふに、え念じ給はず。「世の中こそあるにつけても、味氣なきものなりけれと思ひ知るままに、久しく世にあらむものとなむ更に思はぬ。さもありなむに、いかがおぼさるべき。近きほどの別れに、思ひおとされむこそねたけれ。生ける世にとは、げに善からぬ人の言ひ置きけむ」と、いと懐しき御さまにて、物をまことにあはれと思し入りて、のたまはするにつけて、ほろほろとこぼれ出づれば、「さりや。いづれにおつるにか」との給はず。

朱雀院が管絃の遊びを催しなされるについても、すぐ源氏の君のことを思ひ出して、「斯うした

言語行爲がかく親切である上に、その容姿もといふ意。

○思ひ出づる云々——君の寵愛を受けながら、源氏のことどもを思ひだされる。

○かたじけなき——帝に對して恐れ多い。

○御遊——管絃の遊び。

○その人なきこそ——源氏の君の居ないのが物足らず淋しい。自分でも斯うであるからして、ましてどのやうに強く源氏を思つてゐる人が他にあることだらう。

○院のおぼしの給はせし——先帝桐壺院の御遺言にも叛いてしまつた。

○え念じ給はず——臘月夜の君は悲しきに堪へられず涙なされる。

○あるにつけても云々——斯うしてゐるについても、何時どうなるかわからないから、つまらぬものである。

○さもありなむに——朕が亡くなるやうなことがあつたならば。

○近きほどの別れに云々——先頃源氏の君とお別れになつたほど、悲しまないだらうと思ふと妬ましい。

○生ける世にとは云々——拾遺集戀一、大伴百世の歌である。「戀ひ死なむ後は何せむ生ける身のためこそ人は見まくほしけれ」の引用したものと古注にいふ。

○げに善からぬ人の言ひ——死後は構はないといふのは、よくない人の言ひ残した歌であらう。

○ほろ／＼と——臘月夜がほろ／＼と涙を落すのである。

○いづれにおつるにか——私の爲めに落つる涙か、それとも源氏の君の爲めなのか。

遊びの場合に、源氏の君のゐらつしやらないのは物寂しいものである。朕が斯く思ふが、他の人々の中には、どんなに一層源氏の居られないのを寂しく思ふ人が多いであらう。源氏の君が居られないと、何事についても光榮のない心地がする」と仰せられる。さて又、「源氏の君を斯く須磨の地に遠行せしめたのは、故桐壺院の御遺言にも反したことであつた。この爲めに朕は罪業を得るであらう」と仰せられて涙ぐみなされる。するとそれを見てゐた臘月夜の君も、悲しさに堪へられないで泣きなされる。

朱雀院は更に言葉をつづけて、「世の中に斯うして生きながらへてゐても、いつどのやうになつて死ぬか分らないものであるから、世の中も案外つまらないものであると、悟りなされるについても、朕は長く世に生きてゐるものとは決して考へない。もし朕が亡くなつたときには、お前はどのやうに思つて下さいますか。先日源氏とお別れになつたときのやうには思つて下さらないでせう。さう思へば嫉ましいことである。古人が「生ける世に云々」と詠んで、死後はどうでも構はないといふのは、實によくない人の言ひ残したものであつた」と、頗るなつかしい態度で、泌み／＼と物の哀れを痛感して仰せられるので、聞いてゐた臘月夜も、ほろ／＼と涙がこぼれ出たのであつた。これをごらんになつた帝は、「さては、そのこぼれる涙は、源氏の君がなつかしい爲めに落ちるのか、それとも朕の爲めであるか、どちらのために落ちるものであらうか」と仰せられる。

「生ける世にとは」の句については、古注のままに従つて置いたが、宣長の玉の小櫛には、「引

歌あるべし、いまだ思ひえず。河海に引れたる歌はかなはず、引歌知られざる故に、げにといふ意も聞えがたし」とある。

「今まで御子たちのなきこそさうさうしけれ。春宮を院のたまはせしやうに思へど、よからぬ事どもも出てくめれば、心苦しう」など、世を御心の外にまつりごちなし給ふ人々のあるに、若き御心の強き所なきほどにて、「いとほし」と思したる事も多かり。

朱雀院が思召されるには、「今になるまで我に皇子がないのは物寂しいことである。故桐壺院の仰せ残されて行かれたやうに、東宮冷泉院に、我の位を譲らうと思ふが、若しさうすれば、弘徽殿一派の反感を買つて、よくないことも起るであらうから、まことに心苦しいことである」などと仰せられる。

これも帝の御心に違つて萬機の政をとり行ふ弘徽殿一派の人々があつて、帝自身はまだ若年でみらせられるために、御心にも強い所がまだ出来ない折からなので、帝が「あの人をあのやうにしては可愛さうだ」と思しめられたことも多くあつた。

須磨には、いと心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、「關吹き越ゆる」といひけむ浦波、よるくはげにいと近く聞えて、またた

○御子たちのなきこそ——我に皇子の無いのこそ寂しいことだ。
○春宮を院のたまはせし——東宮冷泉院に桐壺院の仰せられたやうに位を譲らうと思ふが、さうすると弘徽殿方でいろいろとさまたげをするであらうから心苦しいと。
○世を御心の外に云々——萬機の政を帝の御心に違つてとり行ふ弘徽殿一派の人々があるのだ。

○心づくし——心の悶々するをいふ。古今集巻四に「木のまよりもりくる月の影みれば心づくしの

秋は来にけり」とある歌の詞を用ふ。

○關吹き越ゆる——續古今集巻十に「津の國須磨といふ所に侍りける時よみ侍りける、中納言行平」として「旅人の袂すしくなりけり關吹き越ゆる須磨の浦風」の歌を少しかへて浦波とつづけたもの。

○御前——源氏の。

○一人——源氏。

○浪ただこもとに——浪の音が高く近く聞えて、わが側に寄せてくるやうな心持がして。
○枕うくばかり——涙の多く出でたる形容。

くあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。御前にいと人づくなにて、うち休みわたれるに、一人目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、浪ただこもとに立ちくる心地して、涙おつとも覺えぬに、枕うくばかりになりけり。

須磨の地では、心を悶々せしめる淋しい秋風が強く吹き渡り、源氏の君のお住家は、海岸よりは少し入り込んだ所であるが、彼の在原の行平中納言が「旅人の袂すしくなりけり關吹き越ゆる須磨の浦風」と詠んだ浦風に吹き寄せられる浪は、夜毎にまこと近く聞えて、たぐひなく物哀なものは、かうした土地の秋であつた。

源氏の君の御前には、近侍の人々も少く、又それ等の人々も皆すつかり眠つてしまつてゐるときに、君ただ一人だけが眼をさまし、枕をそばだてて、あたりを吹いてゐる嵐の聲を聞いてゐらつしやると、波浪はすぐこの住家のところに押寄せてくるやうな心地がして、心もとなく淋しいことは云ひやうもないので、涙が落ちたかと思ふと、もう既に枕が浮くほどになつてゐた。

○枕をそばだてて——この句は、白氏文集卷十六にある、香爐峯下新ト山居、草堂初成偶題「東壁の題下によんだ白樂天の「日高睡足猶慵起、小閣重衾不_レ怕_レ寒、遺愛寺鐘_レ敲_レ枕聽、香爐峯雪撥_レ簾看、匡廬便是逃_レ名地、司馬仍爲_レ送_レ老官、心泰身寧是歸處、故鄉何獨在_レ長安」の詩によつたもの。○枕うくばかり——河海抄に「ひとりねの床にたまれる涙には石の枕もう

きぬべらなり」躬恒としてゐるが、これは六帖第五の部に載せられ、又夫木集にはよみ人知らずとなつてゐる。花鳥餘情には「なみだ川水まさればや敷妙の枕のうきてとまらざるらん」の歌を引いてゐる。これは拾遺集卷十九、雜戀に出てゐる。

琴を少し掻き鳴したまへるが、我ながらいとすごう聞ゆれば、ひきさし給ひて、

戀ひわびてなく音にまがふうらなみは思ふかたより風や吹くらむ

と謠ひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれであいなう起き居つつ、鼻を忍びやかにかみわたす。

源氏は琴を少し弾いてごらんになつた。自分が弾くのであるが、その音があまり凄絶に聞えるので、堪へられないやうになり、遂に弾く手をとどめて、一首の歌を、

戀ひわびてなく音にまがふうらなみは思ふかたより風や吹くらむ
と朗誦なされると、その聲であたりに眠つてゐた近侍の人々も目を醒し、君の音聲といひ、又歌といひ、まことに立派なものであるので、ただ感慨に堪へられず、何といふこともないが起きてゐて、すずり泣きをしながら、鼻をこつそりとかんでゐる。

戀ひわびてなく音に云々の歌——誰かが戀ひわびて泣いてゐるのによく似てゐるこの浦の浪の音は、我を戀ひ慕つてゐる人の住んでゐる方から風が吹いてくるからであらうの意。なほ

○戀ひわびてなく音云々の歌——補欄参照。
○人々おどろきて——「おどろく」とは目をさますこと。
○忍ばれで——源氏の御様子立派であるので、それに堪へ兼ねて、何といふこともなく起きてゐてすずり泣くのである。

古来の注釋書は、「戀ひわびてなく音に」は源氏の君の自ら泣きなきなさるものとしてゐる。

「げにいかにも思ふらむ。わが身ひとつにより、親兄弟かたとき立ち離れがたく、ほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへる」と思すに、いみじくて、「いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむ」と思せば、晝は何くれと戯れごとうちのたまひまぎらはし、つれづれなるままに、いろくの紙をつなぎつつ、手習をし給ひ。

「實に彼等は心中どのやうに思つてゐるであらう。彼等は各々の身分に應じて、親兄弟の住んでゐる家からは立ち離れがたく思うであらう。それをわれ源氏のために、懐しい故國の家から別れて、このやうな遠國にさすらひまどうて居るのだ」とお思しめされると、甚だ氣毒になつて、「自分が斯うして頗る思ひ悩んでゐる有様をしてゐては、彼等は一層心細く思うであらう」とお考へになつたからして、これからは、強ひて元氣なさまをなし晝の間はあれやこれやと戯談などを言つて、心の悲しみをあらはさないやうにし、徒然であるので、いろくの紙片を繋ぎ合せて、手習をなさる。

めづらしきさまなる唐の綾などに、さまざまの繪どもを書きすさび給へる、屏風のおもてどもなど、いとめてたく見所あり。人々の語り聞えし海山の

○げにいかにも思ふらむ——本當にこの人達は、心中如何に思ふだらうと、源氏の推察である。
○わが身ひとつ——われ源氏のために。
○ほどにつけつつ——この語は「親兄弟かたとき」の上につけて解くべし。
○かく惑ひあへる——源氏のために、斯く邊鄙な地に流浪してゐるよとお思ひになると。
○いみじくて——甚だ氣毒で。
○いとかく思ひ沈む——自分のふさいでゐるのを見て、彼等がかく思ひ沈むさまを。
○手習——何といふこともなく、楽しみに字を書くをいふ。
○唐の綾——唐のあやぎぬ。
○人々の語り聞えし——都にゐられた時分に、人

々が須磨などの様子を話し申したのを、どんなものかと遙に想像してゐられたのが。

○げに及ばぬ磯の——御目の前にごらんになつては、まことに言葉も筆も言ひあらはすことが出来ないやうな海岸の景色。

○になく——比類なく上手に。

○この頃の上手にすめる——當今の名人と呼ばれる。

○千枝、常則——畫家の名。

○作繪——墨がきの繪に彩色するをいふ。單に墨のみで書いたものを「墨がき」といふ。

○心もとながり——心そわ／＼として氣のせき立つをいふ。

○御有様に——源氏の様子に。

○世の物思ひ——故郷のことどもを忘れて。

有様を、遙に思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、になく書き集め給へり。「この頃の上手にすめる、千枝、常則などを召して、作繪仕うまつらせばや」と、心もとながりあへり。

【譯】 珍しい唐の綾帛などに、いろ／＼な景色の繪どもをなくさめに書きなされる。それを屏風のおもてなどに張られたときのさまなどは、本當に立派に出來た。

嘗て都にゐられた當時、人々が須磨など名所の風景を物語り申した時に、源氏は遙にどのやうなものだらうかと想像してゐられたのを、只今眼前にごらんになると、まことに想像以上で、言葉や筆も形容出來ないほど面白い海岸の景色である。源氏はこの風光を比類なく上手に幾枚となく書き寫しなされた。

これを見てゐた側近の人々は思ふやう、「當時代に於ける名畫家と呼ばれてゐる千枝だとか、常則といふやうな名人をお呼びになつて、源氏のお描きになつた墨繪に彩色を施させたいものである」と、心をそわ／＼させながら、せき立ててゐた。

【譯】 「人々の語り聞えし云々」の語は、若紫の卷に、人々から海山の名所を聴取されたことなどもさす。

懐かしうめでたき御有様に、世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕うまつるを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前枝の花いろ／＼咲き亂れ、

欠

P573~P574 振取
1952.12.17

○民部大輔——惟光。
 ○心からとこ世云々の歌——補欄参照。
 ○前の右近の丞——伊豫介の子。
 ○とこよ出でて旅の云々の歌——補欄参照。
 ○友まどはしては——友だちからはぐれては、どうして過されませうの意。「友まどはす」とは友にはぐれることをいふ。後撰集卷七、秋歌下に「聲立ててなきぞしぬべき秋霧に友まどはせる鹿にはあらねど」といふ。紀友則の歌の如きはその意である。

○親の常陸に云々——右近の丞は親が常陸介となつて下國したのにも随はないで、源氏の御伴にしたがつたのである。右近の丞が親は、桐壺帝崩御の翌年伊豫介より常陸介となつたのである。このこと關屋の巻の初めにでてゐる。

須磨



五四五

欠

1874-5-19-54

○したには思ひ碎く云々
——内心では思ひ悶える
こともあらうが、外面は
得意然としたさまで平然
として歩きまわった。

須 磨

五四六

かきつらねむかしのことぞおもほゆる雁はそのよの友ならねども
民部大輔、

心からとこ世を捨ててなくかりをくものよそにも思ひけるかな
前の右近の丞、

「とこよ出でて旅の空とぶかりがねもつらにおくれぬほどぞなくさむ
友まどはしては、いかに侍らまし」といふ。親の常陸になりて下りしにも、
誘はれでまゐれるなりけり。したには思ひ碎くべかめれど、ほこりかにも
てなして、つれなきさまにしありく。

源氏の君が、

はつかりはこひしき人のつらなれや旅の空とぶこゑのかなしき
と仰せられると、良清は、

かきつらねむかしのことぞおもほゆる雁はそのよの友ならねども
と詠む。すると民部大輔惟光は、

心からとこ世を捨ててなくかりをくものよそにも思ひけるかな
と詠む。すると又、右近の丞が、

「とこよ出でて旅の空とぶかりがねもつらにおくれぬほどぞなくさむ
友とはぐれては、どうして暮されませう。とても居られないでせう」といふ。この右近の丞は
親が常陸の介となつて下國した時も、誘ひ連れられないで、源氏のもとにまゐつたものであつ
た。彼の内心では思ひ悶えることもあるだらうが、外面だけは得意然としたさまで、平氣にし
て歩きまわつた。

○はつかりはこひしき人云々の歌——わが戀しい人は都にあつて思を旅の空に馳せながら泣
いてゐるであらうが、あの空に鳴いてゐる雁もわが都にゐる戀人と同じ仲間であらうか、旅の
空に鳴いてゐる聲がひどく悲しいものである。○かきつらねむかしの云々の歌——空に鳴いて
ゐる雁は昔からの友だちではないけれども、彼の鳴く音を聞くときには、あれやこれやといろ
／＼なことも一緒になつて思ひ出だされる。さては我が友のやうになつた。○心からとこ
世を捨てて云々の歌——「とこ世」とは絶遠の國土をいふ。自分の勝手な心で絶遠の國土から離
れて、漂泊の旅愁に泣いてゐた雁を、是れまでは自分と全然關係のないものと思つてゐたが、
思へば唯今の自分の身上であつた。我も自分と都を棄てて旅愁に泣いてゐるのであつた。
○とこよ出でて旅の空云々の歌——常世の國を出でて漂泊の旅愁にある雁も、仲間からはぐれ
ぬ間は安心なものである。それと同様に私どもも源氏の君に従つてゐる間は安心である。

○思し出で——源氏が。
○殿上の御遊——清涼殿

月のいと花やかにさし出でたるに、「今宵は十五夜なりけり」と思し出でて、

須 磨

五四七

でたび／＼催された管絃の遊。
○ところ／＼眺め給ふらむ——諸方の女房がたゞ、須磨の空を眺めて悵然としてゐるだらうと想像して。

○二千里外故人心——白氏文集卷十四にある「三五夜中新月色、二千里外故人心」の句をいふ。
○入道の宮——藤壺。
○霧や隔つる——九重に霧や隔つる雲の上の月をはるかに思ひやるかな」と賢木の巻に藤壺が詠まれた歌をさす。

○聞ゆれど——侍臣が。
○見るほどぞ——ばし云々

殿上の御遊こひしく、「ところ／＼眺め給ふらむかし」と、思ひやり給ふにつけても、月のかほのみまもられ給ふ。「二千里外故人心」と誦じ給へる、例の涙もとどめられず。入道の宮の、「霧や隔つる」とのたまはせしほど、いはむ方なく戀しく、折々の事思ひ出て給ふに、よよと泣かれ給ふ。

間もなく、月光が美しく上つてきたので、源氏の君は、「さて今宵は十五夜の月であつた」と思ひ出だされ、今宵の如きはさぞ清涼殿で管絃の遊びがあるだらうかと、過ぎし日のことどもが戀しく思はれるのである。又「所々の女房どもが、我の居るこの須磨の空を眺めてゐるだらう」と、御推察なさるについても、おのづと月のおもてが眺められるのである。白樂天が元稹を思つて作つた詩の句、「二千里外故人心」といふのを朗誦なさる。聞く者どもは例のやうに涙を止めず泣いてゐる。

又彼の入道の宮藤壺が、まだ入道なさらない前に、「九重に霧や隔つる雲の上の月を遙に思ひやるかな」と詠んで、侍女の命婦をして源氏のもとに送りなされた、あの當時のことどもが、源氏には言ひやうもないほど戀しくなつてきた。その他折々の事どもを追想なさるについても、ついでよよと聲を放つてお泣きなさるのである。

「夜更け侍りぬ」と聞ゆれど、なげ入りたまはず。

の歌——補欄参照。
○その夜——藤壺が「霧や隔つる云々」と歌を詠まれた夜をさす。
○うへの——朱雀院の。
○院に——桐壺院に。
○恩賜の御衣——菅原道真の、去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷、恩賜御衣今在、此、捧持毎日拜、餘香」といふ詩句をいふ。菅家後集にある。
○御衣はまことに——前に朱雀帝より御衣を賜つたことがあつた。
○うしとのみひとへに云々の歌——補欄参照。

源氏

見るほどぞしはしなくさむめぐりあはむ月の都ははるかなれども
その夜、うへのいとつかしう、昔物語などし給ひし御さまの、院に似奉り給へりしも、戀しく思ひ出て聞え給ひて、「恩賜の御衣は、今ここにあり」と誦じつつ入り給ひぬ。御衣はまことに身放たず、傍に置き給へり。

源氏

侍臣の人たちは、「もう夜も深更になりましたから、君にはお休みなさいませ」と申上げるのであるが、それでも源氏の君は御就寝にならない。源氏は、

見るほどぞしはしなくさむめぐりあはむ月の都ははるかなれども
とお詠みになり、藤壺が「霧や隔つる云々」と詠んだその夜は、朱雀院がたいへんなつかしいさまで、昔物語をなさつたのであるが、その様子が、先帝桐壺院によく似てゐられたことどもを、戀しく思ひ出だしなされた、菅公の「恩賜の御衣は、今此にあり」といふ詩の句を誦しながら、寢室にお入りになつた。

菅て帝よりいだいだ恩賜の御衣は、まことに御身から少しも離さないで、傍に置いておかれた。又一首の歌を、

うしとのみひとへに物はおもほえてひだりみぎにもぬるる袖かな
とお詠みになつた。

〇見るほどぞしばし云々の歌——都を月の都としてよんだ歌である。都は遙に遠いのであるし、われが都に歸るのもまだ遠いことであるだらう。然しかうして月に對しながら都の方を眺めてゐる間なりとも暫し心を慰めるのである。〇うしとのみひとへに云々の歌——かく遠國に配流せられてゐても、我が身をかくせられたからといつて帝に對して一途に恨めしいとも思はない。御衣をいただいたことをおもへば、又帝が懐しくもある。とにかくにもあれやこれやと思ひが亂れて、袖が涙に濡れることである。

その頃大貳は上りける。嚴しう類ひろく、むすめがちにて所せかりければ、北の方は船にてのぼる。浦づたひに逍遙しつづくるに、外よりおもしろきわたりなれば心とまるに、大將かくておはすと聞けば、あいなうすいたる若き女たちは、船の内さへ恥かしう、心げさうせらる。まして五節の君は、綱手ひき過ぐるも口をしきに、琴の聲風につきて遙に聞ゆるに、所のさま人の御ほど、物の音の心ほそさ取り集め、心あるかぎり皆泣きにけり。

その頃、太宰大貳が任期も満ちて、筑紫から上京してきた。彼には一族の子どもが仰々しいほど多く、娘どもも多いので共々に歩くのがせま苦しい點があつた。それで北の方は娘達を引率して船路で上られた。浦邊に沿うて見物遊びをしながらゆる／＼と來られると、やがて須磨に到達した。この須磨の地は他より風景のよいところであつたからして、自然と注目されるのである。その上源氏の君が斯うして配所に佗住居をしてゐられると聞いたので、無闇に浮氣な若い娘達は船中にゐるのでさへも、源氏の君に見られたかのやうに恥かしがり、心をときめかされるのである。ましてや、五節の君は、船がここを素通りするのを残念に思しめされる。折から源氏の君が弾いてゐられる琴の聲が、吹く風にもなつて遠く聞えるので、須磨の場所柄といひ、源氏の君の御境遇といひ、琴の音の心細さといひ、萬感交々胸に迫るので、船中の人々で、物の哀を解する人たちは皆泣いてしまつた。

今まで「釋迦牟尼佛弟子」など讀誦しなされる源氏の佗びしくも寂しい景ばかりであつたが、この段に至つては、あいなうすいたる若き娘達の騒ぎ立ててゐる花やかな場面に立ち歸つてきた。

帥御消息きこえたり。いと遙なるほどより罷り上りては、まづいつしか侍ひて、都の御物語もとこそ思ひ給へ侍りつれ。思の外にかくておはしましける、御宿を罷り過ぎ侍る、かたじけなく悲しう侍るかな。あひしりて侍る人々、さるべきこれかれまで來迎ひてあまた侍れば、所狭きを思ひ給へ憚り侍る事も侍りて、え侍らはぬこと、殊更に參り侍らむ」など聞えた

〇大貳——花散里の巻に見えた五節の君の父で、名は明かでないが太宰大貳であつたのが、任滿ちて上京し、その途次である。〇類ひろく——一族が廣く。〇北の方は——女だちを連れて。〇逍遙しつづくるに——遊びながらくると、この須磨は外より景色のよい所なので。〇あいなうすいたる——無闇に浮氣な。〇五節の君——嘗て源氏と關係のあつた女。大貳

の頃である。〇綱手ひき過ぐるも——船がここを素通りするのにも残念なので、綱手は撥をいふ。〇琴の聲——源氏の弾きなされるのである。〇人の御ほど——源氏の君の境遇。

〇帥——大貳を帥と呼んだものである。太宰帥の缺員があるときには、大貳が代理をつとめるので、かく帥と呼ぶこともある。恰度、介を守と呼ぶと同然。〇まづいつしかと侍ひて——先づ何時か早く御面會して。〇都の御物語も——都の

り。

太宰大貳は源氏の君に、御消息文を奉つた。その文に曰く、「絶遠の筑紫より上京するについで、先づ何時か早く御面會して、君から留守中の都の御物語をも承りませうと存じておりました。然るに源氏の君におかせられては、意外にも斯うした須磨の地に佗住居をしてゐられる。その御住家のあたりをただ今素通りするとは、まことに恐れ多くもあり、悲しい事でもありません。ところが私の知人の然るべき誰彼が、私を迎に來てゐまして、多勢でありますから、窮屈に感ぜられ、君に對しても遠慮されることどももあります。それ等のことからしてこの度はお伺ひはいたしません。然しいづれ歸京後、改めて出なほし、君の住家をおたづねいたすのでありませう」などと書いて送られた。

子の筑前の守ぞまゐれる。この殿の、藏人になし願み給ひし人なれば、いともかなし、いみじと思へども、又見る人々のあれば、聞えをおもひて、しばしもえ立ちとどまらず。都離れて後、昔親しかりし人々、あひ見る事難うのみなりにたるに、かくわざと立ちより物したる事とのたまふ。御返もさやうになむ。守なくくかへりて、おはする御有様語るに、帥よりはじめ、迎への人々、まがくしう泣きみちたり。

物語をうけたまはらうと存じておました。
○罷り過ぎ侍る——素通りする。
○來迎へて——迎に參つて。
○所狭きを思ひ給へ——窮屈であるのを遠慮する。
○元侍らぬ——お伺ひ申さないのは残念であります。
○殊更に參り——京より出なほして、改めて參上いたしました。
○筑前の守——大貳の子。

○この殿の——筑前守は、昔て源氏の君が自分の御殿の藏人としてやつて愛したまつたものであつたから。
○いともかなし云々——筑前守が源氏の境遇に同情して、まことに悲しくたいへんな事だとは思つたが。

○見る人々のあれば云々——他の人目もあることだから、世の噂も考へて。
○御返も——大貳への返事も同じやうにされた。
○おはする御有様——源氏の君の御様子。
○まがくしう——氣味の悪いほど。不吉なほど。

○とかくして——手紙の文句を考へたり、恥ぢためらひたりなど、とやかかくして。
○琴の音にひきとめらるる云々の歌——袖欄參照。
○人などがめそ——古今集戀一、よみ人知らずに、「いでわれを人などがめ

貳からの消息文は、その子の筑前守が持參して源氏のもとに參つた。この筑前の守は、嘗て源氏の君が御自分の御殿の藏人となして愛してゐられた一人であつたから、現在の源氏の君の御境遇を見奉つた彼筑前守は、昔と變つた君の身上をまことに悲しいことだ、たいへんなことになつたものだと思つたのであるが、あたりにゐる人々の手前もあるから、あらぬ噂が立つてもならぬと考へて、暫しも立ちとどまらず、使の任務を果すと直ちに立ち歸つた。このとき源氏は彼に向つて、「都から遠く離れたこの土地に來てからは、昔親しくしてゐた人々と相逢ふこともむづかしくなつてきたのに、汝が斯くわざ／＼立ち寄つてたづねてくれたのが、まことにかたじけないことである」と仰せらる。又大貳への返書にも右と同じやうなことどもが書いてあつた。

さて筑前守はそれから歸つて、源氏の君のおいでなさる有様を話すと、太宰大貳を始めとし、迎の人々までが、氣味の悪いほど泣いた。

五節はとかくして聞えたり。

「琴の音にひきとめらるる綱手なはたゆたふころきみしるらめやすきくしさも、人などがめそ」と聞えたり。ほほゑみて見給ふ。いとほづかしげなり。

「こころありてひくつての綱のたゆたはらち過ぎましや須磨の浦浪

いさりせむとは思はざりしはや」とあり。驛の長に句詩とらする人もありけるを、まして落ちとまりぬべくなむ覺えける。

五節の君は源氏の君に御手紙を差上げようといふので、文句を考へて見たり、或は又恥づかしいと思つたり、とやかくと躊躇しながらも、遂に手紙を書いて使者に託し源氏のもとに送つた。その中に、

「琴の音にひきとめらるる綱手なはたゆたふころきみしるらめや
斯うしたすきなこともも「いで我を人などがめそおほふねのゆたのたゆたに物思ふ頃」といふ古歌のやうに、お咎め下さるな」と申上げられた。源氏の君はこれを受取つて、微笑を浮べながらごらんになる。すると源氏が五節の浮氣心をさげすみなさるものと、使者の人はいと恥づかしく思つてゐる。

源氏からの返事には、

「ころありてひくての綱のたゆたはうち過ぎましや須磨の浦浪

「思ひきやひなの別れに衰へてあまの繩たぎいさりせむとは」と詠んだ眞朝臣のやうに、我も斯うした邊鄙な須磨の地で漁夫のやうな生活をしようとは思はなかつたよ」と書かれた。昔菅原道眞は筑紫に流謫されたときに、明石の驛にて、驛の長に「驛長勿驚時變改、一榮一落是春秋」といふ句詩を與へてゐるが、この度源氏から五節に與へられた歌を見た彼女は、ただ感概

そおほふねのゆたのたゆたに物おもふころの意。
○いとほしかしげなり——源氏が五節のいでがましきを笑ひなさるのだからと、使の人が恥づかしさうにしてゐる。
○ころありてひくて云々の歌——補欄参照。
○いさりせむとは思はざりしはや——我はかうした鄙の海岸で、漁夫のやうな生活をしようとは思へてゐなかつたよの意。古今集卷十八、雜下に、隱岐の國に流されて侍りける時よめる、篁の朝臣として、「思ひきやひなの別れに衰へてあまの繩たぎいさりせむとは」の歌による。
○驛の長に句詩云々——菅原道眞筑紫に流されるとき、明石の驛にて、「驛長勿驚時變改、一榮一落是春秋」の句を吟じたことをさす。句詩は全詩に對していふ。一説には口

詩なりともいふ。
○落ちとまりぬべく——「落ち」は人々の後に残ること、五節はこの儘須磨にとどまりたいほど感じ入つた。

○戀ひ聞ゆる——源氏を。
○命婦——王命婦。
○入道の宮——藤壺。
○春宮の御事——東宮は實際源氏の子であることを怖しく思はる。
○御兄弟の御子たち——源氏の兄弟の宮達。
○初つかに——源氏が謁居の當初は。

無量で、もうここで一行の人々と別れ、彼女だけ残り残らうかとまで考へたのであつた。

○琴の音にひきとめ云々の歌——「綱手なは」引舟の引綱、「たゆたふ」はゆら／＼とゆれて定まらぬこと、轉じて躊躇する意。歌の意は、源氏の君が弾いてゐられる琴の音を聞いては、私の乗つてゐる私の綱も引き止められ、ここにゆら／＼と止められました。さうした私の心も君に引かれてどうしやうかと迷うてゐますが、斯うした心持は君にはお分りになりますか。

○ころありてひくて云々の歌——われ源氏に心をよせて下さるので、引き舟の綱が果してゆら／＼と止められてゐるならば、あなたは決してこの須磨の浦を素通りなさることはあるまい。

都には月日過ぐるままに、帝をはじめ奉りて、戀ひ聞ゆる折ふし多かり。春宮はまして常に思し出でつつ、忍びて泣きたまふを、見奉る御乳母、まして命婦の君は、いみじうあはれに見奉る。

入道の宮は、春宮の御事をゆゆしうのみ思ししに、大將もかくさすらひ給ひぬるを、いみじう思しなげかる。御兄弟の御子たち、むつまじう聞え給ひし上達部など、初つかたは訪ひ聞え給ひなどありき。

さて都の方では、月日の経過するにつれて、帝をはじめとして、その他の人々が、源氏の君のゐらせられないのを淋しく思ひ、戀ひ申す折がたび／＼あつた。まして東宮は常に源氏の君

のことどもを思ひ出して、しく／＼と泣きなさるので、そのさまを見てゐる御乳母は氣毒なことだと思つてゐる。まして王命婦は、東宮は源氏の實子にあたるといふやうな内密なことまでも知つてゐるのであるから、一層人よりもまさつて氣毒に思つてゐた。

入道の宮藤壺は、東宮が源氏の實子にあたるのを、常にこわいことだと思つてゐたのに、今又斯うして源氏の君が須磨に流謫の身となつてゐられるのを、たいへん悲しみなげいてゐられる。源氏の御兄弟にあたる皇子たちや、睦しく交際してゐられた公卿達などは、源氏が須磨に去られた當初だけ、安否をたづねるおたよりを送られた。

あはれなる文を作りかはし、それにつけても世の中にのみめてられ給へば、後の宮聞し召して、いみじくの給ひけり。公の勤事なる人は、心にまかせて、この世のあぢはひをだに知る事かたうこそあなれ。おもしろき家居して、世の中を誹りもどきて、かの鹿を馬と言ひけむ人の、僻めるやうに追從する」など、あしき事ども聞えければ、わづらはしとて、絶えて消息聞え給ふ人なし。

源氏が都の人々と文通をなさるときは、あはれ深い詩を作つて贈答なされた。その詩が又なか／＼立派なものであつたので、かういふことからしても、源氏は世人から褒められた。

○あはれなる文を云々——源氏は都からの訪客と情趣深い詩を唱和されたので、その立派なのを見た世人が、源氏は立派な才人だと褒め申した。
○後の宮——弘徽殿の太后。
○いみじくの給ひけり——ひどくあしざまにけなしなかつた。
○公の勤事——勅勸を蒙つた人は。
○この世のあぢはひ云々——日々の食事すら恣に取るのでさへむづかしい

のである。
○おもしろき家居して——源氏が須磨で風雅な邸宅を營み。
○世の中を誹り——世間を非難したり、反対したり。
○かの鹿を馬と言ひ——秦の趙高が權勢を持って二世皇帝に鹿をさして馬と言つたことをいふ。

○二條院の姫君——紫上。
○東の對に侍ひし人ども——源氏に仕へてゐた、中將中務などいふ侍女たち。
○渡り参りし——紫上のゐられる西の對屋に移つ

これを弘徽殿の太后がお聞きになり、ひどくあしざまに君をけなしおとされた。その詞に「源氏のやうに勅勸を蒙つてゐるものは、心のままに世間の氣分を味ふのでさへむづかしいのだから、ひたすら世間とは没交渉になつて謹慎してゐるべきのに、知人と交際したり、風雅な邸宅を作つて、世に反対し非難して、かの趙高が鹿を馬といつたやうな横車に、群臣どもが阿附して邪惡なものどもが横暴な源氏に追從することである」など、よからぬことどもが聞えてきたので、親しき間柄であつた都の人々も、どんな面倒なことが起るかも知れないといふので、それからは決して源氏と文通する人も無くなつた。

「かの鹿を馬と言ひけむ人の、僻めるやうに追從する」の句には脱落があるやうで意味が通じにくい。河内本には、「かの鹿を馬といひけむやうに、もて僻めたる人の追從するなり」とある。「鹿を馬」と言つたことは、史記の秦始皇本紀の、「趙高欲爲亂、恐羣臣不聽、乃先設驗、持鹿獻於二世、曰、馬也、二世笑曰、丞相誤邪、謂鹿爲馬、問左右、左右或默、或言馬、以阿順趙高、或言鹿者、高因陰中諸言鹿者以法。後群臣皆畏高。」の故事をいふ。

二條院の姫君は、程經るままに思し慰むをりなし。東の對に侍ひし人ども、皆渡り参りしはじめは、などかさしもあらむと思ひしかど、見奉り馴るるままに懐かしうをかしき御有様、まめやかなる御心ばへも、思ひやり深う哀なれば、まかてちるもなし。なべてならぬきはの人々には、ほの見えな

た最初は。
 ○などかきしもあらむ——紫上は評判の美しい方だといふが、どうしてそんなやうなことがあらうと。

○まめやかなる御心ばへも——愛して下さる實意の心も。

○まかでる——暇をもらつて退去するものはない。

○なべてならぬきはの人々——身分高貴な女房連には、物を隔てて時々面會なさる。これ訪問の女ともいふ（即ち侍女にあらずと）。

○そこらの中に勝れたる——多くの女のなかで、紫上を特に源氏が愛しなされるのも無理はないと、女房どもが紫上を見奉つた。

○かの須磨には——彼の須磨にゐられる源氏は。

○え念じ過すまじう——紫上を呼び迎へなくては

居られないやうに。

○いかでかは打ち具しては——この下に「あらむ」を補うて解くべし。どうして紫上を迎へて一緒に居られようか。

○つきなからむ——具合が悪いだらう。

○見給へ知らぬ——玉の小櫛補遺に曰く「見給ひ知らぬ」なりと。

○めざましうかたじけなう云々——源氏の君自らが、興さめて自らが勿體なく思召さる。

○柴——山野の雑木の枝などを刈りとりて薪にするもの。

○山がつのいほり云々の歌——補欄参照。

どし給ふ。そこらの中に勝れたる御心ざしも、道理なりけりと見奉る。

二條院にゐられる紫上は、歳月の経過するにつれて、いよ／＼源氏の君が懐しくなり、心を慰める折もない。

嘗て源氏の御部屋であつた東の對屋に仕へてゐた中將とか中務といふ侍女どもも、皆西の對屋に移つて、今は紫上にお仕へするやうになつた。これ等の侍女どもは西の對屋に來た當初こそは、美しいといふ評判の高い紫上であるとしたとて、さうたいした美しい方でもないだらうと思つてゐたが、だん／＼馴れて見奉るに従つて、懐しう趣のある方である。又實意をこめて愛して下さる御氣だても、なか／＼愛情深く同情あるさまである。それで彼等侍女どもはお暇をいただいて下るなどせず、専ら仕へてゐた。

身分高貴な女房たちには、時々物を隔てて御面會をなさる。源氏の君が多くの女性の中で、この紫上だけは特に真心をこめて愛してゐられたのも、なるほど無理からぬことであると、侍女たちは思ひながら紫上をながめて居た。

かの須磨には、久しうなるままに、え念じ過すまじう覺え給へど、わが身だにあさましき宿世とおぼゆる住居に、いかでかは打ち具しては、つきなからむさまを思ひ返し給ふ。

彼の須磨に住居をしてゐられる源氏の君は、歳月の久しく経過するにつれて、紫上を呼び迎へないではとても居られないやうに思ひなまつた。

然し自分自身でさへもどうして、斯うした住居をしなければならぬのかと、前世の宿業もあ

さましく思はれるほどなこの住家に、どうして彼紫上を迎へとつて一緒に暮されるだらうか、又さうしてゐては世間に對しても具合の悪いことだらうとも考へられて、彼女を迎へることは思ひ止めてゐられる。

「かの須磨には」の句は、一本（湖月本など）には、「かの御住居には」となつてゐる。本書は首書本によつた。

所につけてはよろづの事さまかはり、見給へ知らぬ下人のうへをも、見給ひならはぬ御心ちに、めざましうかたじけなう、自らおぼさる。煙のいと近く時々たちくるを、「これや海士の鹽焼くならむ」と思しわたるは、おはしますうしろの山に、柴といふものふすぶるなりけり。めづらかにて、

山がつのいほりにたけるしば／＼もこととひこなむ戀ふる里人

斯うした鄙の須磨であるからして、萬事のことどもが都とはすつかり變つてゐる。今まで見たこともない下賤な民どもを、今や直接眼前にお見なさるのだから、かくまで零落したわが身の上を興なく勿體ないものになつたと、御自身からお考へになる。

時々、煙がいと近くまでたなびいてくるので、源氏はこれを見て、「さてはこれが、あの詩文に

いはれる漁夫どもの鹽焼くときの煙であらう」と思つてゐられるが、この煙はさうでなく、御住居の背後の山中で柴といふものをけぶらし焼いてゐる煙であつた。源氏の君は珍しい煙だとごらんになつて一首の歌、

山がつのいほりにたけるしば／＼もこととひこなむ戀ふる里人

○山がつのいほり云々の歌——山賤の庵に焼いてゐる柴といふ言の如く、屢々われの住家を訪ひたづねて下さい。都にゐる戀しい人々よの意。第一、二句は第三句の「しば／＼」といふ語にかかる序詞である。

○大輔——民部大輔惟光。
○心とどめて云々——源氏は特に意を用ひて奥の手を弾きなさるるので。
○こともの聲ども——良清惟光などは歌や笛を止めて。
○昔胡の國に遣しける女を云々——漢元帝竟寧元年に、呼韓邪單于來朝し婿たらんことを欲したので、宮中の醜女を遣はすことになつたが、毛延壽は王昭君を最も醜く畫きたるため、王昭君は遂に胡國に嫁することになつた。

冬になりて雪ふり荒れたる頃、空の氣色もことに凄く眺めたまひて、琴を弾きすさび給ひて、良清に歌をうたはせ、大輔横笛吹きて遊び給ふ。心とどめてあはれなる手など弾き給へるに、こともの聲どもはやめて、涙をのごひあへり。昔胡の國に遣しけむ女をおぼしやりて、ましていかなりけむ。この世にわが思ひ聞ゆる人などを、さやうに放ちやりたらむことなど思ふも、あらむ事のやうにゆゆしくて、霜の後の夢と誦じたまふ。月いとあかうさし入りて、はかなき旅のおまし所は、奥までくまなし。床の上に夜深き空も見ゆ。

たのをさす。
○ましていかなり——我は紫上とかく近くてさへ斯くの如し、まして遠く夷の國に王昭君を遣したる漢帝の心や、いかがであつたらう。
○さやうに放ち云々——紫上を王昭君のやうに遠く夷の國にやりたらばどのやうであらうか。
○あらむ事のやうに——そのやうな場合が事實起り来さうに。
○霜の後の夢——大江朝綱が王昭君を詠じた詩の句に「胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前腸」とあるをさす。和漢朗詠集雜の部に出づ。
○床の上に——座敷にゐながら、深更の月も見えろといふので、軒の短き家のさまである。

もう冬の時節となり、雪降り荒れる頃、源氏の君は、空の氣色を殊に物凄く思つて眺めてゐられた。折から物淋しい心を慰めようと、君は琴をお弾きあそばされ、良清に歌をうたはせ、民部大輔惟光は横笛を吹きてお遊びになる。このとき源氏の君は眞心をこめて、琴の奥の手の興趣あるところをお弾きなさるので、良清や惟光は歌つてゐた歌や横笛を止めて、ただ源氏の琴の音に聞きとれ、感涙を催してゐる。

源氏は、昔支那漢の元帝が竟寧元年にわが愛する美姫王昭君を胡國へ嫁せしめられたことを想像し、今自分が愛する紫上とは僅か都と須磨といふやうな間を隔つてゐても、悲しさ懐しさに堪へないのに、ましてあの元帝が寵姫を遠く夷の國にやつたときは、どのやうに悲しんだことだらうか。若しわが愛する紫上などを、王昭君のやうな所へ放ち遣したならばどうであらうかと、單に假定して想像されるだけだが、それが現實に事實としてあらはれることのやうに思はれ、忌々しくなり、大江朝綱が王昭君を賦した「胡角一聲霜後夢」といふ詩の句を誦しなさる。折から月光あかるくさし込んでくる。君のゐられるささやかに粗末な旅の宿は、奥行や軒も小さいので、さしこむ月光は家の奥の間まであかるく照してゐる。座敷にゐながらにして、深更の空がながめられる。

○霜の後の夢——大江朝綱が王昭君と題して作つた詩は、「翠黛紅顏錦繡粧、泣尋沙塞出。家郷、邊風吹斷秋心緒、隴水流添夜淚行、胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前腸、昭君若贈黃金賂、定是終身捧漢王」である。

○ただこれ西に行くなり
 —菅原道真の詩の句、
 「唯是西行不左遷」をさ
 す。
 ○いづかたの雲路云々の
 歌—補欄参照。
 ○とも千鳥もろご云々の
 歌—補欄参照。

入方の月すごく見ゆるに、「ただこれ西に行くなり」と、ひとりごち給ひて、
 いづかたの雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこともはづかし
 とひとりごち給ひて、例のまどろまれぬあかつきの空に、千鳥いとあはれ
 になく。

とも千鳥もろごゑになくあかつきはひとりねざめの床もたのもし
 まだ起きたる人もなければ、かへすくひとりごちて臥し給へり。

今にも沈まうとしてゐる月が、物凄く光つてゐる。この月をながめられた源氏は、「唯是西行
 不左遷」といふ菅原道真の詩の一節を、獨りで朗誦なされ、更に一首の歌、
 いづかたの雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこともはづかし
 と、ひとりで言ひながら、いつもの如くすこしも眠りにつかれない。折から曉の空に千鳥がい
 と哀に鳴いて行つた。源氏又一首の歌、
 とも千鳥もろごゑになくあかつきはひとりねざめの床もたのもし
 と歌ひなさる。曉とはいへまだ誰も起きてゐる人がないので、源氏は幾度となくこの歌を吟詠
 しながら、さて就床なされた。

○ただこれ西に行くなり—菅原道真の詩集、菅家後集に、



問秋月

度_レ春度_レ夏只今秋 如_レ鏡如_レ環本是鈎 爲問未_ニ曾告_ニ終始_一 被_レ掩_ニ浮雲_一向_レ西流

代_レ月答

荳發桂芳半具圓 三千世界一周天 天迴_ニ玄鑑_ニ雲將_レ霽 唯是西行不_ニ左遷_一

とある詩から引用したものである。

○いづかたの雲路に云々の歌——月は東より出でて西に行く一定の路があるけれども、われは今後、天涯何れの地をさして迷ひ行くことであらうか、さても月から見られるのも心恥づかしいことである。

○とも千鳥もろご云々の歌——群れになつて飛んで行く友千鳥の鳴き行くを見れば、泣いてゐるものは、曉の床に獨り寝さめて泣いてゐる我のみでなく、彼等友千鳥も鳴いてゐるのだから、何となくたのもしい感じがした。

夜深く御手水まゐりて、御念誦などし給ふも、珍らしき事のやうに、めてたくのみおぼえ給へば、え見奉り捨てず、家にあからさまにもえ出でざりけり。

明石の浦はただはひ渡るほどなれば、良清の朝臣、かの入道の女を思ひ出でて、文などやりけれど返事もせず。父の入道ぞ、「聞ゆべきことなむ。あ

○珍らしき事のやうに——都での振舞と異つて珍しいなされ方で、立派な御有様だと近侍の人々が思つたので。
○家にあからさまにも云々——従者等が一寸でも、自分の宅に歸らうとはしない。
○はひ渡るほど——陸行

からさまに對面もがな」と言ひけれど、うけひかざらむものゆゑ、行きかかりて、空しくかへらむ後手もをこなるべしと、屈しいたうてゆかず。

源氏はいつちも夜もまだ明け切らないうちから起き出でて、手水をつかひ、身を清めて念佛讀經などをなさる。このさまは都にゐられた當時などと比べると、まことに珍らしいことなので、近侍のものども君には珍らしいことをおやりになり、立派なさまであると思つたので、源氏の御傍を少しも離れず、又この地のわが住家へも歸らなかつた。

明石の浦は、この須磨の地とは極く近いところなので、這つてでも行かれさうであつたから、良清の入道は、彼の明石の入道の娘のことどもを思ひ出して、彼のすき心から手紙を送つて見たが、娘からは何とも返事をせない。ただ父の入道が良清のもとへ、「私が申上げたいことがありますから、一寸なりともあなたにお目にかかりたいのであります」といふたよりがあつた。然し良清は、彼の娘はどうせ承知してくれないのだから、さうした女に手を出して、遂には断られて、すごとくと歸るのも、その後姿は見にくい馬鹿らしいものであらうと思つたから、がっかりしてもう行かなかつた。

明石入道はもと近衛の中將であつたのが、世のひがもので官を捨てて播磨守となり、遂に入道したのである。かうした明石入道の詳細なこと、及び良清がその入道の娘に心をよせてゐたことは、本書卷一、若紫卷の四八四頁より書かれてゐる。

して行くほどといふのでごく近いことをいふ。
○かの入道の女——若紫の巻で、源氏が北山に行かれたとき、良清が噂してゐた明石入道の娘で明石の上と稱す。
○聞ゆべきことなむ——申上げたいことがありませんから、一寸御目にかかりたいものですと、父入道の良清への手紙。
○うけひかざらむものゆゑ云々——どうせ承知しなうもない女であるから、そんな女に引きかかつて、結局だめとなつて引込む後姿も馬鹿らしいだらうと、良清はがっかりして行かない。

○世に知らず心だかう思へるに、國の内は、守のゆかりのみこそは、畏きこと
 に入道はたぐひないほど
 心を高くしてゐる。
 ○國の内は云々——土地
 の人々は、國守の一族を
 最も偉いものと思つてゐ
 るが、ねぢけた入道の心
 では播磨守の子の良清で
 も眼中に置かないで来た
 のに。

○この君——源氏。
 ○公の御かしこまりにて
 ——朝廷からの譴責で。
 ○あこの宿世にて——我
 が娘が源氏に嫁ぐべき前
 世からの因縁があつて、
 こんな地に源氏が謫居さ
 れるやうな事になつた
 のである。「あこは吾子
 の意。」

○あなかたはや——まあ
 とんでもないをかしいこ

世に知らず心だかう思へるに、國の内は、守のゆかりのみこそは、畏きこ
 とにすめれど、僻める心は更にさも思はで、年月を経けるに、この君かく
 ておはすと聞きて、母君に語らふやう、「桐壺の更衣の御腹の、源氏の光君
 こそ、公の御かしこまりにて、須磨の浦にもし給ふなれ。あこの宿世に
 て、覚えぬ事のあるなり。いかでかかる序に、この君に奉らむ」といふ。

○明石の入道は、たぐひないほど高い心で偉いと思つてゐたが、國內の人々は國守の一族だけ
 は尊崇するやうであつたが、ひがんだ心を持つてゐる入道は、そんなことは少しも考へないで、
 われのみ偉いと思つて年月を送つてきた。

折から源氏の君が須磨に謫居中であるといふことを聞いて、わが妻に語るには、「桐壺の更衣の
 腹にお生れになつた光源氏の君は、このたび朝廷の譴責を蒙つて、須磨に佗住居をしてゐらつ
 しやる。これといふのも吾が娘が前世からの宿縁で、源氏と吾が娘との縁が結ばれるべき奇し
 き機會であるのだ。何とかしてこの機會にわが娘を源氏に奉らう」といふ。

○前段に於て、明石入道が良清に、「聞ゆべきことなむ、あからさまに對面もがな」といつてや
 られたのは、良清に娘を興へるからとの用事でなくして、その意志は源氏にあつたのである。

母、「あなかたはや。京の人の語るを聞けば、やむごとなき御女ども、いと

とだ。「かたはやしは世の
 並ならぬをいふ。
 ○帝の御女——帝の持つ
 てゐられた臘月夜の君、
 ○かくも騒がれ——臘月
 夜の一件でかく、須磨に
 下るなどとなり。
 ○山賤を——こんな田舎
 娘を。

○えしり給はじ云々——
 なに御身に分るものか、
 私には別の考がある。
 ○さる心をし給へ——娘
 をさしあげる準備をせ
 よ。

○ついでして云々——よ
 い機會をとらへて、源氏
 をここへも迎へませう。
 ○心をやりていふ——得
 意になつていふも。
 ○かたくなし——頑固一
 徹に。

○まばゆきまで云々——
 家内をかがやくほど飾
 り、娘をも大切にしてい
 た。

多くもち給ひて、そのあまりに、忍びく、帝の御女をさへ過ち給ひて、
 かくも騒がれ給ふなる人は、まさにかくあやしき山賤を、心とよめ給ひて
 むや」といふ。
 腹立ちて、「えしり給はじ。思ふ心ことなり。さる心をし給へ。ついでして
 此處にもおはしまさせむ」と、心をやりていふも、かたくなしく見ゆ。ま
 ばゆきまでしつらひかしづきけり。

○入道の妻は答へて、「まあ、とんでもないをかしいことだ。都の人々の話しを承りますと、源
 氏の君は、身分の高いよい女だちを、たいへん澤山お持ちになり、なほ満足が出来ないといふ
 ので、その結果は帝のお持ちの臘月夜に對してまでも過をしでかし、そのためかうした騒ぎと
 なり、鄙の須磨に佗住居をなさるやうになつたのである。このやうな源氏の君が、私の家のや
 うな賤しいものの娘に、心をとどめなさるでせうか、そんなことはありませんよ」と言ふ。
 すると夫の入道は、いたく怒つて、「なにお前には分るものか、われには別な考がある。わが娘
 を源氏に奉る準備を早くしなさい。よい機會をこしらへて、源氏の君をこの家にお迎へしよう
 と、頗る得意になつて言つてゐるが、その態度は頑固一徹の男に見える。これからは家の内を
 かがやくほど立派に裝飾し、娘は大切に育ててゐた。」

評 入道かわれ一人頑固一徹で押し通さうとしてゐる姿が躍如として出てゐる。

母君、「などてめでたくとも、物のはじめに、罪にあたりて流されおはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても心をとどめ給ふべくはこそあらめ。戯れにてもあるまじき事なり」といふを、いといたくつぶやく。

○などてめでたくとも云々——先方の源氏の君がいかにか立派な方だといつたとて、始めて娘を嫁づかせるのに、罪にあつた流人を選ぶことがどうして出来よう。
○さても心を云々——それでも源氏が娘に心を注いで下さるならばよいだらうが。
○戯れにても——戯談にもそんなことはないだらう。
○つぶやく——入道がぶつ／＼小言をいふ。

入道の妻は、「先方の源氏の君が、いかにか立派な方だといつたとて、始めて縁づかせるわが娘を、罪にあつた流人に嫁がせることが出来ようか、そんなことは出来ない。それでも先方の源氏が、わが娘に心を注いで下さるならば、又考へやうもあらうが、源氏がわが娘に心を注ぎなざるなどは、戯談にもないだらうと思はれるのである」といふので、これを聞かせられた入道はぶつ／＼と小言を言つた。

評 入道の妻は前段に、「あなかたはや、京の人の語るを聞けば云々あやしき山賤を心とゞめ給ひてむや」と言つて、先方の高貴なのを恐れてゐたが、彼の妻の眞情は決してこの點にあつたのではなくして、「などてめでたくとも、物のはじめに、罪にあたりて流されおはしたらむ人をしも思ひかけむ云々」の心こそ、その眞意であつたに違ひない。

「父」 罪にあたることは、唐土にもわが朝にも、かく世に勝れ、何事にも人にことになりぬる人の、必ずあることなり。いかに物し給ふ君ぞ。故母御息

○いかに物し給ふ君ぞ——一體源氏の君はどのやうな方だと思ふか。
○故母御息所——源氏の

亡き母君は、わが叔父の按察大納言の女である。○かうぞくなる名——勝れた娘であるとの評判。○國王——桐壺帝。○この君の——源氏の君が忘形見として生存してゐられるので。○心を高く——心だてを高尙に。○思し捨てじ——源氏はわが娘を輕蔑なさることはない。

所は、おのが叔父に物し給ひし、按察大納言の御女なり。いとかうぞくなる名をとりて、宮仕に出し給へりしに、國王勝れて、時めかし給ふ事ならびなかりけるほどに、人のそねみ多くてうせ給ひにしかど、この君のたまり給へる、いとめでたし。かく女は、心をたかくつかふべきものなり。おのれかかる田舎人なりとて、思し捨てじ」など言ひ居たり。

評 入道言ふには、「我々が罪に處せられるといふことは、唐土でもわが國でも、源氏の君のやうに、世からぐつと抜んで、何事にも人と異つてすぐれてゐられる人には、必ず起り得ることである。一體源氏の君はどのやうな方だと思ふのであるか。源氏の故母君は、おれの叔母にあたる按察大納言の御娘である。非常にすぐれた方であるといふ評判があつて、宮中に女官としてお仕へなされたところが、時の桐壺帝が、特別に寵愛なさること、女官中で比類ないほどになつた。とかくしてゐる間に、他の女官だから嫉妬を受けることが甚だしくなり、遂にその爲めに亡くなられ、この源氏の君だけが忘形見の子として残りなされたのは、まことに立派なことである。この源氏の生母桐壺の更衣のやうに、女といふものは心だてを高尙に持つべきものである。決して自ら卑下すべきでない。自分は斯うした田舎ものであるといふので、わが娘を輕蔑なさることはないだらう」など語つてゐた。

補 ○おのが叔父に物し給ひし——この關係は、

大臣——入道播磨守 明石の入道也 明石上

按察大納言——桐壺更衣 源氏の御母

○あてはかに——あてやかに同じ。高貴なさま。
○身の有様を——明石上は、おのが身分賤しいのを残念なことだと思つて。

○たかき人は我を云々——高貴の方は自分などは、眼中にも置かないであらう。

○ほどにつけたる世をば——身分相應な夫を持つのは決してせまい。

○思ふ人々に云々——懐しく思つてゐる父母に死に別れて、一人ぼつちになつたならば。

この女むすめすぐれたる容貌かたちならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げにやむごとなき人に劣るまじかりける。身の有様を、口惜しきものに思ひ知りて、「たかき人は、我を何の數かずにもおぼさじ。ほどにつけたる世をばさらに見じ。命長くて思ふ人々に後あきれなば、尼あまにもなりなむ、海の底そこにも入りなむ」などぞ思ひける。

この入道の娘(明石上といふ)は、さほどすぐれた美人といふわけではなかつたけれども、接してもなつかしい點があり、高尚でありなさる。又氣だてや容姿などぞまことに高貴な方に比べても決して劣ることは無いであらうと見えた。然し明石上御自身は、自分は身分賤しい境遇であるのを残念だと思つて、「高貴な男子の方は、私のやうな賤しい女は、眼中にも置きなさいないだらう。だからとて身分相應なところに嫁いで、一生を終ることは決してしたくない。若し嫁ぐことが出来なくして、命永く生きてゐる間に、懐しく思つてゐる兩親にも死に別れてしまつたならば、尼にでもなつて兩親のあとを弔ひませう。或は又、海中に身を投じて魚の餌ともなりませう」などと思つてゐた。

明石上が、「命長くて思ふ人々に後れなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ」と片意地

なことを言つてゐるが、これは父の性格の感化を受けたもので、嘗て若紫の巻にも「もしわれに後おくれてその志とげず、この思ひおきつる宿世たがはば、海に入りね」などと入道が娘に遺言したことことの書かれたあつたのは、この段との照應である。

父君、所せく思ひかしづきて、年に二度住吉たひまにまうてさせけり。神の御しるしをぞ、人知れずたのみ思ひける。

父入道は、娘明石上を大切に養ひ育て、年に二度づつ攝津の住吉明神に參詣させてゐた。娘は心中ひそかに明神の御靈驗によつて、良縁のあることを一心に頼みとしてゐた。「年に二度住吉にまうて云々」のことは、若菜上の巻にも見えてゐる。

須磨には、年かへりて日長くつれづれなるに、植うゑし若木わかぎの櫻うづほのかに咲きそめて、空の氣色けしきうららかなるに、よろづの事おぼし出でられて、うち泣き給ふ折せ々おほかり。

さて須磨にゐられる源氏の君の御住居はどうであるかといふに、新年になつて、春の日永をつれづれと暮してゐられる。

この御住居を作られるときに、移し植ゑた若い櫻の木も、今や少しつゞ咲き初めて、空の氣色も晴々した頃となつた。かうした折に源氏の君はあれやこれやと追想して、泣きなさる折がた

○父君所せく云々——入道は娘を大切に養ひ。
○住吉——攝津の住吉明神。
○神の御しるしをぞ——住吉明神の靈驗で良縁を得るやうに。
○たのみ思ひける——明石上が。

○須磨には年かへり云々——須磨にゐられる源氏の御住居では。